

沙漠研究

JOURNAL OF ARID LAND STUDIES

目 次

巻頭言 小堀 巍：沙漠に還ろう

総説特集「乾燥地考古学の回顧と展望」

梅村 坦：「乾燥地考古学の回顧と展望」特集にあたって	79- 80
吉村作治：エジプトにおける発掘調査	81- 89
岡田保良：日本発メソポタミア考古学—近年の動向—	91- 98
小谷伸男：アフガニスタン考古学遺跡の現状	99-106
加藤九祚：マルギアナの青銅器時代オアシス集落址 —トゴロク21号神殿遺跡を中心として—	107-115
小島康誉：中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査12年間の総括と今後	117-124

展望総説

藤井秀夫：イラク西南沙漠の自然とヘレニズム期の文化—アッタール洞窟, AIN-シャイアのカナート, 西南沙漠のオアシス群—	125-135
土屋 清：衛星から観測されるデータから求められる植生指数	137-145

原著論文

安部征雄・仲谷知世・桑畠健也・横田誠司：蒸発力を利用した新たな集積塩 類除去法(Dehydration法)と地表灌漑方式によるLeaching法との 比較研究	147-156
---	---------

短 報

真木太一・伊藤代次郎・西川 敦・杜 明遠：中国乾燥地トルファンの防風 林が微気候と植物葉温に及ぼす影響 —タマリスク防風林を事例として—	157-166
--	---------

資料・報告

濱村邦夫：乾燥地研究で日本に求められる3G —第6回乾燥地開発会議の印象—	167-170
--	---------

おあしす [学会報告／会員のページ]

私は、この40数年間、幸いにして世界の主な沙漠地帯を訪れることができた。そしていつも思うことは、各地の地理的特性である。生物相やそこに住む人々の生活様式が異なるのもとより、同じ砂丘の移動や、塩性化現象などといつても、中国とアフリカでは表面的には類似していても、一様に扱いにくいことである。また、自国の沙漠あるいは沙漠化に対する対応の度合いも地域によっておおきな開きがあり、それらをひとまとめにして“沙漠化対応条約”などで処理するのには現実はあまりに複雑である。この5月私はたまたまイランのヤズド(Yazd)で開かれた国際カナート会議で基調報告する機会が得られたが、カナートというエネルギーを使わない伝統技術をなんとか維持発展させたいというイランやオマーンなどの研究者たちの熱意には感激させられた。また6月にはWWCのWorld Water VisionのひとつとしてThe Aral Sea Basin 2025(Alamty)に出席する機会があった。地球上最大のDesertificationをどこまで人間がとりこめられるのかについて、研究者、政策決定者、及びNGO代表の間で白熱の討論が続いた。いずれも水をめぐる乾燥地域の問題の複雑性と多様性を再認識させられた。

10年前に発足した日本沙漠学会の発起人の一人として、又初代会長として、従来の研究成果を社会に還元するべく自分なりに努力してきたつもりであるが、退任して考えるとまさに風樹の感がある。発足時には10をこえる分科会が提案されたが、現状では分科会の活動は限られており、私が提案していた沙漠史や沙漠誌のような基礎的分野にあまり活動がなかったように思う。しかしかし目を外に転ずればAlamtyでも披露されたがユネスコが中央アジアの学者と協力して行った“アラル海デルタの生態学的研究”は、まさにわが意を得た研究成果であった。このような総合的研究は日本の学界でも充分やってゆける実力があると思うが、なかなか実現化しないのは、実力が不足しているのではなく、不足しているのは、沙漠研究の方法論であろう。内外の人材をうまく活用する沙漠研究の哲学が真剣に考えられねばならない。

沙漠の研究と沙漠そのものの解明に重要なものは、地史に始まり現在を含めての沙漠の形成史たる沙漠史であり、そしてそこに住む人々の生きざまを充分に取り入れた沙漠のモノグラフィーたる沙漠誌ではないだろうか。この二つが相互に補完しあい、史的な背景と未来像をとりいれることより、いわゆる共同研究が成立してゆくものと思う。因みに、学会名をArid Land StudiesとLandを単数にしたのは、『日本人の英語』(岩波新書)の著者マーク・ピーターセン先生の発案で、その場合は地域研究的感覚も表現できるということであった。

沙漠も、全地球の一部であり、気候変動や生物多様性などを含めて地球環境全体からの視点や、人類史の一部としての見方なども、我われは常に忘れてはなるまい。コンピューターを使ってのシミュレーションやモデリング、実験室(棟)での基礎研究の進行などに並存して、もう一度、原点である沙漠というフィールドに立って、そこに住む人々の智慧と自然を謙虚に学ぶ必要があるのでなかろうか。

しかしうりかえってみると、“沙漠研究”誌に自然人文にかかわらず学位論文クラスのすぐれた論文も掲載されるようになったことは慶賀にたえない。只、惜しむらくは大部分が和文のため国際的な引用が殆どなされないことである。英語に限らず国際語での投稿はもっと奨励されるべきであろう。

国際経験豊かな新会長の下、会員諸君の一層のご発展を祈ると共に、10年以上にわたって頂いた暖かいご支援に厚く御礼申し上げたい。

「乾燥地考古学の回顧と展望」 特集にあたって

梅 村 坦*

Introduction to the Special Reviews
“Retrospect and Prospect on the Archaeological Researches in Arid Land: Japanese Contribution”

Hiroshi UEMURA*

乾燥地における考古学調査・研究については、ヨーロッパ、旧ソ連を中心に古い伝統と成果があるが、日本人がかかわった業績も目だてて数多くなってきた。最近の沙漠学会におけるフォーラムなどの活動の中でも、そうした成果の具体的な報告がいくつかなされるようになっている。またたとえば『季刊考古学』61号（1997年11月、雄山閣）は「日本・オリエント＝シルクロード—古代オリエントを掘る」という特集を組んだ。その中では、櫻井清彦・松本 健「古代オリエント考古学の視点」が総括的な回顧のなかで西アジアにおける日本の調査隊の貢献を述べ、杉山二郎、大橋一彰がそれぞれ日本と西アジアないしシルクロードとの関連を叙述した。中央アジアについては、谷 一尚・岡内三眞、堀 晓、加藤九祚が、それぞれ中国寧夏固原、中国新疆のトルファン、ウズベキスタンのダルヴェルジン・テペ、キルギズスタンのクラスナヤ・レーチカの遺跡発掘状況の実際を伝えている。さらに西アジアの考古学調査の現状を吉村作治（エジプト・ピラミッド）、西秋良宏（シリアのテル・コサック・シャマリ）、脇田重雄・和田久彦（シリアのテル・マストゥーマ）、佐々木達夫（アラブ首長国連邦）が報告し、藤井秀夫は湾岸戦争によるイラク考古遺産の流出に強い警告を発している。これらを見ただけでも、乾燥地考古学への日本の貢献は目覚しいことがあきらかになる。

日本人と乾燥地域、日本と沙漠という、アムビヴァレントな不安定性に帰せられもしがちな研究関係は、今までなく學術活動の事実によって裏付けがされてお

り、日本の場合、禁欲的なほど純粋な學問への情熱が当初からこの考古学分野への動機になっていると筆者は感じている。少なくとも現在の潮流のなかには、過去におけるような政策的な意図を嗅ぎ取ろうという必要はないだろう。しかし、実際の現場は概してさまざまな意味で緊張をはらみつづけるイスラーム地域であり、国家管理の厳しい中国であり、またソ連崩壊前後の混乱をひきずるこの乾燥地域の国際政治、国家安全政策、文化政策、民族問題、宗教問題、環境問題、住民感情等々、まさしく現実社会の縮図のなかで生々しく學術活動が展開しており、考古学に限らず、フィールド調査研究に携わった経験のある者ならば苦労話に事欠かないにちがいない。

このように、現実と學問が深く人間的にせめぎあう現場としての乾燥地考古学は、実際に日本にとってどのように位置づいているのかを回顧しながら、沙漠学会においても、わかりやすい鳥瞰図を共有する時期にきているのではないか。また、実際の現場から導かれてくる學問成果は今後いかにして継承していくべきか、なによりも現在までの日本人の関わりを原点として、この場で展望してみる意味も大きいのではないだろうか。乾燥地への関わりに分野を超えて認識を深めてみたい。このような発想から、この特集は計画された。

しかし、編集担当者は乾燥地内陸アジアの歴史学にかかるあっていても実際の考古学の現場については素人である。素人だから上ののように勝手なことも考えた。それはともかくとして、一応西アジアから中央アジア、新疆に

* 中央大学総合政策学部

* Faculty of Policy Studies, Chuo University

いたる広域を想定してみたものの、誌面の分量の関係から、地域や日本の貢献の全体像を網羅することはできるはずもなかった。それでも、著者の方々は、要請をはるかに凌駕する理解を示され、ここに5編の回顧と展望に関する貴重な論文を頂戴することができた。地域でいうと、西はエジプトからはじまってイラク・イラン、中央アジアのアフガニスタンとウズベキスタン、そして東は中国の新疆と並ぶ。もちろんいずれの著者も現場に深く関わり、現地を熟知している方々である。発掘調査の現場についてまたとない報告をいただいたものと著者各位にお礼申し上げたい。同時にこれらの地域における調査・発掘などは、現在きわめて困難な状況を抱えている。障害を乗り越えるにはどのようにしたらよいのかについて多くの示唆があり、広い視野に立った問題提起もなされている。なお、加藤九祚氏自らはこの論文で触れてはいないが、知る人ぞ知る、現地で現役の発掘指導者であるなど、著者それぞれの今後の調査・研究活動も注目される。

ここに掲載した地域・分野だけが全面的な回顧と展望

なのではないことは繰り返すまでもない。たとえば中国新疆における早稲田大学隊の貢献については、冒頭にあげた『季刊考古学』を参照されたい。また『月刊しにか』9-7（1998年7月、大修館書店）の特集「シルクロード再発見：西域学の現在」にも関連する報告が満載されている。乾燥地のなかの草原を中心とする考古学の成果については藤川繁彦編『中央ユーラシアの考古学』（世界の考古学6、1999年6月、同成社）が出版されている。これらをはじめとする多くの著作、論文にも関心をはらいづけて頂ければ幸いである。

なお本号には、偶然のことであったが、藤井秀夫氏の総説展望「イラク西南沙漠の自然とヘレニズム期の文化—アッタール洞窟、AIN・シャイアのカナート、西南沙漠のオアシス群—」が掲載される。この特集とも関連するものであり、是非ともあわせてお読み頂きたいと願う。

最後になるが、早くに原稿を頂いた著者には、編集の不手際により掲載が大幅に遅れてしまったことをお詫び申し上げたい。

エジプトにおける発掘調査

吉 村 作 治*

早稲田大学に於ける古代エジプト文化の調査研究は1966年9月のエジプト現地へのジェネラル・サーベイ隊の派遣が本格的な始まりと言ってよいであろう（写真1：以下写真提供は早稲田大学エジプト学研究所）。隊長は当時早稲田大学文学部で専任講師をしていた故・川村喜一先生で、私はその時の学生隊長をしていた。

元々のきっかけは、早稲田大学第一文学部美術史専修の学生の自主的な研究会の設立であった。古代エジプトの美術がテーマで、原書の講読や資料収集を行っていたのだが、故川村先生を迎えてから本格的な自主ゼミの形となり、ついには現地調査隊の派遣にまで発展したのである。当初は10人近くの学生が現地調査隊に参加する予定であったが、結局最終的には私を含めた5人の学生と故川村先生の合計6名編成となった。我々学生はオイルタンカーに乗りクウェートまで行き、そこからカイロへ飛び、カイロを拠点に約半年間エジプト全土の遺跡を巡り、途中空路で現地入りした故川村先生と合流し再度アブ・シンベルを含めてナイル川流域をくまなく調査した。

故川村先生は元々古代オリエントの農耕開始期の文化を研究されていた為、研究テーマは農耕開始前後の文化様相ということになり、先王朝期の遺跡をくまなく調査するということにしていた。だから中部エジプトを中心としたバダリ、モスタゲッタ、タサ、ナカダなどを中心にジープで廻ったのだが、ともかく観光地とはならない

地味な遺跡なので、遺跡を見つけるのが難しかった。先王朝期の調査研究で有名なプラントン博士の発掘現場を探すのにバダリ村の社会科の先生をガイドに仕立てて村中を廻ってやっと探し当てた時は感動した。「ここにテントを張り、テーブルはここ、そこに6脚の椅子を置き、プラントン博士はいつもパイプをくゆらせてここに座っていたもんだ」と、土地の長老に博士の発掘の際に土運びとして参加した時の思い出話を聞いていたら、思わず目頭が熱くなってきたことを昨日のことのように思い出す。

この時の体験で最も強烈なのは、アブ・シンベルに行ったときのことである。当時アブ・シンベル神殿はアスワン・ハイダム建設の為、ダムが完成すると水面下に沈んでしまうので、遺跡救済運動が行われていた。日本でもユネスコ協会が中心となって支援していたのだが、実際にこの目でみるとあまり実感が沸かなかった。ところが我々がアスワンに着いた頃はダムはかなり完成していて、水もすでに溜まり始めていた。アブ・シンベル神殿は、大小共既に石の塊に切られ60メートル上の丘の上に置かれ、下層部はもう積み上げられ始めていた。ところがそのアブ・シンベルへは水中翼船でしか行けなかったのだが、これが運賃が高い上によく故障するときている。今でこそ飛行機でも車でも行けるのだが当時はかなわなかった。しかし抜け道がひとつあった。それはナセル湖で魚を獲っている船に乗せてもらうという手だった。アスワンとスーザンのワディ・ハルファを往復している定期船はアブ・シンベルには止まらないで漁船をあたるしかなかったのだ。ところがこの船たるやスピードが遅く夜は航行しないとあって、2~3日で行って帰ってこられるという、乗船前の話とは大違いで1週間もかかってしまった。当然食料が足らずアスワンに着いた時には餓死寸前の状況であった。

ともかくこうした多くの思い出を残し、約半年間のジェネラル・サーベイを経て故川村先生と私は本格的な発掘調査の準備に取り掛かったのであった。まず、発掘地



写真1. 1966年、ジェネラル・サーベイ、ダハシュールの赤ピラミッドの前で（左端著者）。

点を決める為故川村先生と私の二人で先王朝時代の遺跡が出土する可能性のあるところを探した。その結果中部エジプト、エルシニアの東岸、ディール・アル=ベルシャがよさそうだということで絞り込んで決め、考古庁の許可も得たのだが、1年もしないうちに対イスラエル戦の為エジプト国内は、有名な観光地であるアスワン、ルクソール、カイロ、アレキサンドリアの周辺以外の地域には外国人は立ち入ってはならないという布告がなされ、我々の希望していたディール・アル=ベルシャは許可取り消しとなってしまった。しかしその代わりルクソールの西岸、マルカタ南地区にあるディール・アル=シャルウィートというところを発掘地点としたらどうか、と当時の考古庁長官、故ガマール・エル=ディン・モクタール博士から提案があり、そこを発掘地点とすることに決めたのは1970年のことであった。

1971年には文部省科学研究費を頂き、栄えある第1回目の発掘調査がマルカタ南地区で開始された。しかし当初、先王朝期の地層からパレットと象牙製のマスカラが出土したものの（写真2），出てくるものは殆どローマ時代のものばかりで戸惑っていた。プレマイオス王朝時代に建造されローマ時代に繁栄したイシス神殿の領域内にこの発掘地点が位置しているのだから仕方がないと覚悟して発掘を続けていたところ、「魚の丘」と現地人が呼んでいた砂漠の中の盛り上がった小さな丘の中から新王国時代（前1565～1070頃）の絵画の描かれた階段一後に彩色階段と名付けられた一が出土した、「魚の丘彩色階段」の発見である（写真3）。

ビギナーズ・ラックともいえるこの遺跡の発見が外電としてニュースに取り上げられることにより、日本人がエジプトで発掘調査をやっているとの認識が世界中に広まったということがとても重要であった。この発見により、ルクソール西岸の王家の谷入口地点、ツタンカーメン王墓発見で有名なハワード・ Carter が発掘当時住んでいた Carter - House の隣に1976年12月、ワセダ・ハウス（現地の人は「ベイト・アル=ヤバーニ “日本人の

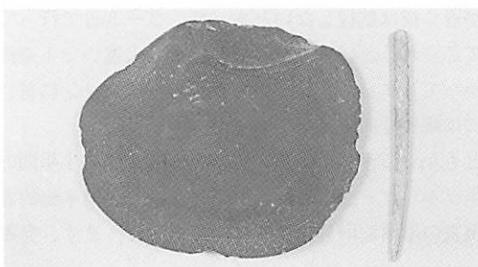


写真2. マルカタ南から出土したパレットとマスカラ。

家”）と呼んでいる）を建てることができた。このことでエジプト政府はもとよりエジプトで発掘調査をしている欧米の調査隊の人々もが、日本は本気でエジプト考古学をやる気だと認めてくれたのだった。考えて見ると欧米におけるエジプト考古学の歴史は、1798年ナポレオンがエジプト遠征時に150人近くの学者や技術者、芸術家を連れていたことに始まり、1809年に刊行された『エジプト誌』及び1822年のシャンボリオンによるロゼッタ石に刻まれてあったヒエログリフの解読成功によって近代エジプト学が本格的に体系化されたといえる。我々はそこから約170年スタートが遅れていたのである。

ところが好事魔多しというか、発掘調査の中心人物であった川村喜一教授が、1978年12月に急死されてしまったのである。この先の行き先がどうなってしまうか危ぶまれたが、故川村先生の先輩であった比較考古学の櫻井清彦先生と、早稲田大学のご尽力により発掘調査を続行することが出来た。まさに九死に一生を得たという感であった。そして、カイロ大学とカイロ考古学博物館で勉強をしていた私は日本に帰国し、故川村教授の仕事を引き継ぐこととなった。

川村先生亡き後、我々がまず着手した最初の仕事は、マルカタ南遺跡の発掘調査報告書の刊行であった。これは全5巻とし、まず世紀の発見「魚の丘彩色階段」の巻から始めた。その為に大学内に設置された古代エジプト調査室には多くの学生や大学院生が集まり日夜頑張ってこれまでに第4巻まで刊行終了し、近年中に最終刊も刊行が予定されている。

第2に人材育成を手掛け始めた。川村先生が亡くなれたことで、早稲田大学、いや日本からエジプト考古学が無くなってしまう危機に直面してしまったわけだから、何としてでも後継者を多く育て、日本に於けるエジプト考古学研究者の層を厚くし、どんなアクシデントにも耐え得るようにしなければならないと思ったのだ。

第3に資金の確保である。日本国内の発掘は行政発掘

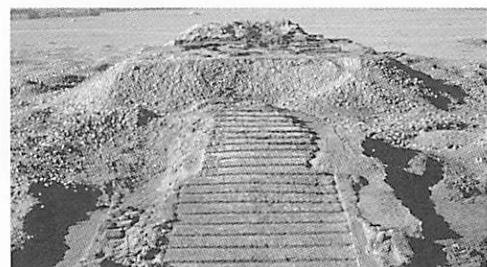


写真3. マルカタ南「魚の丘」彩色階段。

が多いので、資金に困るということがあまりないが、外国での発掘は文部省の科学研究費だけが頼りである。しかし欧米に負けないような成果を挙げるにはとても足りない。そこで、寄付と自己調達の二つの方法により、資金の調達を図った。幸いというか、不十分ではあるが何とか続けられているのは、周囲の支援の賜物であると感謝している。しかし外国考古学を行っているのは何も我々だけではないのだから、何か他にいい方法はないものであろうかと私自身も悩んでいる。さらに広報活動に力を入れることにした。とかく日本人の研究者は、自分が良いことをしていれば他人にはどう思われてもいいのだという考え方で広報を怠っていると考えた。広報と宣伝とは違うんだと主張し、我々がどんな調査研究をしているのかをテレビをはじめ、メディアを問わずに広報活動を行ったのである。以後20年近くの活動で日本に於ける早稲田大学のエジプト調査活動は列島の端々まで行き渡った。

そして最後にハイテクの利用である。ハイテクという言い方は少々そぐわないかもしれないが、考古学にとって大切なことは、いかに手際良く遺跡を見発見するかということであろうと思う。まず見つけなければ考古学は始まらないのである。その為には異分野の研究者との協力体制を作らなければならないと考え、特に理工系の諸先生方にアプローチし、その体制を作るよう努力した。その結果、80年代に入り我々の調査において、統々と良い成果が出始めたのである。

隊長だった川村先生が亡くなられて櫻井先生に代わってから一番大きな変化は、古代エジプト王朝時代の遺跡のみを対象として発掘調査をするのではなく、時代も地域も広く考えるようになった点であった。その為エジプトでの初めてのイスラム時代の都市であるアル＝フスタート遺跡の発掘も行った。アル＝フスタートは、7世紀にアムル将軍に率いられたイスラム勢力が最初にエジプトに持った拠点である。今でもカイロ市の南に隣接した広大な範囲にわたり荒廃した地域として残っているのが見られるが、今ではカイロ市民の出したゴミの捨て場となってしまっている。そこを掘るというのだから参ってしまった。何故かというと、とにかく臭いのである。ゴミ捨て場は考古学にとって最も遺物が出土する可能性が高く有望なのであるが、現役のゴミ捨て場は辛い。しかしそんなことにもめげず頑張った結果、日本には無かったイスラム考古学の研究者が何人か育成され、今でもシナイ半島の調査にその流れを継いでいるのである。

さて本流の古代エジプト王朝時代の発掘調査はどうなったかというと、その後2つに分かれて進行した。ひと

つはルクソール西岸クルナ村の墳墓群の調査、そしてもうひとつはアメンヘテプ3世の造営したマルカタ王宮址の調査である。「魚の丘」遺跡が今から約3400年前にエジプトを統治したアメンヘテプ3世の祭殿であったことから、両方とも同王の関連遺跡なので調査をしようということで始められた。前者は考古学的、美術史学的な立場から同王関連の貴族の墳墓を発掘する目的であった。そして後者はアメンヘテプ3世の王宮（マルカタ王宮とよばれている）そのものを調査することにより「魚の丘」遺跡のディテールを調べるという目的によるものであった。隊長は前者は櫻井清彦（当時早大文学部教授）先生、後者は渡辺保忠（早大理工学部教授・工学博士）先生であった。

ところが前者の墳墓から1980年に多量のミイラと人骨が出土したことが調査の展開を変えた。早稲田大学には医学部が無いため、従来より人骨やミイラが出土した場合は、医学部の形質人類学の先生方に来て調べていただいている。我々のエジプト調査でも初期の頃、故・小片保先生（当時新潟大学教授・医学博士）に来ていただいていたが、今回は故小片先生の系列の聖マリアンナ医科大学教授（医学博士）の森本岩太郎先生、長崎大学医学部教授の内藤芳篤先生、鹿児島大学歯学部教授の小片丘彦先生に来て頂き200体にも及ぶミイラと人骨の整理と調査研究にあたって頂いた。掘れば掘るほど出土するミイラと人骨に、初めはどうなることかと思っていたが、さすがに専門家だけあって実に手際よく、3年程で整理がつくという神業的な調査にて、エジプト考古学も驚いていた（詳細は『貴族の墓のミイラたち』平凡社ライブラリー刊を参照）。私は元々死体やミイラなどがとても嫌いなので、エジプトで墓を掘ることなどできるのだろうかと密かに心配していたが、この3年間医学の専門家に付いて実地で学んだおかげで、今では心平靜にミイラに接することができるようになった。そしてこの時、ミイラをもっと詳細に調査しようということで、10体ほど日本に持ち帰り、聖マリアンナ医科大学病院にてCTスキャンをはじめとする幾つかの調査を行った。そしてこの調査結果をまとめるにあたり、CGを使ってミイラの復原を行った。

この報告が欧米のエジプト学者の間で話題となったことが我々のエジプト調査の方向を変えた、というのもその後、エジプト現地で欧米のエジプト学者に会う度に「さすが科学技術大国日本だけあって見事だった」とお褒めの言葉を頂く為、これは何か次のことをしなければいけない、と思い新しい方法を探り始めたのである。そこで出会ったのが地中探査レーダーの開発をしていた登

内正治先生（理学博士）であった。そして新しく考え出した調査方法は、電磁波地中探査レーダーという探査機を使い、地中や壁を隔てた所の状態を探るというものである。丁度1986年、フランスの二人の建築家が重力計を使ってクフ王の大ピラミッド内部に新しい部屋を見ついたことが大ニュースとなっていた。そこで私は当時考古庁長官だった故カドリー博士に、我々もギザのこの調査に加わられる機器を持っていることを告げた。重力計の結果というものは誰が見てもわからない。そこへ測定している時にモニターにその画像が映る電磁波地中レーダーの登場は考古庁にとっては渡りに船だったのであろう。早速、エジプト学新参者の早稲田隊にギザ台地での調査許可を与えてくれたのである。

まず我々はフランス隊の調査結果の確認探査を行った。フランス隊は、ピラミッド内の大回廊入口から女王の間に向かう水平通路の中間辺りの下に部屋があるとしていた。そこに電磁波をかけたところ画面に空間が映った（写真4）。そして水平通路の西壁の向こう側にも通路が見えた。更に女王の間の北壁にも通路の入口と思われる空間が映ったのだ。この様に次々と空間と思われるものが発見された。しかし実際にそこを掘る許可が出ない。というのもフランス隊が空間を発見した時そこをドリルで掘って穴を空けてしまい、考古庁はエジプトのマスコミに叩かれてしまうという苦い経験をしていたからであった。しかし我々の調査機器の正確さは、王の間の床下の19世紀末に掘られた跡を見事に画像に映し出したことにより証明した。

この後、大スフィンクスの右前足ひじ部分の下と両前足の前庭部下に部屋を、クフ王大ピラミッド西側の床面

に大型ピット跡をと、次々に地下構造を発見した。大ピラミッド南側床面下では既に1954年にエジプト人考古学者故カマール・マラハ博士によって「太陽の船」が発見されていたが、その船が収納されていたピット（竪坑）が東側寄りだった為、西側に必ずもうひとつピットがあり第2の「太陽の船」が存在するに違ないとされていた。が、証明する手段がこれまでなかったところに我々が画像に映し出したので、このことは考古庁に特に高く評価された（写真5）。

この様に電磁波地中レーダーを使用して様々な成果を挙げたことが、我々のエジプトでの考古学者としての位置を一気に押し上げた。それと同時に我々の調査に対する取り組み方も違ってきた。というのは前述した様にエジプトで発掘するにはまず遺跡を見つけないと始まらない。今でも幸運な調査隊と不運な調査隊というレッテルが考古庁内部では存在する。我々は少なくとも不運な隊ではなかつたものの、このピラミッド電磁波探査調査で幸運な隊の仲間入りを明確に果たした。この位置を維持していく為にも先端技術をもっと応用しようということになったのである。それはまた電磁波地中レーダーと他の方法を併用する方が発見の確立が高まるという意味もあった。

そこでフランス隊の使っていた偏差重力計もドイツから輸入し、その他磁気探査機、衝撃波探査機なども使用することにした。これらは皆物理探査機の部類に入るもので、世では“ハイテク”と称されているものだ。考古学という古いものを相手にする領域の人間がハイテクに目をつけたということで内外の注目を集めた。これらの探査機をピラミッドエリアだけでなく、ルクソールでも



写真4. 電磁波探査レーダーで、壁面を傷つけることなくピラミッド内の未知の空間を探す。



写真5. 第2の「太陽の船」ピット内部。

応用しようということで、クルナ村の貴族墓調査で使った。これまで、すでに砂の下に埋もれて行方がわからなくなってしまっている新王国時代の貴族墓の探査は、村人に聞いて情報を集めたり、古い地図に頼るしかなかったのだが、ハイテク探査機を使うことで自力で探せる様になった。というのも村人は隠されている墳墓を教えてくれないというのがその真情であるからなかなか本当のことと言わないのだ。そのままほどぼりが冷めるまで待って、いつか自分たちが掘って、中にあるであろう遺物を骨董品として古物商に売ることができるからである。ところがうまく隠してあっても電磁波地中レーダーや重力計で探査すると次々に墳墓が見つかってしまうがっかりすることになってしまう。我々は1年間に5基もの隠されていた墳墓を見つけてしまった。そこで、それならルクソール王家の谷にまだ存在すると言われている未発見王墓を発見しよう、と言う話が持ち上がった。

王家の谷調査というと、もともと我々は「魚の丘」遺跡発見以来、アメンヘテプ3世関係の遺跡を手掛けていたので、まず王家の谷・西谷にある同王の墳墓を調査したいと考え、早速始めた（写真6）。アメンヘテプ3世王墓は、19世紀初頭ナポレオンの遠征隊に同行して来た学術調査隊の一員によって発見され、ツタンカーメン王墓で有名になったイギリスの考古学者ハワード・カーターによっても調査されている重要な王墓である。その後ほとんど手がつけられておらず荒れていたので、まず内部のクリーニングから始めなければならなかった。そして我々の最終的なねらいは、同王墓の周辺には未発見の王墓があるはずだ、それを発見しようということにあった。電磁波地中レーダーを始め、我々が手に入れることのできる全てのハイテク機器を総導入して新発見を目指した（写真7）。ラジコンヘリに機器を搭載して飛ばしての探査も行い、その結果を分析し、ひとつひとつ可能性のある地点を掘っていった。何回か「新発見か」というところまでいったのだが結果はすでに19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ人によって発掘された後で



写真6. ルクソール王家の谷・西谷の発掘現場。

あった。掘っている最中に新聞紙やマッチ箱などが出てきてがっくり肩を落とすことも度々であった。しかしそのことはまた、大発見をしている彼らと同じ見方、考え方方が我々にあるということでもあり、それはすごいことだと思った。

アメンヘテプ3世王墓のクリーニングを終え、1万点を越える遺物を再出したところで、王墓内がかなり荒れていることが改めてわかった。前出のヨーロッパ人に壁画の一部を剥ぎ取られているところもあったのだが、天井や壁画が塗装でひどく荒れているのを目の当たりにして、我々は何としてもこの王墓を修復しなくてはと考えたのである。考古学は大変喜んでくれた。修復後は観光客に公開し見学させができるからだ。私にしてみれば、そうなるとまた傷んでしまいせっかくの修復も元の木阿弥だと少しがっかりしてしまったが。

電磁波地中レーダーの威力は大したものであったが、その一方ひとつ的方式だけに頼っていては今後様々な局面を迎えた時に対応の幅が狭くなるのではとも考え、その他の物理探査もここ王家の谷で試してみようということになった。クフ王のピラミッドでフランスが使った偏差重力計、地下の磁気状態を計って地下構造を探る磁気探査計、ある地点とある地点を結ぶ間の地下の構造を衝撃波で探る衝撃波探査計、模型ヘリコプターに電極を載せ、空中から広い範囲にわたり地下の構造を探るMH法といわれる新型電磁探査計などである。中でも模型ヘリを使った探査は機械一式をエジプト国内に入れるのが難しかった。農薬散布用の模型ヘリコプターをパワーアップして探査機を載せたものなのだが、軍の許可が下りないので、国内を模型ヘリでスパイするのではと懸念してのこと、軍としては当然のことなのだが、ともかく探



写真7. ルクソール王家の谷にて電磁波探査を行う。

査する時には空軍のインスペクターに立ち会ってもらうという条件下においてやっと許可をもらった。そして探査を始めると、王家の谷・西谷には特殊な風が吹いていて、模型ヘリが崖に近くと崖に吸い付くように寄っていってしまうのだ。何回も何回も崖にぶつかり、その度に修理をしなければならずあまり効率よくいかず有効ではなかった。結局空軍所有の本物のヘリに機材を積み込み王家の谷・西谷の上空を廻ってもらい何とか終了したのだった。

1991年にはアブ・シール地区の調査許可が下りた。これはギザ地区から一旦全ての調査隊が離れ、メンフィス・ネクロポリスの調査をし、その成果を持ち寄って再度国際共同調査団を作ろうという考古庁の決定を受け、我々はギザとサッカラの間にある第5王朝の3つのピラミッドの近くでの調査を行う為であった。ギザ地区で積んだ調査実績を下エジプトでも生かそうというのである。はじめサフラー王のピラミッド近くで電磁波地中レーダーで探査をしていたところ湾岸戦争が勃発していまい、日本にかかるよう勧告されやむなく帰国した。半年後イラクのクウェート撤退を受けて様子を見に現場へ戻ったところ、何と我々が発掘しようと決めていた地点をカイロ大学の考古学部長チームが既に掘ってしまっていたのだ。我々が考古庁に提出していた電磁波地中レーダーでの探査図を見た学部長は、湾岸戦争の最中に掘って

しまったのである。そして遺構が既に地表に出ており、我々の出る幕はなかった。エジプトは基本的にエジプト人のものだから、すっきりはしないが文句もつけられないものとあきらめた。もちろん我々も子供の遊び的にやっているわけではないが、下手に感情的に動くと一生エジプトで調査ができなくなってしまう恐れがあるので、冷静に事の次第をレポートにして考古庁ギザ支局に提出した。ギザ支局長のザヒ博士は、「気の毒だが、何といっても相手はカイロ大学の考古学部長であるからここは我慢をしてほしい。もちろん学部長の行為は良いことではないが、その代わりもっといい地点の発掘許可をあげよう。」といってくれた。最近まで軍のエリアであったが、軍施設が西へ移動したのでそこならどこを掘ってもいいというのである。どの位の広さがあるのかと問うと、長さ5キロ、幅1キロだという。これまでのよう電磁波地中レーダーを手で引っ張っていたのではそんな広大なエリアは探査しきれないので、レーダーに小さな車輪を付け、ジープで牽引することにした。

砂上車と名付けられた探査車で5キロ平方の砂漠の下に遺跡を探す調査にかかった。調査の後半、低位砂漠のリビア砂漠寄りのところにある小高い丘を探査していた時、砂の下にいい反応が出た。そこでまず試掘をするわけだが、よく丘の上を観察してみると、人工的な切り口のある石灰岩の破片が数点散布しているのに気付いた。

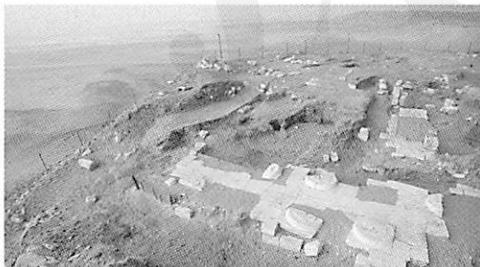


写真8. アブ・シール南遺跡発掘現場。

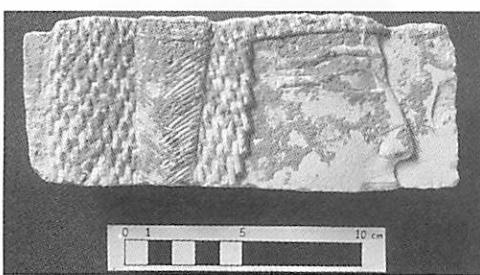


写真9. アブ・シール南遺跡から出土した「カエムワセト」の顔の一部。



写真10. ダハシュール北遺跡、トゥーム・チャペル遺構。

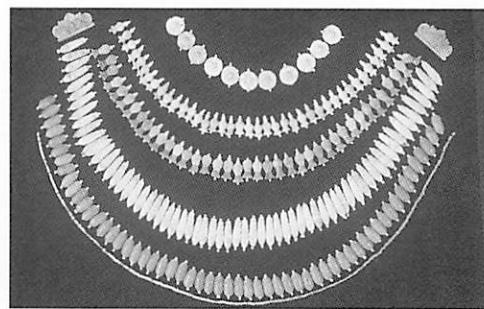


写真11. ダハシュール北遺跡より出土した襟飾り（ファイアンス/ガラス製）。

その他表面採集を重点的にしてみると、どうも新王国から末期王朝にかけての土器片とかプラスター片がいくつか採集できた。そこで本格的に試掘を行ったところ、砂の下から石灰岩の石片がゴロゴロと出て来たのである。幸運にも丘の東側に建設当時のままの石のペーブメントが出土し、そこに石柱の台座がそのまま残っていた。このことでこのペーブメントの西側に建造物があることが予想され、次の調査へと続いたのである。ここで文部省科学研究費補助金（現在：日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A））を申請し、本格発掘に取り掛かった（写真8）。1991年のことであった。そして現在も発掘調査を続けている。

出土した遺構は、大型出土遺物である赤色花崗岩の偽扉に書かれていた銘文により、「王の子、セム神官、全石工の頭、カエムワセト」（写真9）とわかった。こういった肩書きを持つ「カエムワセト」という人物は、今から約3200年程前にエジプトに君臨していた新王国第19王朝の大王、ラメセス2世の第4王子しかなく、従って王子の葬祭殿であることがわかった。「カエムワセト」という名は、新王国時代において比較的ポピュラーな名であるが、これだけの肩書を持っていた人物は唯一人だったのだ。

アブ・シール南遺跡の発掘調査とは別に、東海大学情報技術センター所長坂田俊文先生が、1994年に奈良で「宇宙考古学国際セミナー」を開かれた。私もパネラーの一人として参加し、エジプトで宇宙考古学をやりたい、やれる可能性がある、と述べた。というのもその2年前、坂田先生にお会いした時に、砂漠に埋もれている筈のピラミッドを探していたらそれより1000年以上後の葬祭殿を見つけてしまった話をしたところ、広範囲を調査するなら人工衛星の画像をコンピュータで解析するリモートセンサリングが一番有効であると伺ったからである。



写真12. 「アンケセナーメン」の名が押された指輪
(ファイアンス製)。

そして仲間に入れて頂きこの会議に参加したのである。

その後パリのユネスコで宇宙考古学のパネルディスカッションを行い、いよいよエジプト現地での実地活動に入った。まず坂田先生のグループが人工衛星の画像を調達しそれを解析し、我々はこれまでにわかっている地上の遺跡分布図を作ることから始めた。1995年、両者を合体して検討を重ね、40ヵ所における砂漠の下に遺跡があると考えられそうな地点を東海大学側から提示してもらった。それを地上の地図に落として、ジープでひとつひとつ見て廻ったのである。そのうちの大半は他の外国隊の発掘権の及ぶ地点であったので、実際には10ヵ所余の地点の踏査となった。そして3ヵ所程有望な地点を絞って、今度は足で歩いて表面探査を行い、さらに、古王国時代の“屈折ピラミッド”や“赤ピラミッド”などが林

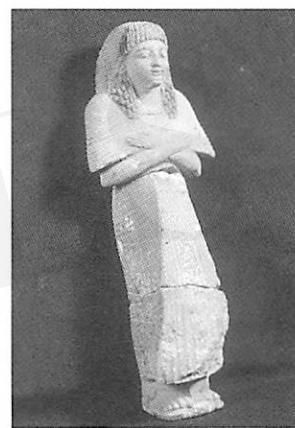


写真13. 「メス」のウシャブティ (砂岩製)。

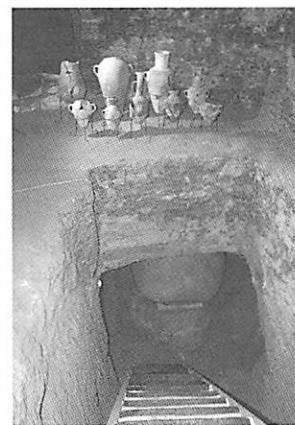


写真14. 地下2層目から発見された大型石棺。

立するエリアとして有名なダハシュールの北側からサッカラ南地区との間の地点の電磁波探査を行い、沙漠表面のクリーニングを始めた。すると幸運にもその地点の砂の下から幅25m、奥行50mという大型の神殿付貴族墓、通称「トゥーム・チャバル」と呼ばれる建造物の基礎部が見つかったのである（写真10）。

700km上空の宇宙から、沙漠に埋もれていた古代の遺跡見つけるという坂田先生の夢が実現したのである。それから我々早稲田隊は、発見した遺跡の時代を特定できる遺物を発見すべく、中庭部分のシャフトを掘っていった。そしてついにそこから4000点余りのウシャブティや土器、ファイアンス製の胸飾りなどを見つけた（写真11）。中でも特筆すべき遺物は、ツタンカーメン王の即位名「ネブケブルラー」がカルトゥーシュ（王名枠）の中に刻まれた指輪と、同王の妃アンケセナーメンの名が刻まれた指輪である（写真12）。このことをもって、こ

の遺跡の持ち主は、ツタンカーメン王時代に何らかの形で活躍していた人物であることがわかる。そしてついに1998年12月には、同シャフトの地下2層目から第19王朝ラメセス2世時代の王の書記、メスという名の人物の大型石棺を発見した（写真13, 14）。

早稲田大学古代エジプト調査隊は、私の子供の頃からの憧れを発端に調査を始め、2000年には34年目を迎える。たくさんの発見もしてきたが同時に人材も育っている。2000年4月からは「早稲田大学古代エジプト調査室」から「早稲田大学エジプト学研究所」となり、より一層研究調査に力を入れていく所存である。今後は王家の谷・西谷のアメンヘテプ3世王墓内壁面の修復や、アブ・シール南遺跡、ダハシュール北遺跡から出土した遺物や遺跡の保存も視野に入れて、21世紀に向けて新しい一步を進めようと考えている。

Archaeological Research in Egypt

Sakuji YOSHIMURA*

The Waseda University Egypt Archaeological Mission has continued excavations in the Arab Republic of Egypt every year for 34 years since the initial General Survey in 1966. In January 1974, we discovered a sanctuary of Amenhotep III (18th Dynasty, New Kingdom) in the Malkata South site on the West Bank of Luxor. Pictures were painted on the stairs of this structure. Subsequently we discovered the Malkata Palace of Amenhotep III, 200 mummies in aristocratic tombs at Qurna on the West Bank of Luxor, and a previously unknown hollow inside the Great Pyramid at Giza. We confirmed the existence of a Second Solar Boat of Khufu to the south of the Great Pyramid, and discovered a Mausoleum of Khaemwaset, fourth son of Ramesses II (19th Dynasty, New Kingdom), on top of a low-lying hill in the desert at Abusir South. When the mummies discovered in the Qurna aristocratic tombs were examined in Japan, we reconstructed faces using CT scan and CG, and from then on applied hi-tech equipment to our excavation surveys. First, we used electromagnetic radar to help locate sites, and discovered a series of previously unknown structures buried under the desert using gravity torsion meters, microgravimeters, and other devices. In 1997 we analyzed satellite images (in a joint study with the Tokai University Research and Information Center), and discovered a "tomb chapel" structure from the New Kingdom about 25 metres in width and around 50 metres in depth under the desert at Dahshur North. Currently, we are surveying the Western Valley of the Kings at the West Bank of Luxor, Abusir South, Dahshur North, the Second Solar Boat at Giza, and others.

Key Words: General Survey, Malkata South, Western Valley of the Kings, Aristocratic Tombs at Qurna,
Second Solar Boat at Giza, Abusir South, Dahshur North

* School of Human Science, Waseda University. 2-4-26, Nishiwaseda, Shinjuku-ku 169-0051, Japan.

(Accepted, March 6, 2000)

日本発メソポタミア考古学 —近年の動向—

岡 田 保 良*

1. はや10年

1990年の夏、前年度中に申請していた科研費の交付も決まり、その秋から本格的に取り組もうとしていたキシリ遺跡調査のあり方をめぐって私たちは熱い議論を交わしていた。そこに勃発したのが、あの湾岸危機からさらに戦争へと展開したイラクをめぐる国際紛争だった。10年近くを経た今日もなお、外務省が呼びかける渡航自粛、あるいは文部省科研費の不交付措置といった具合に、長い影をいまだ引きずっている。

筆者の勤務する国士館大学イラク古代文化研究所は、メソポタミアを中心に広くユーラシア古代の研究を目的として設立された大学附置の機関だが、主たる事業はその名の示すとおり、イラク共和国内の遺跡調査である。藤井秀夫を初代所長として開設されたのが1976年。色々な意味で大学の英断だった。学内外の多大な協力に支えられた藤井のチームが、シーア派の聖地カルバラの西方にある洞窟遺跡アッタルから埋葬に伴う多様な染織品を発掘し、報告書の刊行など、ようやく目に見える成果を上げ始めていたころのことである¹⁾(図1)。

ちなみに、シリアやサウジアラビアとの国境付近から

アッタル周辺地域に広がる沙漠を、私たちは「イラク西南沙漠」と呼んでいる。旧石器の散布地を除けば、おおむねローマとパルティアが対峙していた時代以後のオアシス遺跡が点在する。

研究所開設の翌年、藤井はイラク政府の要請を受け、ディヤラ川を堰き止めるダム建設で水没することになるハムリン盆地遺跡群の調査へと調査隊はフィールドを移した。およそ3年間、各國隊が集中参加して発掘成果を競った。私たちが担当した遺跡では、遺丘テル・グッパで発掘した同心円状の建築遺構をはじめ、テル・ソンゴル出土の先史遺物などが国内外で注目を集めた²⁾(図2)。また、イラクのみならず、多くの国々と日本の間における人と情報の交換、文化の交流にこの調査は少なからず貢献した。1980年春、テル・グッパをはじめ盆地にあつた100近い数の遺丘が湖水に没し、この「発掘オリンピック」は閉幕した。

その年、イラクは隣国イランを相手に戦争状態に突入する。以後一進一退の状況は8年間に及んだ。この二国間紛争がイラクの国力疲弊を招いたことは否めず、やがて訪れる湾岸危機の遠因となる。また、私たちにとって恩義ある先輩であり、テル・サラサート発掘によってすでに国際的な評価を得ていた東京大学の調査団を、一足



図1. 洞窟遺跡アッタル、写真はA丘 (1979年)。



図2. テル・グッパの円形遺構 (1979年)。

* 国士館大学イラク古代文化研究所

(受理: 1999年10月25日)

先に当国から永く遠ざけてしまう契機にもなったと聞く。私たちの間でもいろいろな議論はあったが、この時点では、各国籍の取り組み方なども見ながらイラク現地の調査を絶やすことはしなかった。

イラン国境近くにあったハムリン盆地に人工湖が完成したあと、ユーフラテス川をシリア国境手前の町ハディーサ郊外で堰き止め、さらにトルコ手前エスキ・モースルでティグリスに湖を造るというダム建設プロジェクトがあいついだ。ハディーサのダムは、完成後、かつてアラブ軍が史上はじめてササーン朝ペルシアの軍勢を破った戦いに因んでカーディシーヤ・ダムと名付けられた。対イラン戦時下ゆえの命名である。他方のエスキ・モースル・ダムには大統領名サッダムを冠している。いずれのダムでもハムリンと同様多数の遺跡が水没することになり、やはり多くの外国調査隊がその緊急調査に従事した。その間私たち國土館派遣の調査隊もつねにその一員だった³⁾。

一段落して再びイラク西南沙漠に戻ったのは1986年のこと。今度は洞窟でなく、蒼天に開けた平地遺跡を掘ることになった。アッタールとは数十キロの距離をおくが、洞窟を墓として利用した集団の生活址を求める試みである。遺跡の呼び名は湧き出る泉の名から取ってAIN・シャーイア。聖地ナジャフから崖沿いに西10余キロ、傍らにドゥカキンと呼ぶ洞窟や小規模ながらもカナート掘削の痕跡があって、以前から注目していた地点だった。この遺跡で思いがけずキリスト教修道院の遺構群と遭遇する(図3)。

88年度は調査團を二手に分けざるをえなくなった。AIN・シャーイア最後のシーズンだったにもかかわらず、イラク考古総局からシュメール文明有数の都市キシュの遺跡を発掘調査するよう強く要請されたためである。89年2月、筆者は日干し煉瓦造の教会堂内陣の確認を急い



図3. AIN・シャーイア遺跡の発掘(1989年)。

でいた(図4)。一方わが同僚たちはキシュ遺跡にあって、次のステップに向けての新たな体制づくりに思いを致しつつ、予備的な発掘調査を終えるところだった⁴⁾。

結局はその現場が私たちにとっては最後のイラク調査となった。以後今日に至るまでイラク国内の考古学調査に携わった日本人はない。イラクをめぐるこうした国際事情の傍ら、隣国ではまったく違った考古学事情が展開している。以下は主としてシリアにおける日本人研究者のフィールドに注目し、偏見をおそれず最近のメソポタミア考古学の周辺を展望する⁵⁾。

2. ハブル川流域へ — テル・タバンとその水環境 —

イラク調査の見通しがまったく立たない中、筆者のほか個人的に他機関派遣の調査團に加わっていたことが、國土館の次なるフィールドをシリアとする呼び水となった。とくにシリア北東部、ユーフラテスの支流ハブル川の流域一帯は、古代メソポタミアの文化圏をイラクと共有する土地柄だ。ハラフ、ウバيدといった初期農耕の文化はもちろん、霸權を求めたアッカド、バビロニア、アッシリアの諸王朝からペルシア人の支配に至るまで、メソポタミアの古代史はいまのイラク、シリア両国にまたがって展開したことはいうまでもない。とくにハブル川源流域は「トライアングル」と言う呼び名で考古学上とくに注目され、テル・ブラク、シャガル・バザール、テル・レイランなど重要な大遺跡が多い。

1996年、同僚たちがユーフラテス流域の予備的サーベイを実施。ハブル川本流沿いに点々とする多数の遺跡が、通称ハッサケ・ダム(位置はシャダディ村近傍)の建設で水没を余儀なくされており、すでに多くの国々が調査を進めているが手つかずの遺跡も少なくないこ

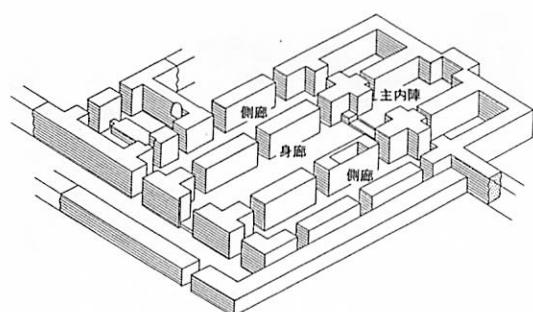


図4. AIN・シャーイア発掘の教会遺構、復原図。

を知る。シリア考古学からも、その水没域の中から拠点を選定してほしいとの意向が伝えられた。その数年前まで実施していた北イラクのエスキ・モースル調査から学んだ私たちの知見を生かしたい、という観点から期待をこめて選んだ川沿いの遺跡、それがテル・タバンである(図5)。県都ハッサケから20キロほど南にある。

テルは南北、東西とも350m前後、この流域では有数の規模を誇る。前2千年紀にハブル流域の盟主だった都市タベトゥの遺跡ではないか、という推定が早くからなされていた。調査1年目の97年秋、早々にその証は現われた。最初に設けたトレンチの中から、楔形文字をび



図5. テル・タバンとハブル川。丘腹に発掘中のトレンチを望む(1997年)。

っしり刻んだ見慣れぬ円筒形陶製品の破片が出土したのである。数キロ上流のテル・ブデーリという遺跡でドイツ隊が発見していた円筒銘文とそっくりであることが間もなく判った。私たちは彼らの協力を仰ぐことにした。その結果「前12-11世紀、古代都市国家マリの王を自称するアシュール・ケティ・レシェルがタベトゥの町に宮殿を經營していた」との内容を読みとることができた⁶⁾。マリの王とは恐らく僭称にすぎず、その名から推して当時ティグラト・ピレセル1世治下のアッシリアに服属していた地方諸侯こそ銘文の主にちがいない。タバンはその根城だった。かつての推定はここに裏付けられることとなった。

トレンチ発掘の成果や、テルの斜面でルヴァロワ型石器が採集されたことのほか、必ずしも考古学情報とはいえないものの、テル・タバン付近の集落の変遷や水環境についての知見は、人と水との関係を考えさせる興味深いものだった(OHNUMA et al., 1999)。概略は以下の通り(図6)。

現在タバンと呼ばれる土地は川の左岸およそ3キロ四方をいい、テルの東、低い段丘上に2つの小集落(アル・ガーナとハソウィーヤ)があるほか、テルの南方、川に接して廃村が1か所ある。実はその廃墟こそがかつてタバンの名を称する村だった。屋根材はみな取り払われ、空地の所々に壁を崩して取り出したらしい日干し煉瓦が積み並べられていた。再利用可能な建築材料は、沙漠地

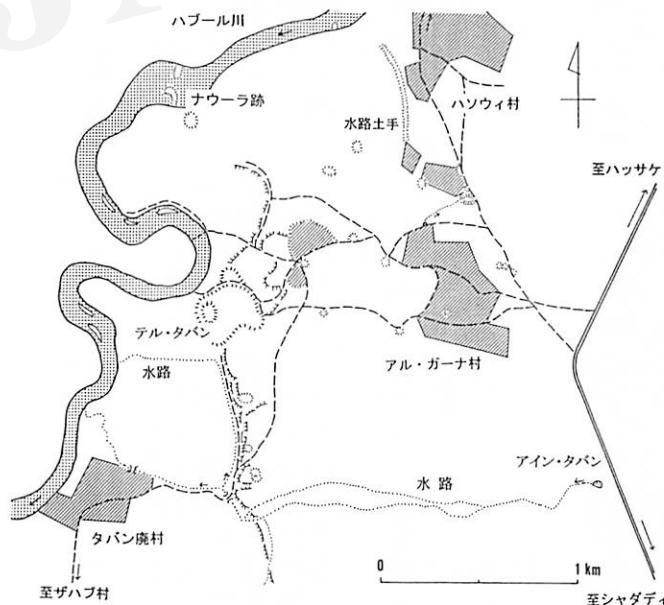


図6. テル・タバン近傍の集落と水環境(1997年測図)。

に住む人たちにとって貴重な資源だ。10年余前、下流でのダム建設を知られた村人たち全員が自らの家を捨てたらしい。ところが、移り住んできた現在の村までも結局は水没が避けられないという見通しがつい最近判明。彼らはより高い土地を求めて今一度、移住しなければならない。ちょっと気の毒な話ではあった。

村では冬季に麦、夏季には綿花を栽培しているのだが、灌漑用水のほとんどを動力で汲み上げる地下水に頼っている。飲料水はというと、タンクでやって来る水売りから買うのだという。地下水と水売り、目の前を流れるハブル川の水はいったいどうしたのか、テル・タバンから少し遡った川岸にある石組み跡が、揚水水車ナウーラを活用していたことを示し、そこから引いたに違いない灌漑水路の土手（ローファと呼ばれる）ものこっている。聞くところハブル川が清水をとうとうと流していたのはさほど昔ではないという。直接には動力の普及が伝統的灌漑方式を廃れさせたのだろうが、上流水源域での泉の枯渇、あるいは人為的な治水事業が、当地付近の水量と水質の悪化に関係しているらしい。

さらにタバンの村にはもう一つ別の水源、通称AIN・タバンという泉が沙漠を行くシャダディ往還道の脇にある。AINには相当な水量があるようで、タバン村に向かう素掘りの開渠を2本にして水を吐いていた。開渠の一つは廃村の脇から川へ、他方はテルの近くの畠を通って川に注ぐ。こんこんと湧き出ている水のことを村人に尋ねると、遙か彼方から地下を通ってきたもの、つまりこの泉はカナートの出口だと断言した。大昔に掘られて塞がっていたのを、30年ほど前に甦らせたとも聞いた。見ると、泉を縁取る石がアスファルトを張ったように黒ずんでいる。開渠をたどると至る所に油をかぶって黒光りした土地があった。綿花畑も油まみれになつてゐる。水があふれると一番に油が広がるのだろう。水源付近で流入した原油がカナートを通じて運ばれてきたことは疑いない。かつての恵みの水路は今や悪水の排水溝に変じてしまった観がある。村人の指さす北の方には、油井か、あるいは精油所らしい豆粒のような火が見えた。シリアは今や産油国なのである。

その石油の炎を上げている町アル・ホール（ハッサケの東約30km）の近くに、ヒルベト・アブ・ジダーリという遺跡を訪ねる機会があった。考古総局ハッサケ事務所の新任所長自身が、その年の春に発掘したばかりという。まわりに何もない沙漠の微高地に、主として石膏石と思われる石材を丁寧に切り出して積んだ遺構の地上部分が顔を覗かせていた。基壇最下部はおよそ13m四方の正方形、この上にほぼ内接する円形の上部基壇を積み重



図7. ヒルベト・アブ・ジダーリの墓室入口（1997年）。

ねている。倒れて散乱する部材から、上部基壇外周に沿って円柱がめぐっていたことがわかる。さらに基壇の上から急な階段が地下の墓室に通じる。幅2.8m、奥行き3.8mの部屋はすっかり荒らされていたようだが、高さ3m余のヴォールト天井は完璧に残っていた（図7）。かつてここに建っていたのは、明らかにローマ文化のもと、ひと口で形容すればトロス型の墓廟建築と言えるものだったろう。しかも相当高位の王侯のために築かれた墓にちがいない。聞けば、この地点から5kmほど西方に石材の散乱するローマ時代の都市遺跡があるという。残念ながらその都市遺跡の方は訪ねる機会を逸してしまった。また結局はこのあたりにカナートの痕跡を確認することもできなかった。とはいえた想像をたくましくすれば、ローマ時代、この付近に想定できる町がテル・タバン周辺との間に、カナートによって供給される水資源を保証する代わりに何か対価を得るという関係があったかもしれない。

ところで「ハブル・トライアングル」の西北端にファハリーエというミタンニ人の都市として名高い遺跡がある。ハブル流域でヘレニズム以後といえば、少し前まで彫刻類を伴う遺構がこのファハリーエ遺跡の一隅で発見されたという程度だった。アル・ホール近郊での見事な墓廟遺構の発見は、今後に期待される都市遺跡の調査とともにシリア北東部にまつわる古代後期、つまり西からギリシア、ローマ、東からペルシアの軍事、文化の潮流が押し寄せた時代、その歴史に貴重な光を投げかけることは間違いない。私たち自身のシリア遠征は、多くの調査隊と同様に從来の考古学的関心に発し、中期アッシリアの文書にたどりついたのだったが、ひとたび歴史の視点を、ヨーロッパ古典文化の時代、さらにはイスラーム勃興期に至る古代後期のダイナミズムに置くならば、より世界地図的な規模で東西の勢力が互いに交錯し

合った舞台としても、この地域はひじょうに興味深いものがある。

かつて筆者がイラクのハディーサ近郊で調査に従事していた折り、ユーフラテス沿いに次々に発見された西方由来のカタコンベ型の墓や、川の中島で発掘されたローマ軍の城郭など、メソポタミア低地部ではあまり馴染みのない遺跡を目の当たりにしたことがある。ローマの軍勢がユーフラテスに沿って東進し、ある時ついにはクテシフォンまで陥れたという史実を実感したものだったが、そういう史的感動をもたらしてくれる考古学の可能性をこの一帯は秘めているのである。

また、ハブル沿岸水没域の調査が進む中、アメリカ・セントルイスのミッションが掘り進めているトゥネイニールという遺跡では、ビザンチン時代の教会堂が2か所で発掘された。2棟とも馴染みの日干し煉瓦造り、漆喰仕上げの建物だ⁷⁾。さらにユーフラテスの本流沿いに目を移せば、ドイツ隊が中核都市ラッカ近郊のテル・ビアにおいて初期の教会遺構を発見したことが近年報じられている(STROMMENGER, 1994)。キリスト教建築史上、最も初期の教会堂遺構が発見された遺跡として紹介されるのは、イラク国境にほど近いユーフラテス沿いの都市遺跡ドゥラ・エウロボスだったことを改めて思い出す。さらに北の国境をトルコ側に越えれば、ニシビス(ヌセイビン)、エデッサ(ウルファ)といった初期キリスト教の要衝が控えている。当然と言えば当然なのだが、そういった時代の歴史と建築にとってもこの一帯は目が離せない。イラクの西南沙漠でキリスト教修道院遺跡アイン・シャーイアの教会遺構を実際に発掘した筆者にとってはなおさらのことである。

3. シリアの考古学と日本

ところでダムの建設に伴う遺跡調査はここハッサケに始まったことではない。シリアでは70年代のはじめ、ユーフラテス本流がタブカというダムで堰き止められた折り、流域100余キロにわたって多数の遺跡が水に没した。ムレイベトやアブ・フレイラといった定住集落誕生期の著名な石器時代遺跡も沈んだ。

日本からは古代オリエント博物館(館長・江上波夫)を中心とする組織が、74年からタブカ・ダムによる水没域の調査に加わっていた。78年の調査集結までに、ルメイラ、ミショルフェ両村において青銅器時代のストーン・サークル墓のほか、多量のローマ貨幣を出土した城塞遺構やカタコンベ型式の墓などを発掘し、ユーフラテス中流域におけるヘレニズムないしローマ文化の伝播を跡

づけた。この調査組織は1980年からアレッポの南、イドリブ市近郊のテル・マストゥーマへと転進し、新たな発掘を開始した。近くにはシュメール文明との交流で有名な都市エブラの遺跡テル・マルディフがある。マストゥーマの調査は95年まで断続的に続き、鉄器時代の集落構成と住居の解明に大きな貢献を果たすことが期待されている⁸⁾。

この調査に長く協力していた筑波大学は、並行してイドリブ西方に展開するエル・ルージュ盆地の考古学調査をめざし、試掘を含む予備的なサーヴェイを行っていた。最終的に選択した遺跡テル・エル・ケルクの発掘が1997年に始まり、最古期の土器を発見するなど早くも成果が報じられている⁹⁾。実はこの同じ調査隊が、私たちがタバン遺跡に着手する前年まで、やはり水没遺跡救済事業への協力として、ハブル河畔の小さな遺跡テル・ウンム・クセイールのハラフ文化を調査している¹⁰⁾。

イランのイスラーム革命、それに続くイラン・イラク戦争のあおりで調査のフィールドをシリアに求めた東京大学の考古学調査団は、1986年、ハブル川上流「トライアングル」地域に立地するテル・カシュカショク発掘からシリア調査の緒についた。テル・サラサート調査以来の初期農耕文化という伝統的な課題に応える条件を備えた遺跡ということだったと理解している。つづいて94年から97年までは、トルコ国境に近いユーフラテス本流に沿うテル・コサック・シャマリで調査に当たっている。前4000年前後のウバيد文化に属する住居、墓、土器工房などの遺構が注目されている¹¹⁾。

東京大学といえば、人類学と旧石器考古学の調査団の足跡はさらに古くに遡る。ネアンデルタル人の完璧な幼児骨を発掘したデデリエ洞窟の調査はつい最近1993年のことだが、同様の調査組織がパルミラ近郊のドゥアラ洞窟に向かったのはは1960年代末ことだから、日本発シリアでの学術調査の草分け的存在といえるだろう。

奈良県に開設されたシルクロード学研究センター派遣の調査団がシリア考古学に参画することになったのは1989年。パルミラの遺跡において今までほとんど手つかずだった「東南墓地」地区の調査を委ねられた。かつて果敢にローマに立ち向かった時代に製作された見事な彫刻をとどめる地下墓をたてつづけに掘りあて、1999年現在それらの保存工事まで担っている。新たな観光スポットとなるにちがいない。88年に奈良で開かれた「なら・シルクロード博覧会」が、県とシリアとを結びつけたのだった¹²⁾。

以上は、日本から派遣されてシリアで活躍する調査団による多彩な成果のうち、メソポタミア考古学と関連づ

けることのできるごく一部を垣間見たにすぎない。あるいは筆者の関心から見方に偏りがあったかもしれない。詳しく、また正当な評価とともに紹介するには、紙面の制約もあるが、ほかに適任の方がおられるにちがいないので、別の機会を待ちたいと思う。

4. おわりに

シリアではここ10年ほど、日本発の学術調査団だけでも上記のとおり多彩な活動を展開している。もちろん他の外国調査隊、それにシリア独自の活動もめざましく、メソポタミア考古学の舞台がイラクからそっくり引っ越しした観がある。海外の研究機関に広く門戸を開けるというシリア政府の施策がフィールド調査の活況に結びついている。

もっともイラクに関する考古学上の成果が低調というわけでは決してない。たとえばドイツ考古学研究所は、この機に乘じることなく、ウルク遺跡の研究書（最終報告書 *Ausgrabungen in Uruk-Warka, Endeberichte*）シリーズの刊行に余念がない。かつて東西ドイツに分散していた調査データが一本化されたことに加えて、関係者が無理なく国内研究に精力を傾けることのできる環境ゆえのことと思われる。私たちの紀要はじめ各国の逐次刊行物掲載記事を見ても、質量ともむしろ充実の方向にあるようすら見受けられる。

ただバグダード発行のイラク考古総局機関誌 “*Sumer*” 最新号（96年刊、Vol. 48）を見ると、湾岸危機以前に外国隊が行った調査の略報記事で誌面を構成するなど、辛うじて体裁を保っているにすぎない。地方博物館収蔵品や非合法発掘による出土品が大量に国外流出している問題を、当局は国際世論に訴えているが、簡単に事態が好転するものではない。一部の遺跡で考古総局独自の調査が行われているとも聞くが、イラクの文化財を巡る環境は依然危機的な状況にあることが窺える。なお、今のところ年に一度の通称「バビロン祭」が、かつて交流を深めた研究者たちが集う唯一の機会となっており、イラク側は外国調査隊の早期復帰を待ち望んでいる。

最後にイラクの東隣イラン・イスラーム共和国について一言ふれておこう。日本を含め、かつて盛況だった外国隊が全く活動していない状況はイラクと変わらない。しかし実状はイラクと違い、外国機関を閉め出してはいるものの、イスラーム革命後に一時期衰退したフィールド調査を、今やイラン独自に開拓しつつあるようだ。農地整備や道路建設に伴って全土的に考古学調査が活発化していることが、近年創刊された報告集から知ら

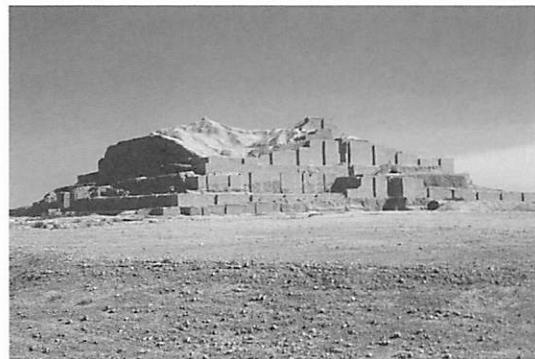


図8. チョガ・ザンビル遺跡のジググラト（1995年）。

れる¹³⁾。

また国内旅行は誰も比較的の自由なので、踏査という形式の考古学的調査は、非公式であるにせよ外国人にも開かれていると言えるかもしれない¹⁴⁾。おかげで非合法発掘による文化遺産の消滅といった情報も漏れ聞こえてくる（山内、1999）。

まだ公式に外国からの調査団を受け入れたという情報はないが、ユネスコのような国連機関は別扱いされている。事実、世界遺産となっている古代エラム王国の遺跡チョガ・ザンビルの保存修復事業が、日本政府拠出のユネスコ日本信託基金によって現在進められている¹⁵⁾（図8）。この事業がイランの豊かな文化遺産を再び海外の研究者に開ききっかけになることを、私たちは望んでいる。

以上のように、メソポタミア考古学のフィールドを提供する3つの国々の実状はそれぞれまったく異なっている。意に反して諸外国から排斥され疎外されつづけるイラク、一方、体制維持のために自ら孤高を守りつづけようとするイラン、正反対ともいえるような対外事情ではあるけれど、私たちフィールドを志す者にとっては、そのいずれもが大いなる不幸であることにちがいはない。果たしてシリアに見るような活況がその両国にいつ訪れるのであろうか。

注

- 1) 1974年までの調査報告書 (FUJII, 1976) のほか、主として国士館大学イラク古代文化研究所紀要「ラーフィダーン」(1980年創刊) に研究成果の公表が続けられている。
- 2) ハムリン調査の報告としては、藤井らによる概要報告 (藤井, 1981) があるほか、「ラーフィダーン」に適宜掲載している。
- 3) ハディーサ調査事業については藤井秀夫らの報告 (国士館大

- 学イラク考古学調査団, 1983; 藤井ほか, 1985), エスキ・モースルについては、研究所の井、沼本らの報告がある(井・川又, 1985; 沼本, 1988)。
- 4) アイン・シャーイア調査の成果は発掘報告(Fujii *et al.*, 1989)があるほか、これを契機とした筆者による初期教会建築に関する論考がある(岡田, 1999など)。
 - 5) 以下、シリアにおける日本発の調査団を紹介するに当たって、本来は活躍されている方々個人を網羅すべきところかもしれないが、簡潔を期して機関名を優先することにした。実状にそぐわない点があるかもしれないこと、関係者の皆様のご寛容をお願いしたい。
 - 6) テル・ブデーリの文書解説を担当したS. マウル氏が私たちの資料を快く引き受けてくれている(MAUL, 1999)。
 - 7) いまだ出版物には接しないが、St. Louis Archaeological Expeditionsのインターネットサイト "Tell Tuneinir Information" に詳しく報じられている。
 - 8) 紙面の関係で詳しくは記せないが、古代オリエント博物館による成果報告は「シリア考古学調査団報告書」(I-IV)(1979-88)のほか、「古代オリエント博物館紀要」(vol. 10, 1988以降)に詳しい。
 - 9) 「筑波大学シリア考古学調査団報告1:エル・ルージュ盆地における考古学的調査1」(1991)に始まる一連の調査報告があるほか、テル・エル・ケルクの調査結果についても一部報じられている(常木, 1998)。
 - 10) ウンム・クセイールの調査についてはすでに英文のフルレポートがある(TSUNEKI and MIYAKE, 1998)。
 - 11) カシュカショクの最終報告書は刊行済み(MATSUTANI, 1991)。コサック・シャマリの方は報告準備の途にあるようだが、とくに土器工房址については短報がある(西秋, 1998)。
 - 12) 調査成果は、主としてシルクロード学研究センター刊行の紀要に報じられている(樋口ほか, 1998)。
 - 13) イラン文化遺産庁から1997年刊行の奥付で "Archaeological Reports of Iran" の第1号が出版されている。イラン人による17篇の文化財調査概要が載る。まだ第2号は見ない。
 - 14) 日本からは東京外大や財中近東文化センターが小グループで、持続的な踏査行を実施しているようである。
 - 15) チョガ・ザンビール遺跡の保存事業には、筆者もユネスコのコンサルタントとして関係している。その事業経過については、本学会第7回学術大会(1996年)において発表したことがある。当時はまだ予備的調査を終えたばかりで、諸般の事情から正式な予算措置を伴う事業は1998年から開始された。
- 藤井秀夫ほか(1985): オウシーヤ遺跡A区, B区発掘調査概報。「ラーフィダーン」5-6: 111-150。
- 国士館大学イラク考古学調査団(1983): テル・アブ・ソール, 1981, 発掘調査概報。「ラーフィダーン」3-4: 5-25。
- 樋口隆康(1998): 「隊商都市パルミラの東南墓地の調査と研究」(シルクロード学研究5), なら・シルクロード博記念国際交流財団。
- 井博幸・川又正智(1985): テル・ジガーン第一次発掘調査報告。「ラーフィダーン」5-6: 151-214。
- 西秋良宏(1998): シリア銅石器時代の土器工房址「テル・コサック・シャマリ」。古代オリエント博物館編「平成9年度古代オリエント世界を掘る・報告集」(クバプロ), 15-20。
- 沼本宏俊(1988): テル・フィスナ遺跡の発掘調査。「ラーフィダーン」9: 1-72。
- 岡田保良(1998): メソポタミア初期教会遺構をめぐる建築的相似に関する一考察。「西南アジア研究」50: 1-19。
- 常木 晃(1998): 新石器時代の巨大集落遺跡—テル・エル・ケルク1997年度調査。古代オリエント博物館編「平成9年度古代オリエント世界を掘る・報告集」(クバプロ), 8-14。
- 山内和也(1999): イラン「洞窟遺宝」の発見。ORIENTE, 19, 19-23。
- Fujii, H. ed. (1976): *Al-Tar I, Excavations in Iraq, 1971 ~ 1974*. Kokushikan Univ., Tokyo.
- Fujii, H. *et al.* (1989): Excavations at Ain Sha'ia ruins and Dukakin caves. *Al-Rafidan*, 10: 27-88.
- MATSUMOTO, K. (1991): Preliminary report on the excavations at Kish/Hursagkalama, 1988-1989. *Al-Rafidan*, 12: 261-307.
- MATSUTANI, T. ed. (1991): *Tell Kashkashok : The Excavations at Tell No. II*. The University of Tokyo, Tokyo.
- MAUL, Stefan M. (1999): New information about the results of Tabatu. *Al-Rafidan*, 20: 49-55.
- OHNUMA, K., NUMOTO, H. and OKADA, Y. (1999): Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: A report of the 1997 season of work. *Al-Rafidan*, 20: 1-47.
- STROMMENGER, E. (1994): Die Ausgrabungen in Tell Bi'a 1993. *MDOG*, 126: 11-31.
- TSUNEKI, A. and MIYAKE, Y. (1998): *Excavations at Tell Umm Qseir in Middle Khabur Valley, North Syria - Report of the 1996 Season*. Univ. of Tsukuba.

追記

本稿提出後、日本西アジア考古学会編「平成10年度古代オリエント世界を掘る・報告集」(1999)に、テル・タバン、テル・エル・ケルク、テル・コサック・シャマリなどの最新の成果が報じられています。合わせてご参照ください。

引用文献

- 藤井秀夫編(1981): イラク、ハムリン調査概報。「ラーフィダーン」2: 5-129。

The Latest Japanese Contribution to Mesopotamian Archaeology

Yasuyoshi OKADA*

In Iraq, the main land of Mesopotamia, the Kokushikan University mission is the last one from Japan since the team from the University of Tokyo resigned the work at Tell Thalathat for reasons of the Iraq-Iran War arisen in 1980. In 1990, however, when the mission had already closed the excavation at the Early Christian site Ain Sha'ia, and was setting about the work at the Sumerian site Kish, the Gulf Crisis happened and forced a sudden stop of any field work in Iraq to all the foreign delegations.

Since then the main field of the Mesopotamian archaeology seems to have been shifted to the country of Syria, where foreign missions are welcomed to seek a new archaeological site containing the same cultural context as Mesopotamia, while Iran on the other is still shutting any foreign mission out from archaeological fields. The Kokushikan started excavations at Tell Taban, identifiable to a city of Middle Assyrian Tabetu, on the Khabur River in 1997, when some other missions from Japan, then, including ones from the Ancient Orient Museum, the Tsukuba University, and the University of Tokyo, have already achieved notable results on prehistoric to Iron Age archaeology. Moreover, the upper Khabur region should be noted as an important field of the time through the Late Antiquity to the Early Christian era. Nevertheless, reopening of the country of Iraq is still waited because of its definite significance for the Mesopotamian and even Iranian history.

Key Words: Mesopotamia, Archaeology, Syria, Excavations, Tell Taban, Kokushikan University

* The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, 1-1-1, Hirohakama, Machida, Tokyo 195-8550, Japan.

(Accepted, October 25, 1999)

アフガニスタン考古学遺跡の現状

小 谷 伸 男*

1. はじめに

—アフガニスタン文化財の危機—

1997年7月7-11日、ローマにおいて第14回南アジア考古学国際学会が開催され、私も出席し、研究発表した。その期間中、アフガニスタン文化財の保護を求める特別集会がもたれ、Mehria Rafiq MUSTAMANDY夫人から次のようなアッピールがなされた。その内容はCircle of Inner Asian Art [略号CIAA] ニュースレター第6号、p.12にも掲載された。

アフガニスタンでは内戦が勃発して以来、歴史的遺跡は管理されないままに放置され、博物館は破壊と掠奪にさらされている。アフガニスタン国内の考古学調査はすべて中断された状態である。地域によっては、軍隊の司令官が考古学遺跡の盗掘を行なっており、かれらはブルドーザーを使って遺跡を掘り返し、高価な遺物を取り出している。またかれらは地雷を敷設し、ロシア軍の置き去りにした戦車を使って部外者が介入するのを防いでいるという。MUSTAMANDY夫人がもっとも深刻な危険にさらされていると指摘する遺跡、遺物は次のものである。

ティリア・テペの黄金遺宝：ナジブラ NAJIBULLAH政権の期間は、ティリア・テペの黄金遺宝は大統領府内にある国立銀行の地下金庫に保管され、安全であると信じられてきたが、その後の状況は不明である。

ベグラム出土の象牙細工：これらは現在パキスタン国内で売りに出されている。その一部はすでに前パキスタン国務大臣のNasirullah BABAR氏に買い取られ、残余はなお買い手を待っている状態である。その二、三点がondonの市場に売りに出された。

バーミアーン大仏の爆破予告：国際的世論の圧力がタリバーンたちにバーミアーン大仏爆破の実行をためらわせている。しかしその危険がまったく消えたわけではない（1997年5月発行、CIAAニュースレター5号、p.10参照）。最近のBBC放送の伝えるところによると、反タ

リバーン勢力の軍隊と難民たちがバーミアーンに避難はじめ、石窟を生活の場とするため、壁画が焚火で煤けてしまっているという。

テペ・ミルザカ Mir Zakah出土の貨幣：このコレクションについてはユネスコ UNESCO が買取資金を工面している最中にもかかわらず、スイスで売りに出されてしまった。テペ・ミルザカの遺跡そのものはこの四年間、ある特定の部族によって掌握されてきた。古美術商のネットワークには等身大の彫像や、黄金装飾品、その他の遺物が出土したという噂が流されている。ニューヨーク在住のタリバーン派情報によると、現在遺跡はタリバーン派の手によって厳重に警備され、地元民や盗掘者たちの掠奪から保護されているという。

カーブル国立博物館：カーブル国立博物館の貴重な収蔵コレクションはほとんど掠奪され、破壊されてしまった（CIAAニュースレター5号、p.10）。

テペ・ショトゥール遺跡と博物館：1984年の空爆後、ハッダに所在するテペ・ショトゥールの遺跡博物館は、その寺院と石窟とともに掠奪者の手中に陥いった。博物館全体が破壊されており、持ち出された収蔵品は国際市場に出回っている。発掘遺物のうち、登録後にジェララード市内のSeraj-ul-Emarat倉庫に保管されていたものは、みな掠奪され、そのうちの菩薩頭部はニューヨークのメトロポリタン博物館に買い取られた。

スルフ・コタル、アイ・ハヌム、ティリア・テペ遺跡：伝えられるところによると、スルフ・コタル遺跡は破壊されてしまった。アイ・ハヌム遺跡については、盗掘者たちはまずブルドーザーとトラクターを使って地表を削りとり、その後勝手に遺跡を掘りかえしているという。シバルガン所在のティリア・テペ遺跡も同じ運命をたどっている。

会議では、これらのショッキングな事実を世間に公表し、できうるかぎりの対策が構ぜられるべきであるとの決議がなされた。なお、1999年2月5日のNHKのテレビニュースと翌日の朝日新聞によると、タリバーンの砲

* 富山大学人文学部

(受理：1999年9月18日)

撃によって、バーミアーン東大仏（高さ38m）の顔面、胴体の一部、その周辺の壁画がすでに破壊されていることが、1月下旬に現地入りした日本人ジャーナリスト常岡浩介氏によって確認された。砲撃がおこなわれたのはその二、三ヵ前の1998年11、12月頃と思える。

2. 京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン調査

私とアフガニスタン考古学遺跡との出会いは1960年夏、故水野清一教授の組織する京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査に参加したことから始まる。調査隊自体は1959年に発足し、その年度にイラン、アフガニスタン、パキスタンを広く踏査し、調査対象とする遺跡の選択と現地の政府あるいは考古局との交渉をすませていた。私は本格的な発掘調査を開始した第二次（1960）から第五次調査（1965）まで、連続して調査隊メンバーとして加わった。調査の目的は水野清一教授らが第二次大戦中七年間にわたって調査した中国北魏時代の雲岡石窟の研究をふまえ、中国の仏教美術の源流をパキスタンとアフガニスタンのガンダーラ仏教美術に探ろうとするものであった。この調査によって雲岡石窟の石窟構造、美術様式、図像学などの淵源問題がどこまで究明されるか、楽しみであった。ただ、私はまだ大学院に在籍の身で、研究背景は無に等しく、見るもの聞くもの、すべてが新しい体験であった。水野調査隊は1967年の第六次調査で終了した。水野清一教授はその時に罹ったマラリアで体力を消耗され、またその後に肝硬変を併発されるなどして入退院を繰り返し、1971年5月に永眠された。大部な調査報告書が7冊出版されたが、雲岡石窟など中国仏教美術に対する該博な知識を背景に、先生の本格的な研究はこれからのことであったと思うと残念でたまらない。

私は第六次調査には加わらず、1966年から67年にかけて西アジア地域派遣研究員としてイランに留学していた。その帰路アフガニスタンに立ち寄っているので、1967年が私のアフガニスタン訪問の最後の年である。周知のようにアフガニスタンはその後しばらくして1973年に王政を廃止し、共和国となった。その背後にソ連の圧力があったと思われる。1979年、成立したばかりのカルマル政権を擁護するためにソ連は10万人の軍隊をアフガニスタンに進駐させた。カーブル市内はソ連の戦車で占められた。アフガニスタン国内では同時に反ソ、反政府のゲリラ活動が組織され、激しい抵抗が始まった。その後10年、ソ連は予期した成果をあげることなく、1989年2月

ついにすべてのソ連軍隊をアフガニスタンから撤退させた。そしてソ連邦自身も崩壊の道をたどらざるをえなかった（1991年、八月革命）。アフガニスタンに残された共産党ナジブラ政権もそのあとを追って崩壊した（1992年4月）。それでアフガニスタンに平和が訪れたかというと、それまで共同して戦っていたゲリラ組織同士がお互いに主導権争いをはじめた。それが国内の宗教、民族の対立に発展した。しかしながらよりも問題を複雑にしたのは、アフガニスタンに利害関係をもつ外国勢力の介入である。それが問題の解決を長引かせ、戦闘をより激化させている。この長期紛争でアフガニスタンに居残った民衆の生活は混乱の極に達している。「チャイルド・ソルジャー」の表現があるように、子供が銃を持たされ兵士となって戦う。アフガニスタンの子供は成人を待たず戦死する。こうした悲劇は早く終わってほしい（表1）。

アフガニスタンの悲惨な状況を前にして、外からアフガニスタン文化財の重要性や保護を訴えても虚しく聞こえる。しかしいつかまた平和がよみがえるのを待ち望み、その情勢を見守り続けたい。ここではまず1960年代の京都大学水野調査隊のアフガニスタンにおける考古学調査、ついでそれ以後、1979年のソ連軍進駐までの期間のアフガニスタンにおける考古学新発見についてふりかえってみたい。

1) 1960年代の調査活動

—アフガニスタンへの道—

水野清一の率いる日本隊の調査期間は毎年7月中旬から12月末までの約6ヶ月、前半をアフガニスタンで過ごし、後半をパキスタンで過ごした。当時、私たちの調査

表1. アフガニスタン現代史年表.

1747	ムガール朝よりアフガニスタン独立（ドゥラニー王朝）
1838	第一次イギリス・アフガン戦争（ロシアの南下阻止）
1878	第二次イギリス・アフガン戦争
1893	アフガン・インド国境画定（デュアランド・ライン）
1919	第三次イギリス・アフガン戦争
1933	ザーヒル・シャー国王即位（-1973）
1973	ダーウド元首相によるクーデター（王制崩壊、アフガニスタン共和国成立）、4月 ダーウド大統領殺害
1978	民主共和国宣言（タラキ、アミン、カルマル）
1979	カルマル政権援助のためソ連軍アフガニスタンに進駐
1986	カルマル辞任、新書記長にナジブラ就任
1988	5月ソ連軍アフガニスタンより撤退開始、翌年2月完了
1992	4月ナジ布拉共産党政権崩壊

隊はカラチから出発した。あらかじめ日本から貨物船で発送したジープや調査用具などをカラチの港で受け取り、一路アフガニスタンに向う。パキスタン北部の国境の町ペシャーワルまで約2,000km、順調にいければサッカル、ムルタン、ラホールと宿泊しながら、車で4日の行程である。しかし経験不足に加え、灼熱の季節にタール砂漠の迫るシンド州の悪道を走り抜けるのは、私たちには大きな試練であった。車の事故、故障など何度か失敗を経験した。なんとかこの難路を通過し、ムルタンからさらに北上を続けると、緑の樹木や耕地が次第に多くなり、豊かなパンジャーブ地帯となる。パンジャーブの州都ラホールは一時期ムガール王朝の首都であった。現在のパキスタンの首都はラホールの北約400km、ラワルピンディに隣接して建設された新都市イスラマバードである。1960年代はまだ建設途上であった。私たちの道はラワルピンディ旧市街を通過して北上する。ラワルピンディの町から30分ほど走ると、右折「タキシラ遺跡」の標識を見る。タキシラには都市遺跡が三カ所とその周辺に仏教寺院址が多数点在する。イギリスの考古学者J. MARSHALLが20年あまりの歳月を費やしてこれらの遺跡を組織的に発掘した(1912-34)。その結果、古代のタキシラ国は同様にガンダーラ式仏教美術を享受していたことがわかった。ガンダーラ国そのものはその北、現在のペシャーワルの町を扇の要(かなめ)にみたて、その北扇状に広がる盆地である(東西約100km、南北約80km)。アトックでインダス河に架かる長い橋を渡れば、それからさきが西北辺境州、古代のガンダーラ国である。北辺を山で囲まれ、アフガニスタンと境を接する。人々の服装、ことばも変化し、パシュトゥ人の世界に入る。私たちは調査の後半にパキスタンに戻り、この盆地の中央シャハバズガリ村に滞在し、調査を行った。1960年から67年にかけて、私たちは二つのガンダーラ仏教寺院址(メハサンダ、タレリ)と非仏教遺跡(神殿址?)のチャナカ・デーリを発掘調査した。それから約20年後、私はもう一度京都大学ガンダーラ遺跡調査隊に加わり、ラーニガート仏教寺院址を発掘した(1984、86、89年)。周辺の景色はさほど変わらないが、アフガン難民の村ができていたり、アフガニスタンのバスを見かけたりする。今回は紙面の関係で詳しく報告できないが、私たちは三つのガンダーラ仏教寺院の発掘をとおし、ガンダーラ美術の年代や性格について貴重な資料を得、多くの問題解決ができたと思う。

さてペシャーワルの町を出て車で1時間ほどで有名な難所ハイバル峠にさしかかる。つづら折の峠道を登りきり、しばらく下るとアフガニスタンとの国境トルハムに

つく。出入国、通税に手間取らなければ、その日のうちにカーブルをめざす。道は一度下って灼熱のジェララバード平野に入る(海拔約400m)。行きに立ち寄る暇はないが、ジェララバード周辺には多数の仏塔、僧院の廃墟、石窟が点在する。東南に足をのばせば、ハッダの仏教遺跡群、カーブル河左岸のフィルハーナやバーウル石窟群などを訪れることができる。1965年度調査の後半、インド・パキスタンの間に戦争が勃発し、私たちはパキスタンに再入国できず、やむをえずジェララバード付近に滞在して調査した。仏教遺跡の多さ、規模からすると、ジェララバードはガンダーラ国と並んで重要な仏教聖地とみなされていたことがわかる。

ジェララバードからヒンドゥクシュ山中に入ると、道は険しく、谷間を縫うように登っていく。アフガニスタンに鉄道はなく、トラック輸送に頼るしかない。同じ山道を大型トラックがあえぎ、あえぎ登っていく。首都カーブルはヒンドゥクシュの中腹、海拔1,800mのところに位置する。距離の割に、時間を要する道程で、私たちのカーブル到着はいつも真夜中になったと記憶する。

2) カーブル博物館

カーブルの短い滞在は暑さを忘れさせ、乾燥した涼気のなかで、ホッと一息つく。町中ではさまざまな人種の顔が見えてくる。アフガン(パシュトゥ)、タジーク、ハザラ、ウズベク人など、アジア系とインド・アーリア系の顔が共存する。カーブルの南郊ダルルアマンに国立カーブル博物館があり、アフガニスタンから出土した貴重な考古・美術遺物が陳列されていた。私は何度も見学に通った。博物館は1918年に王室コレクションを収蔵するために設立されたものであるが、陳列品は1922年以後30年間アフガニスタン国内の発掘を独占したフランス考古調査団(Délégation archéologique française en Afghanistan: 略称DAFA)の発掘品が大部分である。まず広い玄関ホールに足をふみ入れると、右手壁面にスルフ・コタル出土の石灰岩ギリシア文字碑文(幅132cm、高117cm、厚さ30cm、1957年発見)が目に入る。大きく、端正に刻まれたギリシア文字を見ていると、ここはヨーロッパの一角かと錯覚する。スルフ・コタル遺跡については後で紹介するとして、多くの展示品は二階にある。出土遺跡ごとに部屋を分け、その都度鍵をあけて見せてもらう。ハッダ、ショトラク、ベグラム、フォンドキスタン、バーミアーンの各室にはそれぞれの仏教時代の遺物、先史室にはムンディガクの彩文土器、ガズニ室にはイスラム遺物、古銭室にはギリシア・パクトリア銀貨など多数のアフガニスタン出土古代貨幣が陳列されていた。

ベグラム室：なかでも見応えのあるのはベグラムの遺宝である。ベグラム遺跡はカーブルから北へ峠を越えたチャリカル盆地内にある。クシャン王朝の都城のひとつと思われ、1937年にフランス隊のアッカン夫妻がその宮殿址を発掘した。そして幸運にも密閉されたまま忘れられた宝物庫にぶつかった。室内からローマ製のガラス器約70点、青銅容器やブロンズ像、インド製の象牙装飾板、パルティアの彩釉陶器、それに中国の彩画漆器などが発見された。ヒンドゥクシュを越えて往来するキャラバンの献上品、あるいは通行税として抽出された商品の一部であろう。さまざまな技法のガラス器はいずれも西暦1-2世紀のローマ領エジプト産のものであり、インド洋を経由し、インダス河をさかのぼって運ばれてきたものである。その一部は絹の見返りとして中国まで運ばれた。薄暗いベグラム室でそれらみごとな芸術品を鑑賞していると、シルクロードの中継地であった当時のアフガニスタンと世界からとり残された現在との落差を改めて感じる。ベグラムの遺宝に限らず、アフガニスタンの考古学遺物にはそのものの古さ、美術的希少価値のほか、忘れ去られた歴史を復元してくれる歴史的価値がある。アフガニスタン一国の歴史ではなく、世界史を書き変える証言である。私たちがアフガニスタンで調査する理由もそこにある。

ショトラク室：ベグラム都城址から東北、パンジシリル河の右岸に臨んで仏教寺院がつくられた。ショトラク室はそこで発掘された仏像、浮彫を展示する。カーブル近郊のパイヤタワから発見された仏像も並ぶ。それらを見ると、タキシラやペシャワールのガンダーラ彫刻とは違った風格があるのに驚く。同じ緑泥片岩で彫刻されているが、彫刻技法は粗放である。力強さはある。ガンダーラ彫刻が衣文の襞をからだの動きにあわせて流れるように美しく表現しているのに反し、むしろ正面性、左右対称を重んじ、威厳さの表現を優先する。アフガニスタン彫刻の特色は、大きく見ればギリシア的写実表現からイ

ラン的表现伝統への回帰といえる。

3) ヒンドゥクシュを越えて（図1）

調査隊のメンバーがカーブルで勢揃いした後、さらに北上して目的地に向かう。1960年はハイバク石窟、1962-67年はクンドウズとその周辺であった。カーブルを出發してチャリカル盆地に入ると、左手の山裾に大きな仏塔トープ・ダラが遠望される。ベグラム、ショトラクの遺跡は右手前方にある。1963年にはそのまま北に進んでヒンドゥクシュを越える自動車道路がソ連の技術援助で完成するが（サラング峠、海拔3,500m）、それ以前私たちは西に大きく迂回してシバル峠（海拔3,000m）でヒンドゥクシュを越えた。峠を越えて少し下ると、左手にバーミアーン渓谷へ向かう道と北へ進む道との分岐点に来る。往路は先を急ぐが、帰路に私はこの道をたどって二度バーミアーン（海拔2,500m）を訪れた。

バーミアーン：狭い山道を進むと忽然と渓谷が広がり、北側に礫岩の黄褐色断崖、そこに開削された無数の石窟とその二体の巨大なブッダ像が姿を現わす。渓谷入口に近い東の大仏は高さ38m、西端の大仏は55mあり、大きな龕のなかにおさまっている。龕の天井、側壁には色彩鮮やかな壁画が残存する。そのほか高さ数メートルの坐仏も三体彫出されており、同じく龕の壁面に壁画を残す。石窟内にもさまざまな建築意匠で彫出され、壁画を残すものがある。壁画にはサン朝ペルシアの様式によるもの、インドのアジャンタ壁画に似通う様式もあり、大仏とその壁画の製作年代は西暦400年頃と私は推定している。しかしバーミアーン石窟開削に至る歴史背景、その施主が誰かなどについてはまだ解明されていないところが多い。最近、1998年末に38m大仏の頭部周辺がタリバーン軍の砲撃で、無残に破壊された。それが偶像を忌み嫌う宗教的意図によるのか、あるいはゲリラ同士の戦闘のさいの偶発的破壊なのかわからない。長年の風雨、戦乱から残存してきた遺跡がこのような形で破壊される

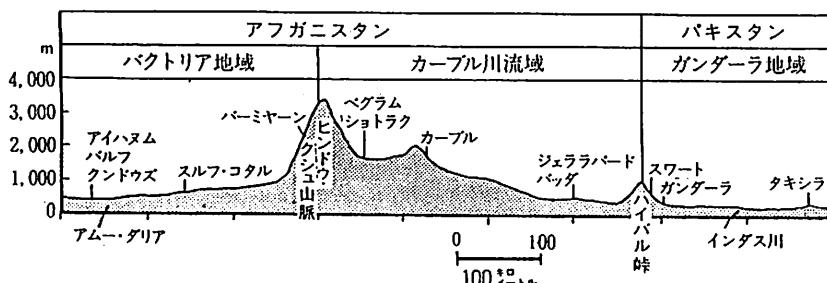


図1. ガンダーラ・アフガニスタン地形断面模式図。

のは残念である。しかしバーミアーンは大規模な遺跡であり、簡単に消滅することはない。歴史を語りうる遺跡、遺物がまだまだ多く残されており、人々がまたバーミアーン渓谷を訪れる、その雄大な景観と遺跡とに感動する日が来るにちがいない。

スルフ・コタル：ヒンドゥクシュを下っていくと眼前にアフガニスタン北部の平原が眺望できる。ヒンドゥクシュ南斜面を流れ下る川はもはや海洋に注がない。アム・ダリアに合流してアラル海に注ぐか、戻なし川となって砂漠に消える。内陸の河川で、地域の乾燥度は一層強くなる。ヒンドゥクシュ山脈は自然的にも文化的にも、インド世界と中央アジアを分ける大きな分水嶺である。プリムリの町で道は二手に分かれる。右手を行けば、クンドゥズを経てバダクシャン、ワハンと東方に通ずる。左手を行けば、ハイバク、タシュクルガンを経てマザリシャリフ、バルフと西方に通ずる。左手ハイバクへ向かって進むと、まもなくスルフ・コタル遺跡の下を通り、カーブル博物館で見たギリシア文字パクトリア語碑文の出土地である。1963年10月、私たちはちょうどフランス隊の発掘作業中に訪ねたことがある。隊長のD. シュルンベルジェ教授（1904-1972）がみずから私たちのために遺跡を案内してくださった。この遺跡の発掘は1952年にシュルンベルジェ教授によって開始され、その年1963年で完了することになっていた。遺跡は独立した小山である。その斜面を削り、四段のテラスとそれらを貫く石積階段をつけ（高さ47m）、登りきると頂上に城壁で囲まれた神殿境内があり、その中央部には方形基壇（4.65m×4.65m）と四隅に礎石を備えた内陣、それを取り囲む回廊からなる神殿（A）がある。基壇の上に何が安置されていたか、主神の彫像かそれとも火の祭壇であったか不明である。さきの出土碑文（SK4）に、「この神殿はカニシュカ王の勝利を記念して建立されたが、水が涸渇したため一度荒廃に帰し、神々もほかへ遷移した。カニシュカ紀元31年（ca. A.D. 175）に役人ノコンゾコがここに来て、新しい井戸を掘り、神殿の機能を回復させた。」という内容が書かれていた。この神殿がクシャン王朝の守護神殿のひとつであったことがわかり、クシャン王朝の仏教以外の宗教活動を示す貴重な遺跡として注目される。

ラバタク碑文：スルフ・コタルの発掘が完了して久しくなるが、1993年3月、戦乱のアフガニスタン、ラバタク村付近の廃墟で、村人が偶然にギリシア文字パクトリア語碑文を発見した。ラバタクはプリムリの北40km、ハイバクの東40kmのところ、スルフ・コタルからあまり遠くない。付近で地雷撤去にあたっていたボランティア活動家のイギリス人が碑文を撮影し、写真を大英博物

館に送ってきた。最近この写真を手がかりに解説が発表された。内容は「クシャン王朝のカニシュカ王が自らの即位を記念し、王家の守護神ナナ、ウンマなどの神々を祀る神殿を建立させた。そして王はそれら神々の彫像を作成させ、同時にクシャン国王祖先三代とカニシュカ自身の肖像も製作させ、神殿に安置することを命じた。」碑文中にカニシュカ王の長寿を祈願する文章があるので、碑文作成はカニシュカ生存中のことであり、さきのスルフ・コタル碑文より20-30年古くなる。ラバタク碑文の出土地はスルフ・コタルとは別の遺跡と考えられているが、内容的にはスルフ・コタル神殿の創建記念碑と見てもおかしくない。スルフ・コタル神殿から神像の存在は確認されなかったが、クシャン諸王の彫像は神殿前方の回廊からが三体発見され、ひとつはカニシュカ王のものとされ、それらはカーブル博物館に碑文とともに陳列されていた。ラバタク碑文の発見でクシャン王朝の歴史がより理解しやすくなったことは確かである。現在の状況では考古学者による現地調査は不可能であり、悔やまれる。

ハイバク石窟：私たちの目的地ハイバクはスルフ・コタルを通過し、さらに60kmほど西北に進んだ海拔1,000mのオアシス集落である。1960年、約1月そこに滞在し、郊外の石灰岩丘陵に開削された石窟寺院（タフティ・ルスタム）を調査した。山頂に大きな仏塔、麓に石窟五所が並んで存在し、ひとつの伽藍を構成していた。石窟内部にはもはや彫刻、壁画の類は残存せず、私の目にはまさしく「ガランドウ」であった。その測量にあけくれる単調な作業に私は少し物足りなさを覚えた。しかし報告書ができあがってみると、写真、測量図は石窟の全貌を記録する貴重な資料であり、水野先生の解説は当時の石窟の華麗さをほうふつとさせる筆致で書かれており、先生との経験の差を十分に思い知らされた。

3. 1979年までのアフガニスタン考古学新発見

私たち日本隊は1962-67年まで、クンドゥズ周辺で仏教時代の遺跡を発掘し、それなりの成果を挙げた。しかしフランス隊、ロシア隊の調査活動はそれらの影を薄くしてしまうほどの大きな考古学発見をなしあげた。

アイ・ハヌム：1963年10月、スルフ・コタルの遺跡でお会いしたシュルンベルジェ教授は長身、初老風貌で、登山用の杖でからだをささえながら私たちを案内された。そして最後にスルフ・コタルの発掘終了とともに自分は引退すると告げられ、次期隊長のベルナールP. BERNARD氏を呼んで私たちに紹介してくださった。その

時話題に出なかったが、フランス隊は次の発掘候補地をアイ・ハヌムにねらいを定めつつあった。シュルンベルジェ教授は私たちと出会ったすぐあと、11月に隊員M.ルペール氏と二人でクンドゥズの東北55km、アム河南岸に横たわるアイ・ハヌム遺跡を訪ねている。遺跡発見のきっかけは当時のアフガン国王ザーヒル・シャーが国境付近で狩猟中、民家の庭先でコリント式柱頭（石灰岩）をみつけ、珍しく感じてシュルンベルジェ氏に話したことにはじまる。その場所はコクチャ河がアム河に合流する地点、アフガニスタン・ソ連（現在タジキスタン）の国境線であり、国防上外国人の立ち入りが禁止されていた、いわば調査の空白地帯であった。二人は滞在2時間の特別許可を得て遺跡を訪れ、ヘレニズム文化が地下に埋もれていることを確信した。翌年、遺跡に10日間滞在して試掘し、それが紛れもなくバクトリア・ギリシア

人の植民都市であることを確認した。フランス隊の悲願が通じ、1965年からベルナール隊長のもとに発掘が開始され、毎年継続した。遺跡の7、8割が発掘されたところで、1979年のソ連軍進駐で調査は中断され、今日に及んでいる。発掘されたギリシア人都市のプランは図に示すとおりである（図2）。

ティリア・テペ：ロシア調査隊はイタリア、日本よりも少し遅れ1969年よりアフガニスタンの考古学調査に乗り出した。アフガニスタン北部、バルフ以西の地域に調査の主眼を置き、ディルベルジン・テペやティリア・テペを発掘した。ティリア・テペはバルフの西北100km、シバルガンの東北5km、錦畑の中にある小さな丘（直径100m、高さ3m）であった。隊長のサリアニディV. SARIANDI氏はそこに埋もれた1,000-500B.C頃の神殿遺構を発掘しようとしていた。ところが1978年のシーズン

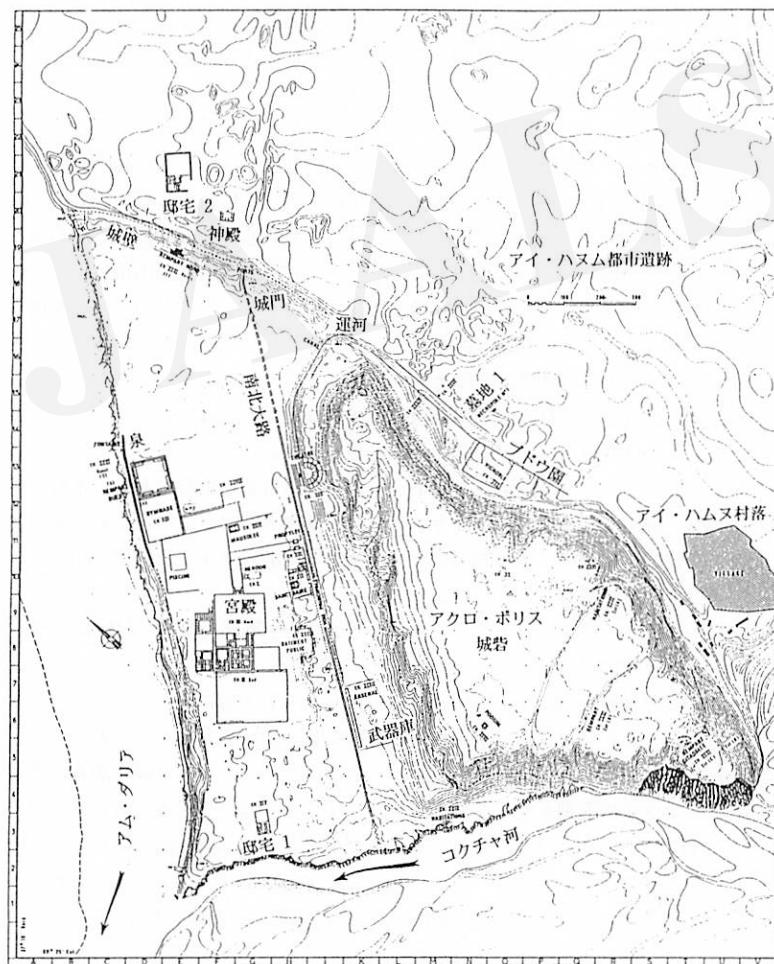


図2. アイ・ハヌム都市遺跡図。（BERNARD, 1988: *Fouilles d'Ai Khanoum IV*による）

終わり頃、神殿廃絶後にその上層に掘りこまれた六基の墓を発見した。墓の規模は小さいが、墓主（男性1、女性5）はみな金銀細工の服飾、装身具をつけて埋葬されていた。墓標がなく、幸運にも盗掘を免れていた。また発掘者にも予期せぬ遭遇であった。装身具が豪華であつたばかりでなく、中国製の連弧文清白鏡三面、西方式の柄つき青銅鏡三面、ローマ製ガラス瓶、ティベリウス皇帝金貨（発行A.D. 16-21）、パルティア王金、銀貨、インド製の象牙櫛などが出土し、ペグラムの遺宝と同様にアフガニスタンを舞台とした国際貿易、東西文化の交流を裏付ける大発見であった。テリア・テペの発掘調査も第7の墓の存在を確認しながら、ソ連軍の進駐で調査の中止を余儀なくされた。ティリア・テペの発掘品はカーブル博物館に引渡されたが、その後の状況は冒頭に書いたとおりである。私は1999年の夏、ライデン大学で開催された第15回南アジア考古学国際学会で発掘者サリアニディ氏に会い、親しく話すことができた。ティリア・テペの発掘品の運命についてサリアニディ氏は悲観的であった。

アフガニスタン国内紛争には周辺諸国および大国の利権が絡んでおり、問題の解決を難しくしていると指摘した。確かに今中央アジアの政治、経済情勢の変化でアフガニスタンを経由する交通路の重要性が再びクローズアップしつつあることは事実である。アフガニスタン再生のチャンスでもある。ただこれ以上犠牲を重ねずには、平和裏にアフガニスタンの再生、復興に向かって欲しいと思う。

参考文献

- 宮治 昭・モタメディ遙子編（1979）：『シルクロード博物館』（世界の博物館19）講談社。
- 水野清一編（1962）：『ハイバクとカシュミル・スマスト』京都大学。
- 水野清一編（1968）：『ドゥルマン・テペとラルマ』京都大学。
- 水野清一編（1971）：『バーサーワルとジェラーラーバード・カーブル』京都大学。
- 小谷伸男（1996）：『ガンダーラ美術とクシャン王朝』（東洋史研究叢刊51）同明舎出版。
- 小谷伸男（1999）：『大月氏—中央アジアにナゾの民族を尋ねて』東方書店。
- サリアニディ、V.I. 著、加藤九祚訳（1988）：『シルクロードの黄金遺宝—シバルガン王墓発掘記』岩波書店。
- BERNARD, P. (1973-92): Fouilles d'Ai Khanoum. I-VIII. *Mémoires de DAFA*, Paris.
- FUSSMAN, G. (1983, 1990): Surkh Kotal en Bactriane. I, II. *Mémoires de DAFA*, Paris.
- FUSSMAN, G. (1998): L'inscription de Rabatak et l'origine de l'ère śaka. *J. Asiatique*, 286: 571-651.
- SIMS-WILLIAMS, N. (1998): Further Notes on the Bactrian Inscription Rabatak. *Proceedings of the Third European Conference of Iranian Studies*, Part 1: 79-92, pls. 9-12. Wiesbaden.
- SIMS-WILLIAMS, N. and CRIBB, J. (1996): A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great. *Silk Road Art and Archaeology*, 4: 75-142. Kamakura, Japan.

Afghanistan's Cultural Heritage and its Current Crisis

Nakao ODANI*

From 1960 through 1965 I engaged in archaeological excavations at several sites in Afghanistan. However, since the outbreak of the civil war, no archaeological expeditions have taken place. In fact, many historical sites have been exploited by illegal diggers who use bulldozers and land mines to unearth the precious artifacts. Many of these artifacts flow into the black markets of the world. Many new finds, probably looted from such sites as Bamiyan, Hadda, Tepe Mir Zahah have generated great interest among specialists in the field. They include Buddhist manuscripts, inscriptions, coins, sculptures and paintings. Nevertheless, the Afghan cultural heritage is in grave danger and its plunder must be considered an irrecoverable loss for mankind.

Key Words: Archaeology, Afganistan

JAALS

* Faculty of Humanities, Toyama University. Gofuku, Toyama 930-8555, Japan.

(Accepted, September 18, 1999)

マルギアナの青銅器時代オアシス集落址 —トゴロク21号神殿遺跡を中心として—

加 藤 九 祐*

マルギアナ（マルグシュ）は、中央アジア、トルクメニスタン共和国南部、ムルガブ川の河口部デルタ・オアシス群の古代名称である。ムルガブ川は、全長978km、流域面積4万6900km²、アフガニスタン側ではパンディ・トルキスタン山脈とサフェドコー山脈の間のせまい谷を流れるが、トルクメニスタンに入ると扇状の灌漑地となり、カラクム砂漠への出口ではデルタを形成している。この川はマルギアナにある今のマルイ市の上流でカラクム運河と合流している。増水期は3-5月で、平均の水量は河口部から486kmのタフタ・バザル集落で毎秒52m³、混じっている泥土は平均4500g/m³である（ソビエト大百科、1974年）。

ムルガブ川のデルタは、今ではきびしい砂漠であるが、青銅器時代には多くの集落のあったことが、20世紀初頭以後知られ、1959年代以後、旧ソ連邦の考古学者による発掘調査が行なわれるようになった。考古学者V.I. SARIANIDI（1929年生まれ）は、日本ではアフガニスタン北部、シバルガン付近のティリヤ・テペ墓地での黄金遺宝の発掘によって知られているが、タシケント大学歴史学部考古学科を卒業後、1950年代からムフガブ川デルタ（古代マルギアナ、アケメネス朝の楔形文書ではマルグシュ）の調査に加わり、アウチン・オアシスの中心的集落アウチンを発見、マルグシュ研究の端緒をつくった。調査は1959年に中断されたが1972年に再開され、ソ連科学アカデミー考古学研究所の中にマルギアナ（マルグシュ）考古学調査団が編成された。トルクメニスタン共和国の考古学研究所もまもなくこれに合流した。1974年マルギアナのゴヌル・オアシスが発見され、ゴヌル1号集落址の発掘が始まり、同時にトゴロク1号集落址から完形の祭祀容器が発見された。1977年春、作業はトゴロク・オアシスに集中され、30以上の集落址が調査された。1978年にはケレリ4号、アジ・クイ8号が、1981-83年にはゴヌル1号、83年にはドゴロク1号、24号、21号が発掘され、1984-86年にトゴロク21号の発掘調査が終

結した。

これらの調査の結果、ムルガブ川の古代デルタには面積約3000m²の大居住地のあったことが判明した。また1990年現在で、砂丘の間に150以上の古代集落址の存在が新たに確認され、ほかにも多くの集落址が流砂の下に埋もれていることが判明した（図1）。

古代集落址は、おおむねムルガブ川の扇状デルタの古代流路に沿った南北の線に散らばっていた。今のところ Kelleli, Taip, Adam-basam, Auchin, Gonur, Togolok, Adzhi-Kui, Takhirbai, Egri-Bogazなどのオアシスが知られている（図2）。このうち最古のものはケレリとエグリ・ボガズの遺跡であって、前2000年紀初頭に比定されている。次がゴヌル、アウチン、アダメ・バサム、アジ・クイ、タイプなどのオアシス群で、前2000年紀中頃に比定され、この時期が古代マルギアナの全盛期とされている。トゴロクとタヒルバイのオアシスは、前2000年紀後半から前1000年紀初頭に比定されている。

ムルガブ川の古代デルタに人が住みはじめたのは前4000年紀末で、ケレリ・オアシスの北縁で稀に見つかる土器片から見て、住民はゲオクシュル文化（トルクメニスタン南部の前4000-前3000年紀の文化）タイプの東部アナウ系であった可能性が高いという。サリアニディによると、前2000年紀に、人びとの生活の中心が伝統的な農耕中心地であった南トルクメニスタンからムルガブ・デルタへ移動した。サリアニディはムルガブ・デルタこそが、ダリウスのビヒストゥン碑文に出てくる「マルグシュの国」であると主張している。古典古代の文献では、マルグシュがなまって「マルギアナ」になったのだという。

以下において、サリアニディらの発掘成果のうち最も重要なトゴロク21号遺跡を中心に、マルグシュの文化を紹介したいと思う。トゴロク21号は神殿遺跡であったと考えられている。トゴロク・オアシスは31の集落址からなる遺跡群で、その中心はドゴロク1号である

* 180-0002 武藏野市吉祥寺東町2-40-20

(受理：2000年2月9日)

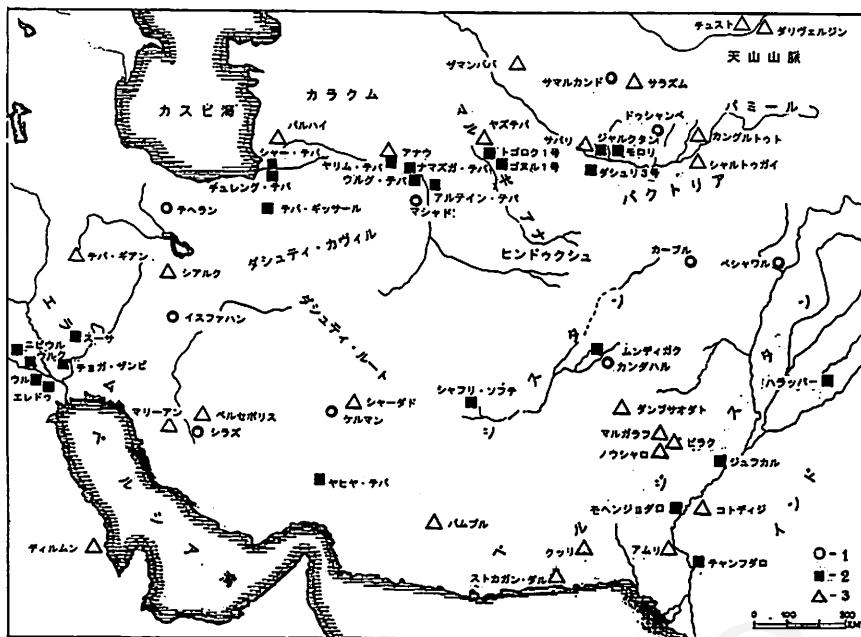


図1. 中央・西アジアの青銅器時代の早期都市概念図。
1. 現代の都市, 2. 青銅器時代の早期都市, 3. その他の遺跡

が、21号から最も多くの遺物が発見され、西アジアにおけるマルギアナの文化の意義を示す指標となっている。

トゴロク21号神殿遺跡（図3,4,5）

トゴロク21号は周囲の地表よりも約1mほど高い2つの丘からなっている。この2つの丘の距離は約200m、その間の土地はタキル（粘土質）で土器片が散乱している。北側の丘の表面もほとんど土器片でおおわれている。その付近で全く乾燥し切った古代埋葬の人間の遺骸が、葬礼用の容器とともに3体発見された。試掘の結果、文化層の厚さは0.8mであった。北丘の南東方には、マルギアナ全域で最大とみられる土器の窯跡があった。あたりには、このほかにもいくつかの窯跡があった。

南丘は130×150m、高さは0.7-0.8mで、1983-86年間に完全に発掘されたが、発掘の当初からこれがモニュメンタルな建築物であることがわかった。この遺跡は青銅器時代の末期に住民によって放棄された後、再び人が住んだことはなかった。

トゴロク21号は、マルギアナの他の多くの集落址と同様に、44(42)×24(22)×12(10)cmの日干レンガ積みで、つなぎには粘土が用いられた。レンガは縦横の両方向で利用され、最初にまっすぐな長壁、つぎに部屋を形づくる横壁がつまれた。最初から統一的な設計プランに基づいており、四角形を二重に重ね、四隅に円形の塔、外壁に半円形の塔が築かれた。この二重壁の中に、サリアニディらが便宜的に「要塞」と名づけた神殿があった。発掘の結果、この建築物は3つの建築期を経たことが判明した。神殿としてのモニュメンタルな建築が成立したのは第1期で、第2期では衰退し、東側の「要塞」と外壁の間に一般住民の住む居住区域ができあがった。第3期では、これも放棄され、やがて墓地になった。最も長く存続したのは「要塞」部分で、その南東部分が一部ゴミ捨場に変わっただけであった。

トゴロク21号の「要塞」部分からの出土品
最も興味深いのは独特の土器であった。床面からフーム（大がめ）、底になるほど細い円錐形の大型土器（チャン）がいくつも見つかった。チャンを垂直に立てるには、土中に埋めるなどして固定する必要があった。これらの土器は、一部は土中に埋まった状態、一部は横に倒れた状態で発見された。中型容器には底部が平らにきられ、しかも穴のある円錐形のものがあった。すべてろくろでつくられ、質がよく、明るい色のアンゴープがかかっていた。このタイプの土器は主として「要塞」の部屋から発見されたが、マルギアナの他の遺跡からは1-2個破片で見つかっているだけで、南部トルクメニスタン

トゴロク21号の「要塞」部分からの出土品

最も興味深いのは独特の土器であった。床面からフーム（大がめ）、底になるほど細い円錐形の大型土器（チャン）がいくつも見つかった。チャンを垂直に立てるには、土中に埋めるなどして固定する必要があった。これらの土器は、一部は土中に埋まった状態、一部は横に倒れた状態で発見された。中型容器には底部が平らにきられ、しかも穴のある円錐形のものがあった。すべてろくろでつくられ、質がよく、明るい色のアンゴープがかかっていた。このタイプの土器は主として「要塞」の部屋から発見されたが、マルギアナの他の遺跡からは1-2個破片で見つかっているだけで、南部トルクメニスタン

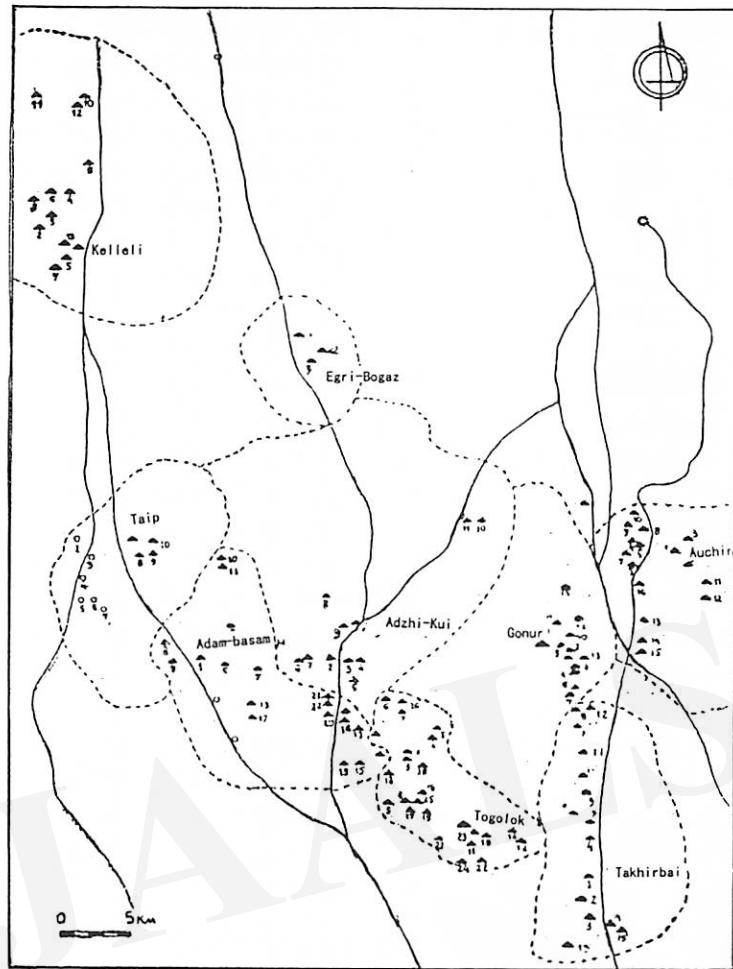


図2. マルギアナ（マルグシュ）の住居址群の分布。

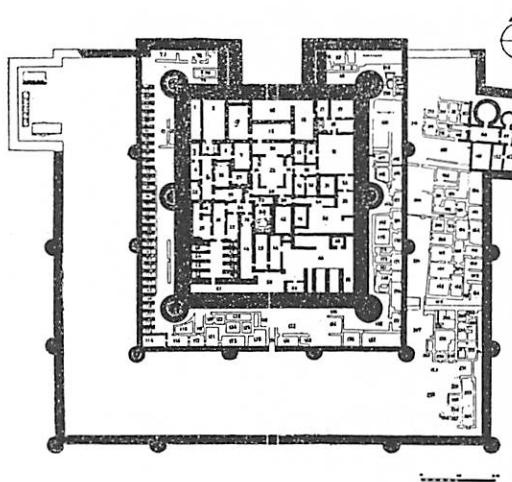


図3. トゴロク21号「要塞」（神殿）、右上の大祭壇と小祭壇。



図4. 空から見たトゴロク21号、右下が大小の円形祭壇。

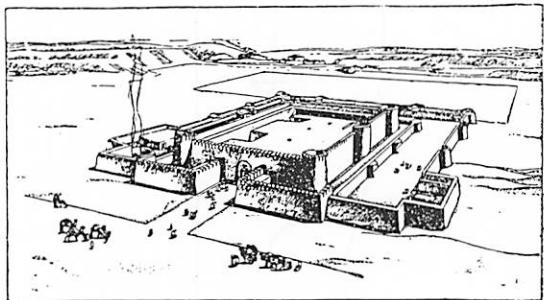


図5. トゴロク21号(神殿)復元図。

ではナマズガ・テペで1個だけ発見されている。「要塞」でこの手の土器が多数発見されたことは新しい部族の出現を意味していると考えられる。この手の容器の底にある穴は羊毛のかたまりでふさがっていたが、このことは容器が濾し器であったことを示している(図6)。

多数の注口つきの中型円錐形容器が発見された。これは液体をそぞろに用いられたと考えられる。中には、動物の彫刻を口縁部に貼りつけたものもみられた。こぶ牛や角のあるヤギの像もあった。18号室発見の大型破片では、土器の内壁に粘土のヘビが貼りつけられ、その頭部は口縁部の動物の腹部にあたっていた。28号室の土器では、口縁部に人物像が貼りつけられ、内壁に粘土のヘ



図6. トゴロク21号出土の土器。

ビがとりつけられていた。これらの動物像が、すぐにとれてしまうような不安定な状態で固定されていることからみて、この容器が日常的に用いられるものではなく、儀礼用であることが知られる(図13)。第2建築期に属する部屋からの貼付動物像は1-2例にすぎなかった。

石製品の中では、凍石製の円筒形ビーズが注目される。稀にはバラ色の石花石膏のビーズもみられる。第64号「僧房」では、黒い凍石からけずり出したキノコ状の飾りが見つかったが、サリアニディによると、これはゴスル1号でも見つかっており、ハラッパー文化にも類似品があるとう。11号室からは、ピンの頭部を飾った黒い円形の凍石がみつかった。これにはヘビと思われる彫刻があった。68号室からは黒い凍石を8角形にけずり出したロゼットが発見された(図7)。表側には円内におさめられた十字形が描かれ、裏側には同じような円形の刻み目がつくられ、一部に銅線がはめこまれていた。その中央に4個の穴があけられ、ロゼットの光線に端末にある貫通孔によって固定された。これは一種の勲章と考えられている。65号「僧房」で発見された三角形の凍石製ブリズマはとりわけ興味深い。中央には山の頂上に槍を立てたような文様があり、その両側に口を開けたヘビが描かれている(図8)。サリアニディによると、中央の文様はメソポタミアの小彫刻に多い「樹木と山」の図がらであり、両側のヘビはバクトリア的な文様であるといふ。これは護符・印章であり、儀礼用である可能性が高いという。大理石製のウシの頭部も石彫技術の高い水準を示している(図9)。角と耳は別の材料でつくられ、本体にとりつけたと考えられている。サリアニディは、V.マッソンがアルティン・テペで発見した黄金の牛頭との類似を指摘している。

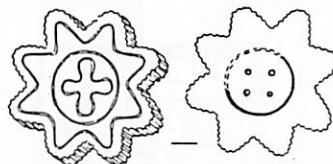


図7. 8角形の石製ロゼット。



図8. 石製の「樹木と山」。

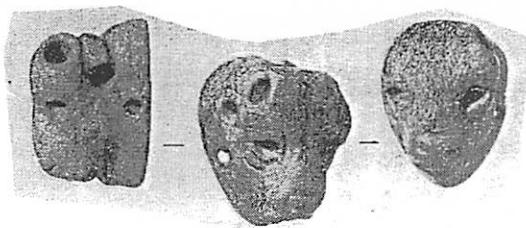


図9. 大理石のウシ頭部。

トゴロク21号の儀礼的性格

トゴロク21号が儀礼的役割を果たしたことは、いくつかの部屋、とりわけ34号室で採集された有機的物質の分析結果によって知られる。フーム（大がめ）の底から採集された資料を生物学者N.R. NEIER-MELIKYAN博士を通してモスクワ大学で分析した結果、アルコール分 Ephedrin $C_6H_5CH(OH)CH(NHCH_3)CH_3$ を含む針葉樹エフェドラ (*Ephedra equisetina* または *Ephedra distachya*) が検出された。

インドイラン系の人びとは昔、『アヴェスター』でハオマ、『リグヴェーダ』でソーマとよばれる酩酊用飲料をつくったが、その原料をめぐっては多くの説がある。大麻、ペニテングダケ、マンドラゴラ、エフェドラ、朝鮮人参（ジエンセン）、ケシなどである。インドイラン人の分布地域によって異なる原料が用いられた可能性もある。しかしマルギアナにおいて、はじめて儀礼用飲料の原料としてのエフェドラの使用が科学的に証明されたことは重要である。

エフェドラの茂みは、今日でもカラクム砂漠に少なくないが、いわゆる球果エフェドラは事実上エフェドリンを含まず、ハオマ・タイプの飲料の原料にならない。これとはちがって、コペトダーグ山脈の山麓地帯に生える

別の種類、エフェドラ・インターメディアには、高いパーセントのエフェドリンが含まれている。トゴロク21号のエフェドラの種類までは明らかにできなかったが、おそらくは後者であろうとされている。古代マルギアナの住民はこれを採取するために、故郷から250-300kmはなれたコペトダーグ山脈まで出かけたことは充分考えられる。現代インドのゾロアスター教団の人びとがエフェドラ採集のために東イランのケルマン市方面まで出かけるというから、この仮定も無理ではないだろう。『アヴェスター』の中で、ハオマの原料植物が山中に生えると書かれていることもこの推定に合致する。サリアニディは、マルギアナの護符に描かれた植物文様にもケシとエフェドラが少くないことを指摘している（図10, 11）。

トゴロク21号におけるエフェドラとケシの検出は、この遺跡を酩酊飲料ハオマとむすびつけるための根拠をあたえただけでなく、他の出土品も新たな観点から見なおすことを可能にした。『アヴェスター』と『リグヴェーダ』によれば、ソーマ・ハオマをつくるには、原料（エフェドラ）をたらい状の容器に入れて長く水にひたし、手びきの石臼ですりつぶし、またまるい石臼に入れて特別の搗き棒でつぶした。その塊を水に溶かし、ミルクまたは酸乳を入れて混ぜ、大麦を加え、容器にうつして発酵させた。これを特別の濾し器で濾し、儀礼に用いた。『アヴェスター』にはハオマ製造の4段階について書かれている。「最初の搗き棒の祭司」という言葉がある。

トゴロク21号遺跡からの発見物にはハオマ製造に必要な道具がそろっている。円錐形の大きなたらいが部屋の隅に埋めこまれ、床にはふつうの遺跡の場合よりも多くの手びき石臼と搗き棒が発見された。濾し器も多かった。また、口縁部に鳥や人物、動物などの彫刻で飾られた儀礼用の容器がとりわけ注目される。これらの彫刻のうち、中心的位置を占めるのは、ならんで立つ二人の人物であ

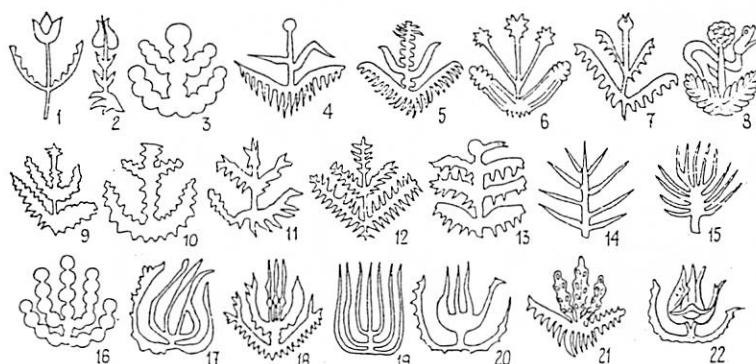


図10. パクトリアとマルギアナの護符に描かれた植物文様。

る。ある場合には、ひとりが胸に赤ん坊を抱き、もうひとりは、となりの人物の肩を抱いている。トゴロク21号の第2建築期に属する1室から、内部にふたりの人物塑像を入れたミルク壺が発見された。この人物の塑像は細

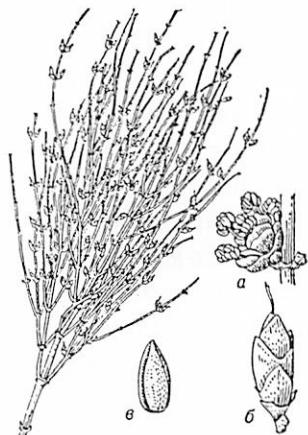


図11. エフェドラの大枝と実（ソビエト大百科事典より）。



図12. 土器に貼られた人物塑像。

1-3. バクトリア、4-8. マルギアナ

部まで上記の儀礼用土器口縁部の人物と同じであるが、性別が明白に示されている点がちがっていた。予想に反して、子供を胸に抱いているのは男性で、手をまわしているのは女性であった（図12の6）。2つの像とも表面に多くの小骨片がつきささっていた。これは現地部族の神話と関係があるにちがいないが、容器に入った飲みものとともにつながりがあると考えられる。

サリアニディは『リグヴェーダ』に出てくるソーマの話に、この塑像を結びつけている。そこでは、ソーマは雷神（パルジャニア）の子として登場している。雷神の妻は大地であるので、ソーマは天と地の子ということになる。古代人の観念では一般に、天は男性、地は女性とされている。さきにのべた「子どもを抱いた男性」は雷神であった。彼らの共通の子である子どもを母親（大地）から奪って天に運び、そこで子どもはソーマ・ハオマ神の資格を得るというすじである。サリアニディの想像はさらにすんで、ひとりの人物が別の人物に足払いをかけている彫刻についても、雷神が子どもを奪う話によつて説明を試みている（図12の3）。

研究者によれば、ハマオは自らの中に神と祭司および犠牲物の3機能をそなえているとされている。ハマオはゾロアスター教徒の儀礼の本質的部分であり、飲む人に不死を贈るとされている。この種の容器がマルギアナだけでなく、隣接するバクトリア、ペルジスタンにも広まっていることは重要である（図13）。サリアニディはこれらの地域で共通した儀礼が行なわれたと考えている。そしてトゴロク21号がゾロアスター教最古の神殿である可能性があると言う。『アヴェスター』の中に神殿のことはふれられていないが、だからと言って神殿がなかったことにはならない。アフガニスタン北部のダシュリ3号遺跡（図14）はK. JETTMARによってゾロアスター教系

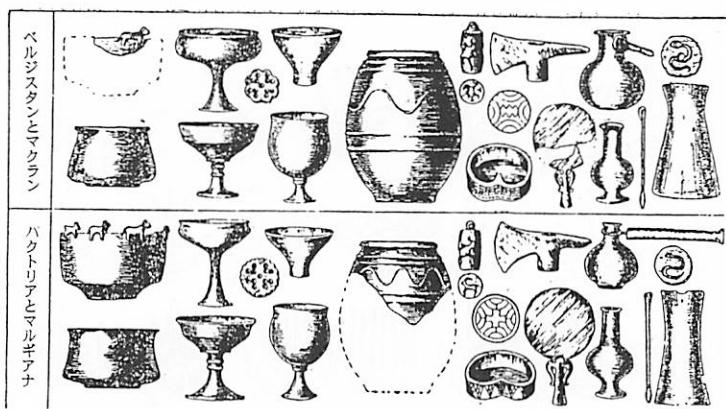


図13. バクトリア、マルギアナ、ペルジスタン、マクラン出土品の比較。

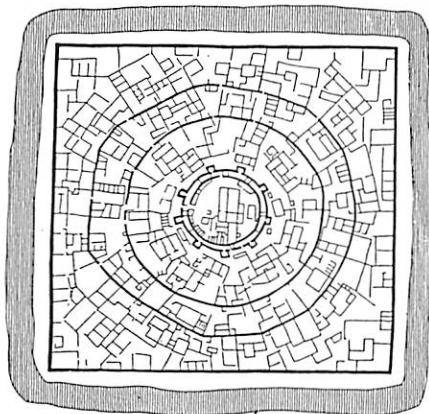


図14. 南部バクトリア（アフガニスタン北部）のダシュリ3号拝火神殿遺跡。

中央に円形神殿、その周囲を二重の円形外壁、外側を方形外壁（130×150m）が囲んでいる。

の円形神殿と考えられ、また北部バクトリア（アムダリヤ北岸のバクトリア）のシェラバード（ウズベキスタン南部）付近にあるジャールクタンでも明らかに火を礼拝した神殿が発見されている（図15、16）。サリアニディは、同じ時代の文化的に近い人びとの間で、異なった神殿建築のプランや信仰上の儀礼があったと考え、トゴロク21号も神殿建築のバリエーションの一つと見ている。トゴロク21号はマルギアナ・オアシスが機能した最終期における中心的神殿であり、年間の最重要的祭事はここで行なわれたと、彼は考えている。日常的な祭事のためには、トゴロク21号をまねた小神殿が各地にあった。

トゴロク21号神殿は、二重の四角形の間の広場に一般の共同体員が住みつくようになってからしだいに衰退した。サリアニディは、これらの共同体員がなお機能していた「要塞」（神殿）と結びついていた可能性を考えている。そして神殿が捨て去られたのは、突然の出来事であったと推定している。その理由は神殿内部の多くの土器その他がほとんど完形のまま残っているからである。祭壇や拝火壇も封印されたように残された（図17）。

トゴロク21号に類似した神殿建築は、隣接するバクトリアに見られるが（たとえばジャールクタン）、西アジアには見られない。この神殿はマルギアナにおける高い建築水準を示しており、古代西アジアの建築におけるマルギアナ流派の存在を推定させる。その証拠の一つとして独自の単位寸法（7.5m）があげられる。大祭壇と「要塞」の塔の直径、23号室、34号室、36号室、114号室の長さがすべて7.5mである。また7.5mの2倍（15×15m）、

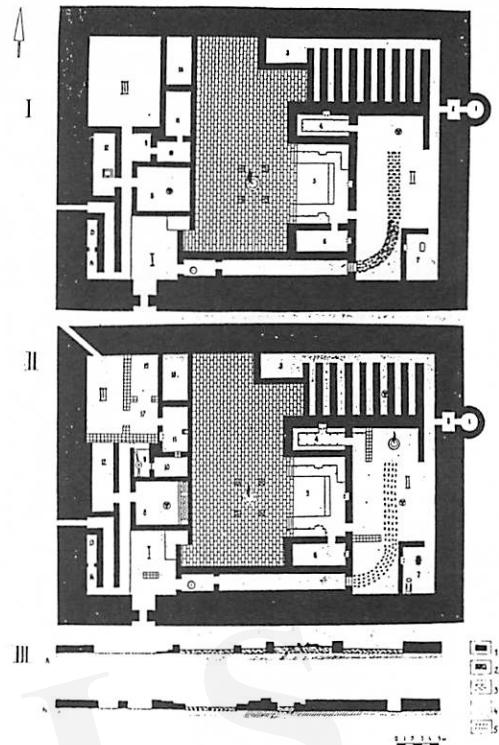


図15. 北部バクトリアのジャールクタン遺跡。
I, IIは各建築期の平面図、IIIは断面図。
(ASKAROV i SHIRINOV, 1993より)

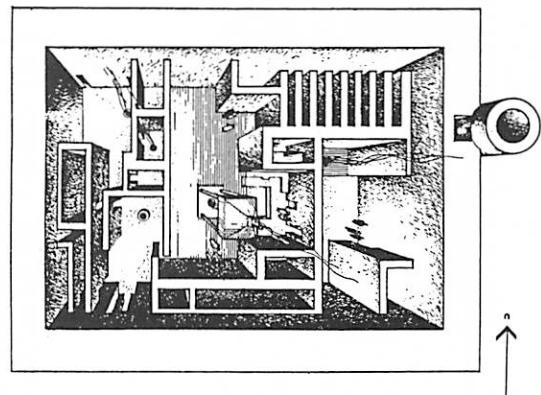


図16. ジャールターンの拝火神殿。

あるいは3倍の長さが多くの部屋に見られる。7.5mの約半分（3.5m）は小祭壇と外周のすべての塔と半円塔の直径である。このことは古代マルギアナの住民が幾何学の知識をそなえていたことを示している。

発掘成果から見て、神殿の中心部でハオマ・タイプの

酩酊飲料がつくられたこと、ハオマ信仰が主であって、拝火は二次的役割をはたしたことが知られる。ただしトゴロク21号神殿を後代のゾロアスター教に結びつけるこ



図17. トゴロク21号出土の石製印章と護符(5), 骨管(4).
左上の印章はうずくまるラクダ. 右上の印章は飛鳥と怪獣と走る人物.

とは、「アヴェスター」の最古の部分である「ガーター」にハオマが登場しないという事実と矛盾する。しかし「アヴェスター」の後代部分では、反対にハオマが賛美されている。これは、ゾロアスターが禁じたのは日常的酩酊であって、儀礼的飲みものではなかったことで説明されよう。酩酊飲料の伝統は、マルギアナにあった前ゾロアスター時代の信仰にさかのぼるのである（図18）。

サリアニディは結論として次のように述べている。トゴロク21号には最初にハオマ信仰、ついで拝火に結びつくプロト・ゾロアスター教の神殿があった。この2つの信仰が、後に変革された形のゾロアスター教の中にとりこまれた。東部イラン（バクトリアとマルギアナ、ペルジスタン）がゾロアスターとゾロアスター教の原郷であり、ゾロアスターはこの地にあったプロト・ゾロアスター教を基にして新宗教をつくりあげたのである。

参考文献

- ASKAROV, A.A., i SHIRINOV, T.Sh. (1993): *Rannaya gorodskaya kul'tura epokhi bronzy yuga Srednei Azii*, Samarkand.
 SARIANIDI, V.I. (1986): *Die Kunst des Alten Afghanistan*. Veb E.A. Seemann Verlag, Leipzig.
 SARIANIDI, V.I. (1990): *Drevnosti Strany Margush*. Ashkhabad, Ylym.
 SARIANIDI, V.I. (1993): *V Poiskakh Strany Margush*. Moskva.

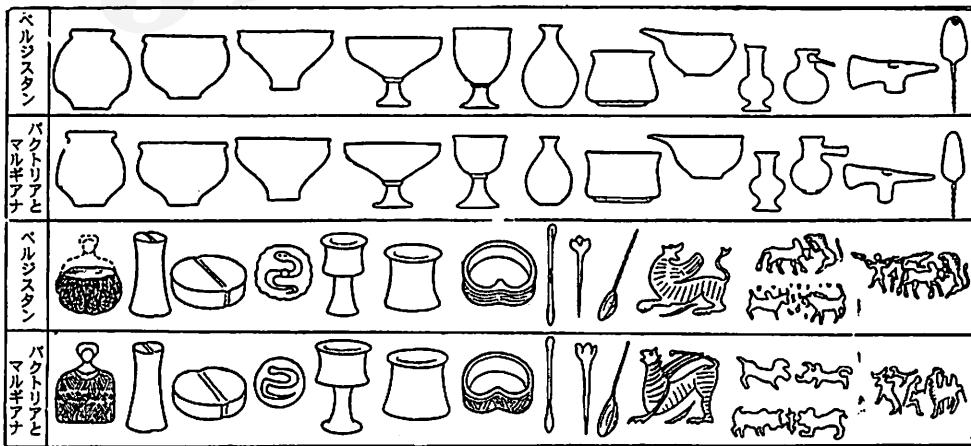


図18. バクトリア、マルギアナ、ペルジスタン出土品の比較。

A Bronze Age Site in Margiana: The Sanctuary Togolok 21

Kyuzo KATO*

Since the beginning of the 20th century we have known that there was a settled culture had existed in Margiana, which is located in the old delta of the Murghab river in the southeastern region of the Kara Kum desert in Turkmenistan. Full-scale excavation, however, began in 1972 by the Margiana Archaeological Expedition Team from the Scientific Academy of the USSR. A joint team of archaeologists from Turkmenistan and Italy, led by V Sarianidi, is continuing the work.

In the spring of 1977, over thirty cities were excavated in the Togolok oasis of Margiana. It was estimated that these sites were active from the second half of the second through the beginning of the first millennium B.C. In this paper, I introduce the results of an investigation of the sanctuary site named Togolok 21. Professor Sarianidi believes that the population of Margiana was quite large in the second millennium B.C. and that they believed in Proto-Zoroastrianism. Togolok 21 is the sanctuary of this Proto-Zoroastrianism. Several discoveries correspond to the depictions of the Old Iranian Avesta, Indicating that a Bronze Age civilization existed here where now there is only desert. It goes without saying that the work of the Sarianidi team, which has heretofore been little known in Japan, will make a great contribution to the ancient history of Central and Southern Asia.

Key Words: Margiana, Togolok site, Proto-Zoroastrianism, Bronze age

中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査12年間の総括と今後

小 島 康 誉*

早いものである。1988年に開始させて頂いた中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査は12年が過ぎ去った。この間文部省・中国国家文物局・新疆ウイグル自治区人民政府・新疆文化庁をはじめとする多くの方々のご支援・ご協力を頂き、新疆文物局・新疆文物考古研究所と共に大きな成果をあげることが出来た。関係者各位に衷心よりの感謝を表するものである。日本沙漠学会沙漠研究編集委員会よりの調査全体像をとのご依頼と調査前半終了の節目にあたり事実のままに総括と今後の計画をまとめた。

1. ニヤ遺跡

ニヤ（尼雅）遺跡は中国新疆ウイグル自治区タクラマカン沙漠南縁の小都市民豊（旧名：ニヤ＝尼雅）から約100km北上した一帯に残る漢・晋時代の古代都市遺跡であり、「漢書」西域伝などに記載の「精絕国」と比定されている。その規模は東西約7km・南北約25km（周辺を含む）という広大な範囲にわたり、北緯 $37^{\circ} 58' 34.5''$ ・東経 $82^{\circ} 43' 14.5''$ に位置する仏塔を中心に、住居・寺院・生産工房・墓地・家畜小屋・果樹園・畑・貯水池・並木など約200カ所の遺構（図1），さらには河床・大量



図1. ニヤ遺跡内の住居址遺構。
沙漠という特殊環境がおよそ2000年前の木造建造物を
今まで保存した。

の故樹林などが残っている。「西域36カ国」の中では中規模の都市国家であったが、他の都市がその上に新しい都市が建設されたりして殆ど消滅し、残存する西域36カ国の中では今や最大の都市国家遺構であり、古代西域研究に欠くことのできない重要な位置をしめている。

ニヤ遺跡はこのように世界的文化遺産とも言える規模と価値を有し、「シルクロードのポンペイ」「幻の古代都市」と称されている。

2. 過去の調査

ニヤ遺跡を再発見したのはオーレル・スタインである。彼は1901・06・13・31年と4回にわたって調査を行い、大量の文物を持ち出し、当時としては卓越した研究を行い、遺跡概要を報告書で発表し、ニヤ遺跡は一躍世界からの注目を集めようになった（STEIN, 1907, 1921, 1928; 張・于, 1992: 111-114; 同日訳6-7）。

第二次大谷探検隊の橋瑞超も1909年に進入を試みたが、イスラームの聖人サデックを祀るイマーム・サデック・マザール迄は至っているが、ニヤ遺跡そのものには到達していないようである（中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊, 1999: 日文編6-7）。1959年には新疆博物館の李遇春らが調査を行い、遺跡西北部にて墓地の発掘調査を行った（新疆維吾爾自治区博物館, 1988: 6-9; 新疆維吾爾自治区博物館考古隊, 1988: 10-13; 李, 1988: 16-43）。この間もその後も参観程度の調査（例えば1980年中国中央テレビとNHKの共同番組「シルクロード」取材時に新疆文物考古研究所による調査）、和田文物管理所などの見回りなどが散発的に行われたが、いずれも初步的なもので、大沙漠の奥深くに位置するなどの理由から体系的に調査されることなく、本格的調査が待たれていた。

3. 調査の経過

中国人の冗談から、キジル千仏洞の修復に協力していた私は、1987年5月、新疆文化庁との間で、西域最大の

文化遺産キジル千仏洞の修復保存資金として淨財1億円を贈呈する旨の協議書を交わした。同じ日本人である大谷探検隊がその荒廃に大きく関わったからである。同年11月、日中友好キジル千仏洞修復保存協力会（名誉顧問：中山太郎元外務大臣・会長：上村晃史氏）を発足させ、敦煌とちがい殆どの方がご存じないキジルへの募金という困難を乗り越え、1988・89年の2年次にわたって、3000人（社）を越える人々の淨財1億543万円を贈呈した。

中国側から依頼されたわけでないこの活動により、私は信頼を獲得したようである。

この事業の過程で、当時の新疆文化庁文物処處長韓翔氏より、新疆の三大遺跡は樓蘭・キジル・ニヤであり、前二者の調査は完了しているが、ニヤは規模も大きく学術価値も高いが本格的調査は行われていないと聞き、即座に中日共同調査を提案し、韓翔氏も同意した。

しかし、当時はニヤ遺跡は言うに及ばず民豊さえ対外開放都市でない、過去の外国人による新疆一帯からの文化財持ち出しに対する反発（中国側は言う言わないは別として、現在も掠奪されたとの立場である）などから、許可は中々下りなかった。新疆文化庁の格段の努力とキジル千仏洞への貢献が評価され、新疆政府および人民解放軍より「參觀」の名目で許可があり、日中双方は1988年7月、覚書に調印し、同年10～11月、第一次予備調査を敢行した。

沙漠車やGPS等の近代装備を整えたここ数回の調査からすれば隔世の感がある「探検」であった。日中双方隊員14名は中古トラックと四輪駆動車計3台で、民豊を出発した。イマーム・サデック・マザールの在るカパクアスカン村までの約90km（直線では約70km）に12時間要した。旧ニヤ河の川床を北上したが、砂と云うより

沙、沙と云うよりパウダーと呼ぶべき状態の道なき道であったからである。翌日、駱駝20峰に食糧・装備を積み込み、不安定なその上に隊員が乗り、約30km（直線）で北のニヤ遺跡を目指した（図2）。羊や牛の糞の浮いている水たまりの水を鉗びついたタンクに汲んでいるので、駱駝用の水かと聞いたたら、人間用だと答えた。このひとことからも苦難のほどがお分かり頂けよう。

スタイン隊が作成したラフなルート図と磁石に双眼鏡だけを頼りに沙漠へ進入した。沙漠と言っても遺跡南部までの間はタマリックス推（紅柳包）が連続し、行く手を遮る（図3）。遺跡位置は北方に在ると云った程度しか把握できておらず、尋ねる人も目標物も無い沙漠を右だ左だとジクザク前進を繰り返した。安全の為、政府から派遣された無線士の定期連絡は「現在地不明なれど、全員無事」であった。3日かかってニヤ遺跡仏塔に到達した。この時の感激は今も忘れられない（図4）。

わずか2日の滞在であったが、遺跡中心部を観察して回り、遺跡の概要を把握すると共に、地表散布文物の収



図3. 遺跡南部はタマリックス推が連続し、見通しは利かない。

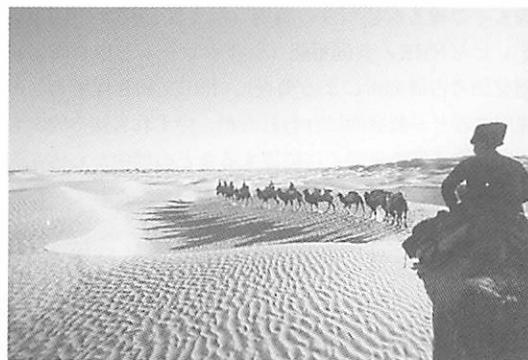


図2. 沙漠の舟・駱駝を友として、遺跡を目指す。
ニヤ遺跡一帯の海拔はおよそ1,200mである。



図4. 遺跡中心部に残る仏塔。
この辺りより、タマリックス推が少なくなる。

集を開始し、日中双方とも調査の必要性を確認し、以降の調査の覚書にサインした。

90・91年と予備調査を継続し、例をみない大沙漠での調査方法を検討した。90年度調査から住居址模式図の作成を開始すると共にトラックによるルート開発を行った。91年度調査からはGPSを用いた遺跡位置の登録による分布調査を開始し、沙漠車を導入した。これらの実績が評価され、1992年4月、国家文物局（文化庁に相当）より正式許可を取得し、日中双方は克尤木・巴吾東新疆ウイグル自治区政府副主席列席の下、ニヤ遺跡の総合調査を目的とした協議書（92・93年分）に調印した。92年度調査では分布調査・住居址模式図作成を継続し、建築学調査も開始し、現地調査以外にニヤ遺跡出土文物の研究を開始した。有り難いことに日本政府の支持を頂き文部省科学研究費（海外研究）の助成が開始された。93年度調査からは調査の本格化に伴い、サポート隊を含めて約60人と規模も拡大し、現地調査期間も3週間と長期化させ、分布調査・住居址模式図作成を継続、大型住居址N2の測量・地質学調査も開始し、遺跡北方の探査も行った。中国側の許可を得て資料を日本へ持ち帰り分析調査も開始した。この年より沙漠車の本格導入で遺跡へ比較的スムースに到達できるようになったが、遺跡保護のため現地到着後は駱駝を併用している。新疆ウイグル自治区政府にはニヤ調査を当初より全面的に支援して頂いていたが、この年より鉄木爾・達瓦買提中国全国人民代表會議（国会に相当）副委員長（当時は新疆ウイグル自治区政府主席）が調査隊の名誉主席に、吾甫爾・阿不都拉新疆ウイグル自治区副主席が名誉副主席に就任して頂いた。また全国人民代表大会環境資源保護委員会が地球環境保護の立場より新華社・中央テレビなどからなる取材班を派遣し、以降ニヤ調査は国内外にて大きく報道されるようになった¹⁾。日本の東海テレビも91・92年に続き同行取材した。

このような実績の積み重ねにより、1994年1月、関係部門の批准を経て、国家文物局より発掘許可を取得した。国家文物局令による外国隊への発掘許可第1号である。中日双方にとって待望の許可であり、李東輝新疆ウイグル自治区副主席列席の下、94～96年3カ年分の協議書に調印した。

調査の本格化・長期化に対応すべく、日本側は同年4月、海部俊樹元首相と張徳勤国家文物局長（当時）を名誉会長、塩川正十郎元文部大臣らを顧問、水谷幸正元佛教大学学長と小島（新疆ウイグル自治区政府文化顧問）を代表として佛教大学に「中国新疆ニヤ遺跡学術研究機構」を設立した。94年度調査では分布調査・住居址模式

図作成とともにN2や93A27の発掘を開始し、木質調査や関連都市住居調査も開始した。

95年5月にはニヤ遺跡写真集『夢幻尼雅』（李希光新华社記者ら）が出版された²⁾。同月、一連の中国への貢献に対し王丙乾全国人民代表大会副委員長から小島にはからずも全国人民代表大会環境資源保護委員会栄誉賞が授与された。9月、小島は田紀雲全国人民代表大会副委員長と会見し、ニヤ調査の報告を行った。

地道な調査では何か大きな成果がないと継続は難しく、もうそろそろ出なくてはと期待していた大発見が95年度調査で有った。遺跡北西部へ向かっていた中国側隊員が露出している木棺の一部を発見した。今まで幾つもの墓地は登録していたが、それらとは明かに異なっていた。王炳華新疆文物考古研究所所長（当時）の指揮のもと中国側が主となって測量と発掘を行った。いよいよ開棺の日が来た。わずかに聞いた隙間から覗きこんだ于志勇新疆文物考古研究所副所長が思わず叫び声をあげ、すぐに、「王侯合婚千秋万歳…まだある」と文字を読み上げた。居合わせた中日双方全員が万歳と拳を突き上げた（図5）。その夜のベースキャンプは異常な興奮に包まれた。岳峰新疆文物局長に統いて乾杯を促された私は「1988年、中日共同ニヤ調査を開始して以来、今日が最良の日だ、中日全員の共同努力のお蔭だ、乾杯しよう」と普段は飲まない白酒を一気飲みした。

95年度調査ではこれ以外に、分布調査・住居址模式図作成・N2精査発掘・N5測量発掘・カパクアスカン村住居測量なども行った。現地調査に引き続き、日中双方は新疆文物考古研究所で保護のため取り上げた6棺の調査を国家文物局より派遣された専門家とともに順次開始し、男女合葬ミイラをはじめ、「王侯合婚千秋万歳宜子孫」「五星出東方利中国」の文字入り錦など遺物多数を



図5. 遺跡北部の王族墓地。
タマリックス推は殆ど無く、小沙丘が連続する。

検出した。宿白北京大学教授・徐苹芳中国社会科学院考古研究所前所長らも視察に訪れ、後にこれらの多くは一級文物（国宝）に指定された。現地調査とは別に本調査収集のカローシュティー文書などの遺物の調査および撮影を行った。

同年12月、北京にて95年の王侯貴族墓地の発見・発掘に関する記者発表が国家文物局と新疆文化庁の主催で行なわれ、張徳勤局長・吾甫爾副主席・宿白教授・徐苹芳研究員・嚴文明北京大学教授や中日双方の関係者が参加し、内外で大きく報道された。

96年初め、国家文物局によりニヤ調査は「1995年中国十大考古新発見」に選ばれた。

同年5月、日中双方は88～93年度調査の成果を『中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書（第一巻）』として刊行した（中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊、1996）。8月には海部俊樹名誉会長・水谷幸正代表や小島らがウルムチ・北京にて王榮泉中国共産党新疆委員会書記・阿不来提阿不都熱西提新疆ウイグル自治区主席・張柏国家文物局副局长らに、共同調査への一層の協力と97年開催予定のシンポジウム・文物展示会への協力を要請し、同意を得た。9月、小島は李鉄映国務委員・吳邦国副総理にニヤ調査を紹介した。

96年度調査では分布調査と住居址模式図作成を継続すると共に、本年よりGPS専門技師の参加と大型GPSの導入により、地形図作成を開始した。住居址N13・14及び周辺生産工房址群の測量も開始、仏教寺院N5・6を発掘し、壁画を検出した。遺跡南端地区にサークル状土塁を発見し、地表散布遺物も採集した。現地調査とは別に95年検出の木棺の木質調査・毛絹織物の調査を行った。また樓蘭を参観した。

11月、海部俊樹名誉会長と小島が張文彬国家文物局局長・張柏副局长らと会談し共同研究保護事業の一層の強化とシンポジウム・文物展開催で合意した。同月、国務院（政府に相当）によりニヤ遺跡全体は「全国重点文物保护单位」に指定された。

1997年3月、新疆ウイグル自治区人民政府の決定による文物行政管理全般を掌握する新疆ウイグル自治区文物事業管理局（略称：新疆文物局）の成立に伴い、これ以降は新疆文物局が中国側窓口となった。同年3月には日中双方は克尤木・巴吾東中国共産党新疆委員会副書記ら列席の下、97年以降の協議書に調印した。

9月より12月まで、国家文物局主催により中国歴史博物館に於いて、「全国近年考古発見精品展」が開催され、本調査隊収集のニヤ出土文物も展示された³⁾。同じ9月、新疆文物局・佛教大学・佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構

の共催により、佛教大学に於いて「日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム・出土文物展」を開催し⁴⁾、海部俊樹名誉会長・買々堤祖農新疆文化庁庁長・宋新潮國家文物局処長・徐苹芳研究員・林梅村北京大学教授・樋口隆康樋原考古学研究所所長・赤松明彦九州大学教授ほか佛教大学関係者・日中双方隊員らが挨拶や発表を行い、約500人が参加した。また中国側代表団らは伊藤宗一郎衆議院議長らと会見した。

97年度調査は分布調査および地形図作成を継続し、遺跡北端部に墓地を発見し、95年発見墓地と合わせて、清理発掘した。N13・14周辺生産工房址群とN5・6周辺の測量を継続し、南部土塁も調査すると共に、地質調査も行い、地表散布遺物を採集した。ニヤ遺跡北方約40km地帯に更に古い遺構・遺物を発見した（図6）。調査の一区切りに伴い、日本側は測量機器など全装備を中国側に贈呈した。

98年4月から10月まで、新疆文物局・新疆博物館・新疆文物考古研究所・上海博物館の共催により、上海博物館で「シルクロード考古珍品展」が開催され、本調査隊収集のニヤ遺跡出土文物も数多く展示され、大きな反響を呼んだ⁵⁾。

98・99年度は現地調査は行わずカローシュティー文書・仏像壁画など収集済み文物の研究に注力するとともに、97年度調査までの成果をまとめた第二次報告書を99年度中に刊行すべく準備し、1999年10月31日の奥付で2000年1月に刊行した⁶⁾。

4. 調査の組織

以上の調査の責任者（隊長）は中国側は韓翔氏（88～94年）・岳峰氏（95年～）、日本側は小島（88年～）が



図6. 遺跡北方約40kmの遺構。
ニヤ遺跡との間には幾つもの大沙丘がある。

つとめ、学術隊長は前新疆文物考古研究所所長王炳華氏（91～96年）・于志勇氏（97年～）、龍谷大学名誉教授井ノ口泰淳氏（90～94年）・京都造形芸術大学教授田辺昭三氏（95年～）が、学術副隊長を佛教大学教授真田康道氏（90年～）がつとめた。

研究領域が多岐にわたる事もあり、調査には多くの機関の研究者が参加した。中国側は新疆ウイグル自治区人民政府・新疆文化庁・新疆文物局・新疆文物考古研究所・新疆博物館・国家文物局・北京大学・華東師範大学・中国科学院・中国社会科学院・中国文物研究所の研究者であり、日本側は佛教大学・龍谷大学・京都造形芸術大学・国立歴史民俗博物館・奈良国立文化財研究所・科学技術庁・早稲田大学・京都大学・国学院大学・関西大学・関西外国语大学・京都市埋蔵文化財研究所・大阪市文化財協会・長岡京市埋蔵文化財センター・相原考古学研究所・古代オリエント博物館・六甲山麓遺跡調査会などの研究者と撮影および測量技師である。専門分野は文物管理・考古学・仏教学・西域文献学・東西交渉史・建築学・木質科学・地理学・地質学・佛教美術史学・染織学などである。

5. 調査の成果

これら多くの研究者の努力により下記のような調査成果をあげることが出来た。

- ・仏塔、寺院、墓地、住居、生産工房、城壁、家畜小屋、果樹園、貯水池、並木など約200カ所の遺構を発見し、大型GPSで経緯度を登録し、遺跡分布図を作成した。
- ・大型GPSを活用し、周辺地形図を作成（航空測量は制限されている）、遺跡全容を明らかにした。
- ・遺跡北方約40kmに、更に古い時代の遺構と遺物多数を発見し、生活拠点の南下を明らかにした。
- ・関連都市の住居を測量調査し、遺跡住居構造を明らかにした。
- ・幾つかの住居を発掘し、生活状況を明らかにした。
- ・幾つかの住居群や生産工房を測量調査し、都市構造を明らかにした。
- ・寺院を発掘調査し、壁画などを検出し、西域佛教解明の手掛かりを得た。
- ・王族の墓地を発見発掘し、国宝級遺物多数を検出し、精絶国が当時の中原王朝と政治経済文化面で密接な関係にあったことを明らかにした。
- ・各種の墓地を発掘調査し、埋葬方法に新しい知見を得た。
- ・住居の柱材などをC14法により測定し、遺跡年代確定

の大きな資料を得た。

- ・カローシュティー及び漢文木簡を含む大量の貴重文物を検出し、新しい国王名などを明らかにした。
- ・カローシュティー文書を解読するとともに、データベース化し、今後の研究に備えた。
- ・三趾馬と思われる化石を検出し、遺跡一帯の地質形成で新しい知見を得た。

6. 総括と今後

このように書いてくると調査は順調に推移したようと思われるだろうが、実態は多くの困難が伴っている。まず遺跡がタクラマカン沙漠へ約120キロ（走行距離）入るという無人の地に位置し、そこに到達し物資を運び込むだけでも困難である。例えば約60人が3週間野営するのに必要とする水7トン等の大量の食糧や調査器材を運び込まねばならない。遺跡の規模が前述のようにあまりにも広大である。沙丘やタマリックス堆が連続し遺構の発見が困難である。夏には地表気温が70℃を越え、冬はマイナス50℃となり、春には沙嵐が吹き、天候上現地調査期間が限られる。現地調査は天候の安定する10～11月に実施しているが、それでも1日の温度差は40度近くになる。調査分野が多領域にわたるため多くの機関の研究者が参加し、その調整が必要である。更に日中両国の社会体制・調査手法・生活習慣などの違いもある。

本稿をご覧になった方はどうしてこんなに研究者以外との接触が必要なのかと思われるかもしれない。学術誌に書く必要はないと思われるかもしれない。全ての面で政治が深く関係している社会主义国に於いての共同調査、中でもニヤ調査ほどの大規模事業では政府指導者の支持と支援を得ることは大変重要である。大規模な共同研究を計画されている方に参考になればと、ありのままに記す次第である。

このような困難を中日双方は本調査の基本理念である「友好・共同・安全・高質・節約」の5大精神で乗り越え、いまや日中間最大規模かつ最も順調に進行している共同調査の一つとなった。振り返ってみれば、上述の如き困難な条件の下で、よくぞここまで成果をあげたものであると言える。諸外国での共同調査、さらに沙漠での調査を体験された方であれば、この事は充分に理解頂けるものと思う。

調査に当たっては過去の“西域探検”的教訓と反省の上に、まずニヤ遺跡の主権は中国に有るという原点に立つの是当然として、単なる学術事業でなく、地域発展事業として、現地の人々に測量発掘等で補助的作業をして

頂き教育と現金収入の道を考慮するとともに、文物保護費・博物館建設資金・貧困脱出資金・学用品贈呈などの面でも協力している。また環境保護に配慮しつつゴミの全部持ち帰りは当然実施し、現地の枯木は燃料として使用せず、プロパンガス・石炭を1000km離れた都市から搬入して利用している。

99年以降の研究保護について国家文物局・新疆政府・新疆文物局と度々打ち合わせを行い、1988年以来12年間の日中共同ニヤ調査を第二次報告書の刊行で、一区切りつけると共に、今後より高度な研究と保護の強化を行うことで基本合意している。

ニヤ調査を歴史的に総括すれば、第一段階は今世紀初めのスタイン隊などの外国隊による発見と調査そして文物持ち出しであり、第二段階は新疆ウイグル自治区成立後の新疆博物館隊の食糧もままならない中での決死の調査であり、第三段階が改革開放時代の中日共同隊による大規模調査である。この三段階の調査は中国そして新疆の歴史をある意味において反映したものであるとも言えよう。

日中共同ニヤ遺跡学術調査は期間も規模も最大であり、顕著な成果を取得した。しかも、本調査はまだ完了していない。

中日双方で打ち合わせしている今後の計画の第一はニヤ遺跡の保護の強化である。調査隊自体も遺跡・環境保護を前提とした調査を行い、啓蒙活動も行ってきたが、調査の長期化とともにニヤ遺跡が内外で有名になり、近隣の人々や研究者そして旅行者の興味を引き起こしている。またタクラマカン沙漠一帯は石油の大規模埋蔵地帯であり、中外合弁による探査も始まっている。これらの要因により遺跡保護の問題は日増しに重要になってきており、新疆文物局は既に管理所や管理人を設置し、国家文物局とともにタリム石油探査開発指揮部などと文物保護問題を打ち合わせを行い、保護区域を設けるとともに、指揮部は罰則を伴う「タリム石油探査開発指揮部文物保護規定」を制定した。

およそ2000年前の住居の柱が林立して残るなど、これほどの価値と規模の遺跡は世界でも数少ない。さらに遺跡南部には何万本という枯れた胡楊が残り、古環境の復原にかけがえのない自然の一大遺産となっている。中国の偉大な文化遺産であり、人類共通の文化遺産とも言えるニヤ遺跡の保護は我々の共同の責務であり、日中共同隊としても出来るかぎりの努力をしてゆきたいと思う。

第二は収集済み遺物の保護を更に強化する。第三は多領域での高水準の研究を推進する。陶器・木器・鉄銅器・玉石器・絹織物・染織品・木簡・ミイラなど多様な文

物の研究を行う。これらの一環として新疆側は新疆博物館および新疆文物考古研究所の拡充を決定している。第二次報告書刊行とともに収集済み遺物全ての図録やスタイン隊などを含むニヤ出土の全カローシュティー・漢文木簡の図録の出版も検討している。これらの成果は広く世界の研究者に提供し、独自の研究に役立てたい。分布調査の補足・北方追跡の本格調査・謎の土墨調査・97年発見の大型寺院調査など、未完了の現地調査も国家文物局の指導のもとで継続したい。第四は文化財や環境保護の重要性を訴える社会啓蒙活動を行う。その一環として、今後もシンポジウムや文物展覧会などを行う計画であり、日本・中国などでの開催を検討している。

これらの結果として中国政府による世界遺産への登録申請を希望しており、新疆文物局はすでに準備を開始している。

中日共同ニヤ遺跡学術調査には多くの人々の膨大な時間・収集・努力・資金が投入された。しかし、まだ成すべきことが残っている。

私は考古学者でも仏教学者でもないが、ニヤ遺跡研究保護事業の提唱者・推進者そしてスポンサーの一人として、残された後半生の使命として、やり遂げたいと決意している。と言っても広大な遺跡ゆえ完了はとても出来ない、上述段階までをやり遂げ次ぎの世代へとバトンタッチをしたい。ただし資金が統けである。関係各位のさらなるご協力、ご指導をお願いする次第である。

付 記

「沙漠研究」6-2, pp. 187-192に、ニヤ調査中国側隊員である李軍氏の「タリム盆地の古代遺跡」が掲載されており、ニヤ遺跡について記載されている。また「内陸アジア史研究」12, pp. 81-87に、片山章雄氏の書評「中日・日中共同尼雅遺跡学術調査報告書第一巻」が掲載され、関係文献も紹介されているので参照されたい。さらに、「文物」2000-1(総524期)に新疆文物考古研究所「新疆民豊県尼雅遺址95MNI号墓地M8発掘簡報」(pp.4-40)が多くのカラー絵・写真や図版とともに掲載された。

本稿のまとめについては、中央大学梅村 坦氏にご協力いただきました。御礼申し上げます。

なお「第一次・第二次報告書」ご希望の方は佛教大学ニヤ遺跡学術研究機構まで、ご連絡下さい。

注

- 1) 「人民日報」(1993.11.18); 「読売新聞」(1993.11.19); "CHINA DAILY"(1993.11.23); "The Washington Post"

- (1995.10.11) ほか.
- 2) 林永健・李希光・孫躍新 (1995).
 - 2) 中国文物精華編纂委員会 (1997) : 2, 6, 9, 153-155, 239-241, 292-293, 334-335.
 - 4) 佛教大学日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム開催実行委員会「日中共同ニヤ遺跡学術研究国際シンポジウム発表要旨」「日中共同ニヤ遺跡出土文物展」1997.
 - 5) 新疆文物事業管理局ほか (1998) : 7, 24-25, 35, 45-61, 110-125, 167-168, 200-204, 215-217, 227, 257-262, 284-285, 301-304, 308-310, 314.
 - 6) 中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊 (1999).

引用文献

中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊 (1996): 「中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書(第一巻)」中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊, xxii+410+図版60+付図.

中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊 (1999): 「中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書(第二巻)」中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊, 日文編: 図版4, xxii+412; 中文編: 図版4, xxii+356; 図版編: 図版107; 附表(尼雅遺跡分布調査GPS測定値一覧表) 16p.; 附図(尼雅遺跡遺構分布図)1+CD-ROM (*Distribution Map of the Niya Site*) 1.

- 張力・于江 (1992): 斯坦因第四次入新疆述。「新疆文物」1992-4: 111-114.
- 張力・于江 (1997): スタインの4回目の新疆入りについて(孫躍新訳)「内陸アジア史研究」12: 63-68.
- 韓翔・王炳華・張臨華 (1988): 「尼雅考古資料」(内部発行) 1+2+268.
- 李永春 (1988): 尼雅遺址和東漢合葬墓. 韩翔・王炳華・張臨華「尼雅考古資料」(内部発行), 1+2+268.
- 林永健・李希光・孫躍新 (1995): 「梦幻尼雅」民族出版社, 143.
- 新疆維吾爾自治区博物館 (1988): 新疆民豐縣北大沙漠中古遺址
墓葬区東漢合葬墓清理簡報. 韩翔・王炳華・張臨華「尼雅考古資料」(内部発行), 1+2+268.
- 新疆維吾爾自治区博物館考古隊 (1988): 新疆民豐大沙漠中的古代遺址. 韩翔・王炳華・張臨華「尼雅考古資料」(内部発行), 1+2+268.
- 新疆文物事業管理局ほか (1998): 「新疆維吾爾自治区絲路考古珍品」上海訳文出版社, 321.
- 中国文物精華編纂委員会 (1997): 「中国文物精華」文物出版社, 344.
- STEIN, M.A. (1907): *Ancient Khotan, vol. I.* Oxford.
- STEIN, M.A. (1921): *Serindia, vol. I.* Oxford.
- STEIN, M.A. (1928): *Innermost Asia, vol. I.* Oxford.

Retrospects and Prospects on Twelve Years of the Joint Sino-Japanese Research at the Niya Site in Xinjiang

Yasutaka KOJIMA*

The Niya site was first excavated by Aurel Stein in three expeditions between 1901 and 1931 and then again in 1959 by the Xinjiang Museum. Our own excavations began in 1988 and have obtained the following main results: 1) We certified or newly discovered historical sites of Buddhist sutra, temples, cemeteries, tombs, habitations, production studios, walls, cattle stalls, orchards, reservoirs, and tree lines. These discoveries were drawn on a plan map including their longitude and latitudes. Some were excavated and measured in detail. 2) We investigated an older site some 40km north of the Niya region and found that the living area had moved from north to south. 3) We found hits of Buddhism in the wall paintings unearthed from the temple. 4) Many first class relics excavated from the newly discovered cemetery of the Kings of *Jing-jue guo* (精絕國) written in *Han-shu* (漢書) certified the intimate connections between the kingdom and the dynasties of central China. 5) We used C14 dating of wooden materials to estimate the date of the site. 6) We gathered many written materials in both Karoshti and Chinese characters and discovered the name of the King. 7) We gathered some fossil animals the study of which should contribute to our knowledge of the geology of the area.

For the future, in addition to the continuation of scientific research, we must investigate means for safeguarding these sites and relics and instruct the local people on their importance.

Key Words: Joint Sino-Japanese research, Niya site Xinjiang

* The Academic Research Organization for the Niya Ruin, Bukkyo University.
96, Kitaananobomachi, Murasaki, Kita-ku, Kyoto 603-8301, Japan.

(Accepted, August 8, 1999)

イラク西南沙漠の自然とヘレニズム期の文化 —アッタール洞窟、AIN・シャイアのカナート、西南沙漠のオアシス群—

藤井秀夫*

1. はじめに

メソポタミア文化形成の特徴をより明らかにするには、その形成と発展に多大の寄与を果たしたと考えられる周辺地域文化との関連を民族の移動路によって追求する必要がある。その視点にたつと、東地中海沿岸地域から、バビロニアや南イラクのシュメール、アッカドの地を目指す場合、ユーフラテス川沿いにシリア沙漠の東縁コースが挙げられるほかに、アラビア内陸部からユーフラテス川沿岸に向って流下する無数のワディ（涸河）沿いに移動するコースも選ばれたに違いない。

アンティ・レバノン山脈の東側では、ナフード高地を分水界として、アラビア内陸部は数段ずつの高度差でユーフラテス川沿岸へ傾斜している。そして、無数のワディが各段ごとに生じては、沙漠の中に没していくが、幾つかのワディは、各段ごとの水を集めて、ナフード高地からの長い流路を蛇行させながら、イラク西南沙漠を横断してバビロニア地方へと流れている。その中で、ワディ・ウバイド (Wadi al Ubayidh) はカルバラ市西方のラザーザ湖 (Bahr al Razaza/Bahr al Milh) へ、ワディ・ヒール (Wadi al Kherr) はナジャフ市の郊外のナジャフ湖 (Bahr al Najaf) へ注いでいる。河床には、所々に、乾季にも水たまりが見られ、沿岸には、葦やラクダ草が繁茂し、ナツメ椰子の栽培も可能である。古バビロニア世界へ波状的に移動して来たアッカド人、アモール人またアラム人達は、こうした地形を利用して、アラビア内陸部からワディ沿いに移動してこなかったろうか。かような構想は私を、バビロニア地方の西南方に広がるカルバラ台地、さらにその西方に連なるアブディビス凹没地 (Abu Dibbis Depression, ラザーザ湖はこの中に存在する) からワディ・ウバイド、ワディ・ヒールが流れるイラク西南沙漠の自然と遺跡調査行¹⁾に駆りたてた（図1）²⁷⁾。

2. アッタール洞窟の発見

1969年9月、私はカルバラから南西約50キロ、アブディビス凹没地の中心的な地勢に位置したワディ・ウバイドに臨むウハイダル宮殿跡²⁾を目指した。カルバラ台地の砂層は意外にも厚い。前を走るのは、沙漠砂を路肩に肩寄せで行くグレーダー。砂まじりの沙漠路が異常に滑るので、ハンマーで叩くと明らかに固結している。後日、東工大の山田久夫名誉教授の鑑定によれば、石膏質³⁾であることが判明した。車道の左右には、含石膏層を焼いて焼石膏質の粉末（現地語ではjuss）を生産する、かまぼこ型の窯が散在していた。35キロ地点でカルバラ台地は突然、断崖となり、アブディビス凹没地が視界に飛び込んできた。そして、右手の崖地形から半島状に延びた地形に、入母屋風の屋根がかけられたような、礫の堆積した岩山を発見した。その礫層の下に、洞窟の開口部が一列に並んでいる。よく見ると、洞窟は青白色の薄い地層を天井面とし、それに繋がる茶褐色の厚い地層が方形の窓状に開かれ、一定の間隔ごとに水平に連続している。これはと思い、崖錐を登って幾つかの開口部を観察すると、一方の壁はほとんど垂直になっていて、岩塙のような物質が一面に析出しているのに対し、反対側の壁は階段状もしくは腰掛け状に調整され、幾種類の鑿痕を認めた。垂直壁の方向は窟内の奥まで続いている。つまり、調整面は泥灰岩 (marlstone) 層³⁾に入っているクラック沿いに、外された面であろう。また、開口部が一定の間隔ごとにあるということは、一定の間隔でクラックが一定方向に走っているからである。また、風成砂まじりの中疊、細疊が天井面近くまで堆積している窟内では、岩壁は前後の見通しが利かないように鋭角に入り組みながら通路状に仕上げられ、ところによっては、クラックに沿って方形に深く掘り下げられた部屋もあった。

* 国士館大学名誉教授

本稿の内容は1999年10月15日開催、日本沙漠学会季節フォーラム'99秋（於、成蹊大学）で講演した。

(2000年2月9日受理)

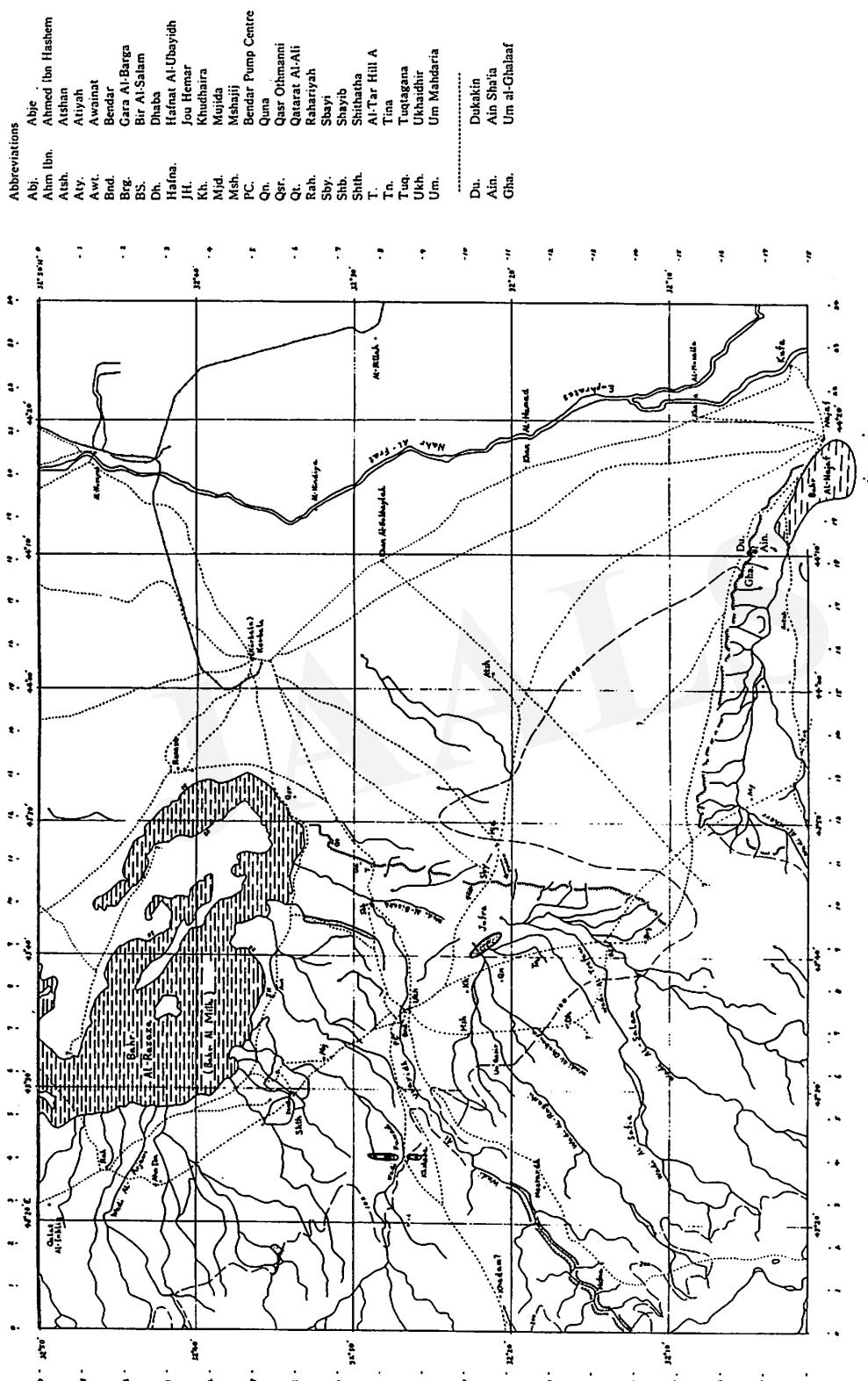


図1. カルバラ台地、アブディビス川流域、(WUSHIKI, 1976, Fig. I-20に、DukakinとAin Shahaを加筆)

イラク考古庁はアッタール洞窟の成因を単に水蝕、風蝕などの自然の營力によるものと考え、また考古学的にみて、この洞窟を利用した集団の活動した痕跡はないと言主張した。私はこれに対し、上記に述べた外観上の事項に加えて、洞窟が占める地理的位置にも言及し、洞窟はカルバラ、バビロンを背後にしたカルバラ台地西縁の崖地形に位置し、かつ、イラク西南沙漠を背負うアブディビス凹没地に向かっている。従って、ワディ・ウバイド沿いにアラビア内陸部からバビロニア地方へ移動する民族や集団の活動に対し、監視哨的な機能を果たすべく、計画的に泥灰岩層のクラック面を利用して掘削された可能性があると述べ、発掘調査の必要性を求めた。論争すること一年、同国政府は外交ルートを通じて、私に、この地域の発掘調査の要請をしてきた。これを受け、私は1971年、72年は海外技術協力事業団から派遣され、さらに科研費を得て、73年、75年、77年次にアッタール洞窟及びその周辺地域の調査を実施した。

3. アッタール洞窟の構造上の問題点

(a) カルバラ台地の南西縁の崖地形で発見したこの洞窟をHill-Aと名づけ、付近を探査したところ、A丘の北方向1.2km、南方向2.5kmの崖地形の範囲に総計480の洞窟を数えた⁴⁾。それらはA丘同様に凹没地方向（西南方向）に面しているか、その崖地形から流れるワディに沿っている。ワディは沙漠地帯では、それ自身が移動路として利用されると考えられるので、この場合の洞窟は凹没地から、カルバラ台地へ登る通路に面しているということになる。そして、その内部構造はおよそ、二つのタイプ（A型：幅広い幾つかの複雑な空間（部屋）を有していて、天井面はほぼ水平で床面は凹凸に起伏し、各部屋を連結する複雑な通路を備える。B型：開口部から直線型に、またはT字型に掘られた幅狭な空間で、床面は凹凸に変化していない。）に分類⁴⁾されるが、それらに共通する特徴は、石膏まじり粗礫層の下に堆積した泥灰岩層は、厚さ50～100cmの白っぽく緑がかった青色層を天井面に、それに続く約4mの茶褐色の層が壁面と床面になるように、間隔をあけて入っているクラック沿いに掘り抜かれている。青色層が白っぽいのは、半透明の蒸発物質の岩塩（halite: NaCl）がフィルム状に析出されているからである³⁾。泥灰岩層は青色層と茶褐色層が二度繰り返し堆積し、その下層は厚い硬砂岩層となり、これにはクラックは見当らない。この層序は、パクダード大学地球物理学のアッスィナウイ教授（Professor Dr. S. ALSINAWI）によると⁵⁾、中新統上部ファルス層（the

Upper Fars）である。A丘の泥灰岩層にはSW-NE方向とNW-SE方向にクラックが走っている。それに沿って、かなりの数の方形の部屋、部屋間を結ぶ通路が掘削されたが、天井面は水平に堆積している青色泥灰岩層で、それは下層では75.5m、上層では79.5mを保ち、これにつづく茶褐色泥灰岩層が掘削されている床面は凹凸に起伏し、なかには落差が4～5mに及ぶものもあるが、どんなに深くてもクラックの走っていない硬砂岩層の表面で止まっている⁶⁾。ここで興味をひく問題点は、どうして造営者が青色泥灰岩層を天井面になるように、そして、茶褐色泥灰岩層を掘り込んで床面と壁面を作ったかということである。この工作法は同一の層序を示すカルバラ台地の南崖線に展開するドカキン（Dukakin）洞窟やウム・アル・ガラーフ（Um al Ghalaaf）洞窟にも均しく観察された。これについて、造営者たちは、崖地形で茶褐色泥灰岩層が甚だしく抉られたような状態で崩れ、その上の青色泥灰岩層が、かさぶた状に張り出している個所や、近くのワディの河床で茶褐色泥灰岩層が水蝕を受けた後、青色泥灰岩層が板状に残っている状態を見つけ、茶褐色層が水に崩れ易いのに対し、青色層は水に崩れ難い⁷⁾と観察して、これを天井面に充てるよう掘削したためではなかったか⁸⁾。

(b) 次に、A丘のみでなく、発掘調査したC丘の12、16、17洞窟に共通する事項としては、幾つかの部屋を除いて、泥灰岩の中疊、細疊が窓外から吹き込んだ沙漠砂に覆われて、天井面から1m内外の高さまで各部屋や通路に堆積していることである。そうした堆積物によって被覆された堆積ライン下の壁面、床面には、直線型や魚鱗型の壁痕が極めて新鮮に遺されている。また堆積中のそれらの疊の表面にも新鮮な打裂面が認められる。従って、そうした疊は壁や床を掘削した際に生じた岩屑であろう。しかし、発掘後、一年も経過すると、それらの壁痕は新鮮さを失ってくる。この事は、泥灰岩は風蝕や水蝕に侵され易い岩質であること、従って、洞窟は掘削されてから余り時間が経過しないうちに、人為的に埋められた可能性も否定できない。そうであるとすれば、奥室を掘った際の廃疊をそれ以前に掘った前室へと順々に投棄していくと考える事も推理の一つである。それにしても、精妙な程に調整された床面や壁面が何故、無造作に、埋められていったのか、最初の掘削目的は何であったのか、単に埋葬施設として掘削されたものか、この疑問は今なお解き得ぬ謎として残っている。

4. 染織資料とその意義

アッタール洞窟を特徴づける代表的な出土品は約5000点余を上まわる染織品の断片資料⁹⁾である。それらが発掘された区域では、押し並べて、風成砂によって覆われている砂礫層を約30センチ程除去すると、織物断片が姿を現わす。その場合の一例（A丘F6洞窟1,2室）を略述すると、魚鱗型の盤刃で床面が調整された直上に、泥灰岩の中疊、細疊が堆積し、それらが均らされた上に、綿糸を藪草で編んだゴザが敷かれ、その上にパイル織物（絨毯）が重ねられ、さらにその上に、生前本人が着用していたと思われる織物でくるまれた遺体（骨）が置かれている。この埋葬様式は、今日のイラク人が堅く、たたきしめた土間の上に藪草製のゴザを敷き、その上にパイル織物を敷いて生活している様式と合致する¹⁰⁾。さらには花柄文を鎖縫いしたラクダ皮の鞍下を共伴する場合もある。染織資料は大部分が羊、山羊、カシミヤ、ラクダ等の獸毛繊維で、植物繊維としては綿、亜麻、藪草がそれぞれ数パーセントずつ検出され、絹織物は確認できなかった。織構成で注目されることは、パイル織物、ゴザ等の厚手の織物を織る時、経糸にカシミヤ、ラクダ、山羊のいずれかの繊維がそれぞれ羊の繊維と撚り合わされた空糸¹¹⁾が使われている。羊繊維は弾力性に富んでいるが収縮性も強い。他の獸毛繊維は収縮度は小さいが、より強韌であるので、両者を撚り合わせることにより、経糸の寸法変化を防ぎ、織物全体の形崩れを生じないようにしたにちがいない¹¹⁾。文様の多くは、縦織技法で表現されている。その文様帶は花柄文、樹木文、葡萄文で構成され、東地中海沿岸地方のドュラ・エウロボス、パルマイラー、レター洞窟出土のそれらと類似するが、アッタール洞窟出土品は文様帶が幅広で、文様自体は直線的である。また、薄地の大布にデザインされたH文（ギリシア文字のeta）やΓ文（ギリシア文字のgamma）及び円文の連続文をもつ織物も出土している¹²⁾。ここで注目すべきは、前1世紀-西暦3世紀、南ジャジーラ草原において、パルティア、ローマ、ササン朝ペルシアの軍団と対等の戦いを演じた隊商都市ハトラの王族（サントルックI世、II世ら）、貴族、僧官の人物像である。彼ら人物像の着衣（チュニック）にデザインされた葡萄文帯、花樹文帯、円文帯、また袈裟風の巻衣に見られるH文、Γ文のデザインは、いずれもアッタール洞窟出土のものと類似している¹³⁾。さらに、特記すべきことは、アッタール出土のH文、Γ文などの文様に、ティリアン・パープル（貝紫）もしくは、それをかけ合わせた染料や、ケルメス、

インディゴなどが使われ¹⁴⁾、この点でも、パルマイラー¹⁵⁾など東地中海沿岸地域出土のH文、Γ文デザインの織片と共に通している。H文はドュラ・エウロボスのペル神殿のフレスコ画（人物像コノン）やユダヤ教会礼拝堂の壁画の人物像群に、円文はハトラのヘレニズム風神殿やバールベック、アファミア等の東地中海沿岸の神殿のarchitraveやfriezeにも認められ¹⁶⁾、それは西暦1-3世紀頃に盛行したバール神（雷の神）の象徴とも考えられる。

ヘレニスティックなポートレイトを縦織で豊かに表現したエムブレム10点の二種類が大布に縫いつけられて出土した、ワッペンであろう¹⁶⁾。一種類の胸像はダイオニソスが女性の姿で表現され、頭には球型を配したディアデムを巻き、髪飾りには赤い葡萄の実と葉をあしらった蔓を用いている〔類似のモティーフはハトラ内城壁にレリーフとして嵌めこまれていたが、1994年盗まれて国外へ流出した¹⁷⁾〕。この場合、胸像の上下方向と経糸方向は一致し（たて織）、縁飾りは二重で、外側の縁飾りの上下には胸壁文、左右には鋸歯文が縦織で織られている。他の一種類は金色の冠を頭上に載せたり、宝石を散りばめた飾り帽子を被っている女性像で、胸像の縦方向は経糸方向と一致し（よこ織）、波頭文が縁飾りとして四周している（いずれもC丘16洞窟出土）。そして、化粧の濃淡は先染めされた色糸を適宜、混ぜ合わせて紡いだ、ぼかし糸を駆使して表現し、また、生き生きした表情は経糸に対して、緯糸を斜めに交わせる“流し”の技術で成功させている。このような技法はアンティオキアの歩廊モザイック積みにみられるダイオニソス像を含む一連の製作技法¹⁸⁾に通じるものがある。ハトラのGrand Templeの中のsmall southern Iwanのフリーズに刻まれた楽士隊の胸像は3/4正面描写を示しているが、これは、これらアッタール出土織物に描かれた胸像の斜め描写に合致している¹³⁾。

アッタール出土の染織資料は明らかに、アッタール洞窟が埋葬に使われた一時期の特性を示している。C14の検査結果でも、前記のダイオニソスを象徴するエムブレムは 2090 ± 95 でBC140年頃の数値を示している¹⁹⁾。そしてこれらの染織資料は、デザイン上のモティーフなどから前1-西暦3世紀のハトラ文化の特性を十分に証拠づけるものであると共に、東地中海沿岸各地に渦巻いていたヘレニズム文化の潮流との関係を明らかに示唆している。この時期に、どうのような民族や集団がイラク西南沙漠地方で活躍していたか、ハトラの占位する南ジャジーラ草原はイラク西南沙漠の北側に隣接する地域であるので、両者はユーフラテス川沿いに互いに接触しあえる地域であることに注目しなければならない。

5. ナジャフ凹没地におけるAIN・シャイア(Ain Sha'ia) のカナートなど水利施設

アッタール洞窟の造営目的と機能を究めるためには、カルバラ台地の崖地形に点在する洞窟の分布とそれに結びつく平地遺跡の概査が必要である¹⁹⁾。この結果、カルバラ台地の南崖地形(ナジャフ凹没地に面する地域)で、ナジャフから西約22kmのAIN・シャイア地域に、1973年9月、アッタール洞窟群と比較できる程の一列の開口部をもつ洞窟群(青色泥灰岩層を天井面にして、茶褐色泥灰岩層に壁と床面を掘削している)を発見した。アラビア語で商店街を意味するドカキン(Dukakin)洞窟(発掘の結果はネストリウス派教会修行僧の坊址と推考された²⁰⁾)がそれである。そして、麓に広がる扇状地形の東隅に約200株程のナツメ椰子の林とそれを涵養している池があった。湧水個所からは、かなりの水量を自噴している。その個所からさらに50m程、北の叢地に、石製の蓋で被われた地下水道(Qanat)からの取水孔を発見した。9月という暑くて、乾燥の季節にも拘らず、底には水が流れていって、流下する方向に長方形のマウンド(発掘によって明らかになったのは、周壁をめぐらした西暦8-11世紀頃のネストリウス派の教会堂址: Site F)²¹⁾を認めた。この取水孔の北東側には海拔約45m程の崖地形が東西に連瓦している。この区域は扇状地形の内側に位置しているので、このカナートは明らかに、崖地形の滲水層からの引き水であろう。従って、これを追求することにより、近くに平地遺跡が発見されるであろうという期待感に充たされた(図2)。

1986年から3カ年、日本私学振興財団から学術振興資金を得て、ドカキン洞窟と平地遺跡が展開するであろうAIN・シャイア地域の発掘調査を進めた。

カナート²²⁾はAIN・シャイアのE区に位置し、その後背の崖地形の稜線は海拔46mラインである。カナートに水を集め母井の開口部はその測点付近に位置し、開鑿部近くの露頭には、この井戸を掘ったと考えられるShammal族の記号△²³⁾が刻まれていた。計測された井戸の深さは約7mで堆積物を確認し、青色泥灰岩層、茶褐色泥灰岩層、硬石膏層を抜いて、砂岩層中に達しているが、その底は確認できていない。その井底は第1取水孔の水位約19mから推し、地表面下約27.0mと推測される。検出したカナートの取水口は5ヶ所で、崖寄りの第1取水孔の水位は海拔約19m(地表面からの深さ約3m)、第5取水孔の水位は海拔約18m(図3,4)、さらに、第1トレントから9つのトレントでは、水路が開水路とな

って、Site F方向へ流下していることを確認した(図2)。

また急斜面で崖錐に臨む崖地形上のD地点(海拔約60m)には、台地上のワディの流れを一時的に塞き止める堤防状の施設址があり、そしてその断崖下の谷間に、その崖地形からの土石流で押しつぶされたような建造物址(Site C)²⁴⁾を見出した。その谷間から流下するワディが第二段のテラスに流れ落ちる第一段のテラスの末端近くに、15×10m、深さ160cmの貯水槽(Site B 19番スポット)²⁵⁾の発掘に成功した。その壁の内側は炭片の混じった石灰質のモルタル(現地語ではnura)で塗られ、防水機能を果たしたと見られる。ここにも崖線からの水を引くカナートとワディの水を集めるカナル施設があったと考えられる。12-3月の雨期に、年平均約100mmの降雨しか見られないこの地方で、これらの施設が存在したという事は、乾燥地域において、人が、ある地域を特定して、集団生活を営むためには、まず水を如何にして確保するかの方策(水利施設)に成功しなければならないかを教えている(この場合は、ネストリウス派教会の修道院生活)。ドカキン洞窟遺跡とAIN・シャイア平地遺跡の発見は、洞窟遺跡と結びついた平地遺跡の発見例であり、特に水利施設の工作は、沙漠地における遺跡の性格を考察する上に、大きく貢献したこととなった。

6. アブディビスDepressionにおけるオアシス群

次に、アッタール洞窟群がアブディビス凹没地に向かい合っている以上、乾燥気候・沙漠地帯において欠かすことのできない水文学的調査を実施し、地下水に係わるオアシス群遺跡の存在を確認し、その水の特徴²⁶⁾を知ることにした。何故なら、沙漠地における遺跡の追求は、まず、湧水地(oases)の発見であり、かつ、その水が年間を通じて、気候状況の如何に拘らず、当該の集団が必要とする一定量を湧水しているか否か、また、その水質が人の生活に適しているか否かという事項に係わっているからである。

アブディビス凹没地には、満々と水を湛えているラザーザ湖があるが、それは天然湖ではなく、ユーフラテス川の水位調節湖として造られた北接のハバニア湖から、導水運河で、水が引かれた人工湖である。ワディ・ウハイドを始め、幾本ものワディが西南沙漠を貯流して、これに流れ込んでいる。湖岸には、水位の上下によって、焼レンガ造の廃墟が現れる時もある。西岸近くには、6-7世紀頃、ネストリウス派のキリスト教を信仰してい

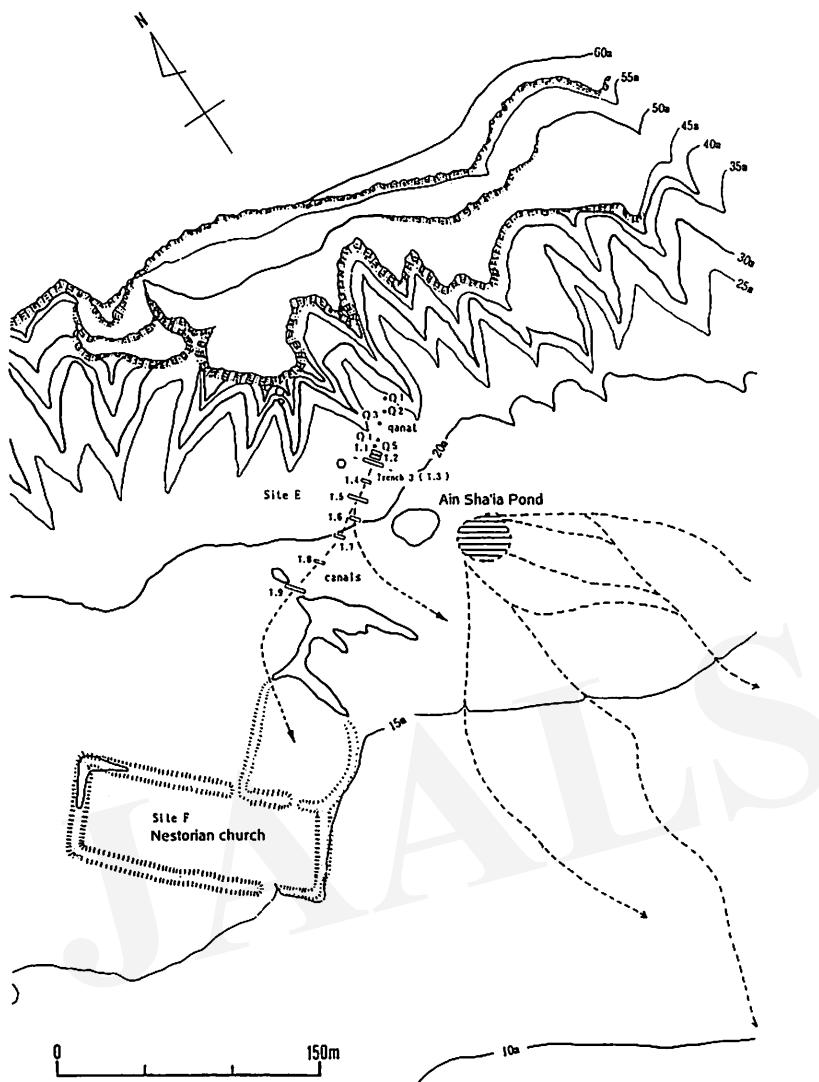


図2. アイン・シャイアにおけるカナートの位置. (OHNUMA, 1989, Fig. 25)

た、ラハリア、シサーサ、クセイルの教会址と遺跡があり、ラハリアとシサーサには、AIN・アル・ザルカ（青い泉、AINニアラビア語で泉）という名がつける程の魅惑的な群青色を呈する泉を始め、豊かな水量を湧水する泉が集中している。

1972年には、アブディビス凹没地におけるオアシスの分布と水質を調査するために採水班を編成した。湧水地の水を、天然の湧泉、自噴井戸（artesian well）、ポンプで汲み上げる井戸の場合等に区別した。さらに私達は、ラザーザ湖、ユーフラテス川、ワディ・ウバイドからの水と天然の雨水を採取し、これらを湧水地別から採取した水との比較研究の資料にした。これらの採取結果に関

する水化学的分析は牛木久雄の論文²⁷⁾に詳しくのべられているので、ここではその要説を紹介することにする。図5²⁸⁾、図6⁵⁾によると、調査したこれ等の泉の湧出地は連鎖状に分布し、しかも、被圧水頭の地表下深度の0メートル等値線の上には位置していない。つまり、これ等の泉の水は自由地下水滯水層に貯水されたものだけではなく、第三系中新統の地質構造内で、北西から南東方向に走る断層線上に沿って湧水する深層地下水である。アッスィナウイ教授によれば、アブディビス凹没地には、湧泉の分布線に重なって、断層が数列探査されている。そのため、地殻変動によって、地下水の湧水量にも変化があったり、或いは、地下水の湧水点も移動する可能性

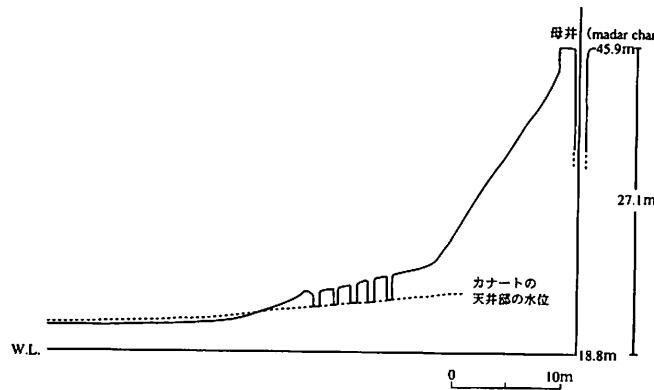


図3. カナートの構造. (SHIBATA, H.)

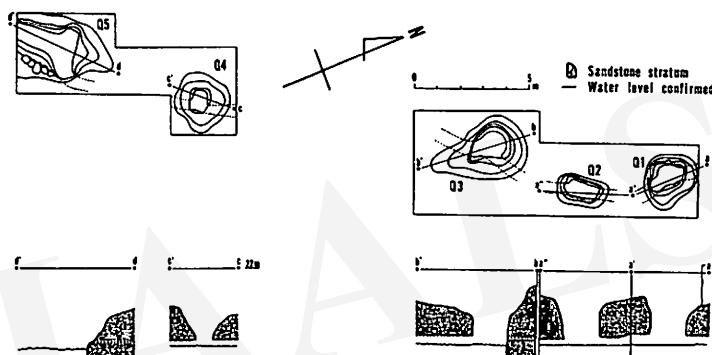
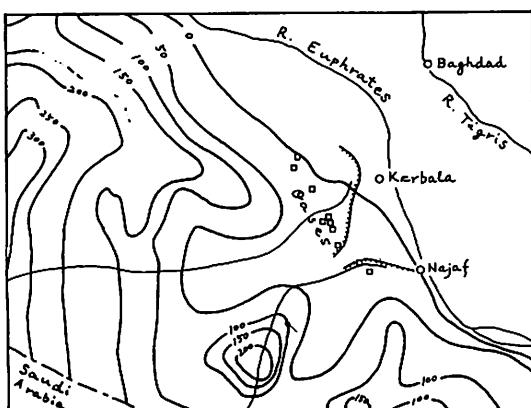
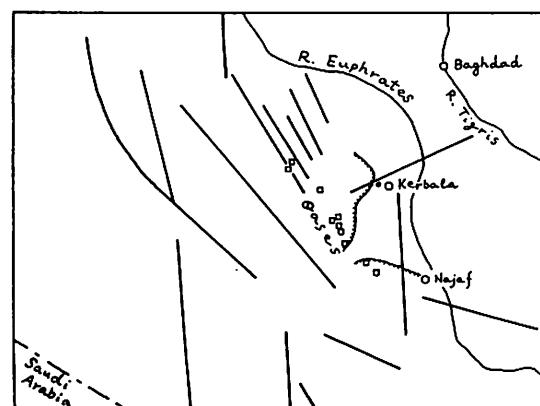


図4. カナートの平面と断面. (OHNUMA, 1989, Fig. 27)

図5. 被圧水頭水位線とオアシスの分布.
(WUSHIKI, 1976, Fig. I-13(A))図6. 断層線とオアシスの分布.
(Wushiki, 1976, Fig. I-13(B))

がある。従って、生活地を放棄する場合も生じてこよう。私達の探査したこれらのオアシス地には、ほとんどの場合、土器片などが散らばっていた。従って、そうした状況から、遺跡地として、かなり活動していた痕跡は残っている。例えば、Mshajijiにおいては、古井戸の傍らに埋められていた焼き煉瓦製の三角型の導水路の方向は真北を指し、その延長線上に、約10kmさきのウハイダル宮殿の南壁中央に造られたアーチの二層目の床面が確認された。すなわち、Mshajijiの泉の湧水口の位置は、ウハイダル宮殿の二層目の床面レベルと一致していることが確認されたので、その古井戸に付設されて埋められていた地下導水路は、土地の古老が伝えているように、南壁一層目のアーチ下をくぐって、ハーレム専用の浴室の貯水槽に通じていたかもしれない。また Khudhaira はウハイダルの南方に隣接する湧水地で、その池の堤に、磨製された石灰岩の表に十字を刻んだ表識板が半ば埋もれていた。従って、この地にも、キリスト教を信仰する人々の生活があったに違いない。ここに例示した Mshajiji や Khudhaira には、今日、人々は生活していない。しかし、そこには、古井戸や廃墟があったり、或いは水たまりの

ような小湧泉が息づいていて、明らかに遺跡地であることを示す遺物も確認された。何故、これらの土地から人々が去っていったのか。その原因としては、このアブディビス凹没地域はメソポタミア地殻変動帯に属し、地殻変動によって、地下水脈が移動し、それに伴い、オアシス社会が変遷したと推測される。この地域で採取された泉の水は、概して硫酸水素の臭気が強い。

水の起源を追求する同位体水文学 (Isotope hydrology) の手法により、水に含まれる重い同位体成分の重水素 (deuterium) と酸素18 (oxygen-18) の割合を測定したところ、表1と図7に見られる成果が得られた [WUSHIKI and KUSAKABE, 1981 : 国際湖沼学会における報告] ²⁹⁾。すなわち、採取したオアシスの水、ユーフラテス川の水、1977年・78年にカルバラに降った雨 (調査隊の宿舎はカルバラにおかれていた) の安定同位体を調べた結果、オアシス各地の水の測定値は、ほぼ一個所にプロットされていて、平均降水量とユーフラテス川の水とは、かけ離れた数値を示している。つまり、オアシスの水は、現在の現地降水とは無関係であり、その水を集めて流れるワディの浸透水でもなく、ユーフラテスからの水でもない

表1. アブディビス凹没地における水の同位体成分。
(WUSHIKI and KUSAKABE, 1981, Table 1)

Water origin	E.C. 25°C μs/cm	Chlorinity mg/l	Temp. °C	δD ‰	δ ¹⁸ O ‰
1972/73					
<i>Shithatha oasis</i>					
Hamra	2860	—	24.0	-16.1	-0.12
Sib	2860	550	24.0	-20.6	-0.74
Zarqa	2810	—	24.5	-20.8	-0.99
Others					
Ahmed Ibn Hashem	2770	600	24.8	-15.6	+0.30
Shayib tube well	2950	550	25.0	-19.6	-0.86
Khudhaira	3320	640	14.3	-20.2	-1.09
<i>Wadi Al-Ubayidh</i>					
Hafnat	450	—	12.0	-1.4	+1.00
Shayib	1550	110	15.0	-19.1	-3.29
Rain (12 samples) weighted mean				+13.1	+2.49
1977/78					
<i>Shithatha oasis</i>					
Hamra	—	—	—	-18.7	-2.15
Sib	1980	510	25.1	-19.4	-1.98
Zarqa	—	505	25.3	-20.0	-1.95
Gwani	1900	515	25.3	-20.8	-1.93
<i>Ukhaidhar oasis</i>					
Tube well-I	—	—	—	-21.5	-2.16
Khudhaira	2600	590	16.8	-20.0	-2.01
Mshajiji	—	—	—	-21.2	-2.28
Aziz	1870	490	24.3	-20.8	-2.15
Shayib tube well	—	—	—	-22.1	-2.12
<i>Rahariyah oasis</i>					
Bukhaiti	2200	650	24.2	-20.6	-2.18
Fashashi	—	625	—	-19.6	-2.30
Zarqa	2650	625	25.5	-20.8	-2.13
<i>Wadi Al-Ubayidh</i>					
Shayib	—	—	16.8	+0.1	+1.74
Rain (22 samples) weighted mean				-7.22	-2.42

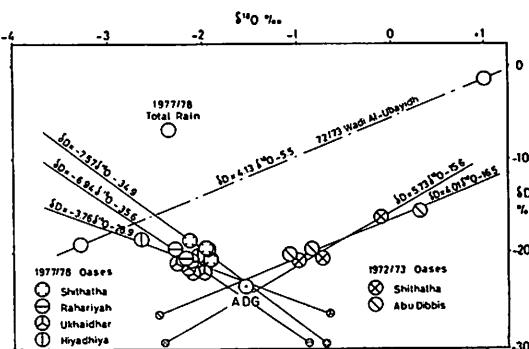


図7. アブディビス凹没地における水の重水素と酸素18の成分比。(WUSHIKI and KUSAKABE, 1981, Fig. 2)

事が立証された。換言すれば、これらの地下水は、深層に涵養された古地下水が断層線を通じて上昇し、ワディ河床に近い第三系中新統の露頭の裂目から噴出／流出している。

この成果は重要で、イラク西南沙漠における発掘調査のみでなく、北アフリカから中央アジアに及ぶ乾燥アジアの遺跡（ちなみに、メソポタミアでは、テルの興廢）調査に寄与するところ、甚だしと評価できる。つまり、現在の気候状況の如何にかかわらず、深層地下水の流出する露頭の近くには、これを発見し、利用した人間集団の生活空間があったはずである。すなわち、水の安定同位体による研究法は、遺跡の検出に多大の貢献を果すことになる。また遺跡を発見したとき、遺跡を形成させた原動力ともなる地下水の水文学的調査は欠かせない。その地下水が付近の河川やワディからの影響を受けたものか、それとも深層地下水によるかによって、その遺跡に対する調査法と判断基準を作りかえる必要がでてくるからである。

アブディビス凹没地において、連鎖状に繋がるオアシス群は、そのほとんどが古地下水による水と判断され、また地殻変動による構造線の移動によって、地下水の湧出点の移動を生じ、遺跡の興廢を招いたことを識った。アッタール洞窟の泥灰岩層に生じたクラックも、この地域の地殻変動による影響が大であると、アッシィナウイ教授は考えている。

7. おわりに

湾曲して流れるユーフラテス中流の河岸を短絡するために、ラマディ・ナジャフ間に結ぶキャラバンルートがアブディビス凹没地を縦断したり、或いは途中からカル

バラ台地に登って通じている。その経由地は図1に点線²⁷⁾で示す通りで、いずれも調査したオアシス地を経由している。しかも、この地域は、アラビア内陸部からワディ沿いにバビロニア地方を目指して東進して来るコースと錯綜しているため、オアシスを拠点として、各集団は交流し、活躍したに違いない。アッタール洞窟が立地するカルバラ台地の崖地形の硬砂岩層面に、アラマイク風の書体、部族の記号、騎馬人などが線刻されているが、ワディ・ウバイド中流のハフナの岩壁にも、これに対応するかのように、アラム文字や部族の記号²³⁾が刻まれていた。いずれも、その地を通過するか、活動圏とする集団の足跡であろう。

イラク西南沙漠という自然環境は、そのルートを通じて、例えれば、貝紫で染められた糸もしくは、製品化されたH文、F文のデザインをもつ巻衣の輸入^{13), 14)}を考えられ、西方の東地中海沿岸地域との間の民族、文化交流を追求する点で、重要な役割を演じている。従って、調査・研究上、さらなる成果をあげるためにには、従来にもまして、集団が、民族が過酷ともいるべき沙漠世界の諸条件を如何にして克服し、これに対応していったかを地球科学的側面（水文学、地質学、地形学）から、一層に追求する必要があることを、ここに提言する。

注

- 1) Fujii, H. (1976): Introduction. In Fujii, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University (I.C.S.A.I.), Tokyo, 1-14.
- 2) ウハイダル (al Ukhaidher)。この宮殿は高さ約21メートルの城壁を、磁北に対して、ほとんど正確に南北方向 (175.8メートル) と東西方向 (163.6メートル) に配置し、それぞれの壁は、10個ずつの半円塔（見張指揮所）と矢狭間や油流しの防御施設を備え、四壁の中央には、それぞれ二層のアーチをもつ城門がある。内部の生活空間には、ハーレム機能を持つ居室を中心として、文官、武官の執務室、礼拝所、また、城壁構造内に、敵の侵入に際して、退避しながら反転攻撃をしかける迷路空間などを設けている。アッパス朝2代目カリフ、アル・マンスール (754-775 A.D.) の頃の築造ではないかとされている。このような宮殿要塞がワディ・ウバイド沿いで、アブディビス凹没地の中心に建設されたという事は、この地が既に当時、湾曲して流れるユーフラテス川中流のラマディとナジャフの両岸を短絡し、カルバラと結ぶために開かれたオアシスルートの要衝に位置していたことを示している。
- 3) この調査で採集した岩石片、土器、石器などを化学分析し、かつ調査に参加された山田久夫東工大名誉教授らの観察によると、青色と茶褐色の岩石資料は泥岩 (mudstone) 或いは頁

- 岩 (shale) に比べて石灰 (CaO) を顕著に含有しているので、泥灰岩 (marlstone) とされた。YAMADA, H., OSSAKA, J. and OHIRA, Y. (1976): Petrological and mineralogical studies on the finds from Al-Tar Caves, together with the Rocks and the Soils distributed around them. In FUJII, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, 276-284, Tables IV-23, IV-25, Figs. IV-61, IV-62, IV-63.
- 4) MATSUMOTO, K. (1985): Cave distribution survey in the Al-Tar Area. *Al-Rafidan*, V-VI: 14-27, I.C.S.A.I.
 - 5) ALSINAWI, S. (1972): The prospects of seismological research in Iraq. *Proc. of the First Scientific Conf. of National Research Foundation of Iraq*, March.
 - 6) MATSUMOTO, K. (1976): Features of cave-construction. In FUJII, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, 96; Fujii, H. and Takemura, T. (1976): Overall measurement of hill A. In FUJII, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, 46-52, I.C.S.A.I.
 - 7) 青色泥灰岩と茶褐色泥灰岩との構造上の差異は、顕微鏡的には認め難いが、示差熱分析 (D.T.A.) によると、青色泥灰岩は 700°C 付近の吸熱反応で、茶褐色泥灰岩に対し顕著に鋭いピークを示している³⁾。本調査に参加された浜野健也東工大名誉教授は中川善兵衛秋田大学教授と共に、X 線回析をされた結果、茶褐色泥灰岩から、膨潤性が大で、水中で崩れ易いアタパルジャイト [atapulgite: $Mg_5Si_8O_{20}(OH)_2 \cdot 8H_2O$] を検出し、これを水壊実験で実証された（青色泥灰岩も、多少とも、この物質を含んでいるが、水壊性はほとんど認められない）。アタパルジャイトは粘土鉱物の中で、塩類の濃集が著しいところで生成するとされ、沙漠地帯の堆積物には、このような塩基性の粘土鉱物を多く含んでいる。
 - 8) FUJII, H. (1976): Epilogue. In FUJII, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, 332, I.C.S.A.I.
 - 9) OGAWA, Y. and NARUSE, N. (1976): Textiles and allied materials. In FUJII, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, 120-201; 藤井秀夫編 (1980): イラク、アル・タール出土染織・皮革の研究。「ラフィダーン」I, 国立館大学イラク古代文化研究所。
 - 10) FUJII, H., SAKAMOTO, K., ICHIHASHI, M., SADAHIRA, M. and FIBERS OF TEXTILES LABORATORIES, TORAY INDUSTRIES, INC. (1991): Textiles from At-Tar Caves Part II-(2): Cave 16, Hill C. *Al-Rafidan*, XII: 157-165, Pls. 1-4, I.C.S.A.I.
 - 11) FUJII, H. and SAKAMOTO, K. (1990): Textiles from At-Tar Caves Part II-(1): Cave 16, Hill C. *Al-Rafidan*, XI: 45-65, Pls. 1-3, I.C.S.A.I.
 - 12) FUJII, H., SAKAMOTO, K. and ICHIHASHI, M. (1989): Textiles from At-Tar caves Part I: Cave 12, Hill C. *Al-Rafidan*, X: 109-165, Pls. 27-37, I.C.S.A.I.
 - 13) FUJII, H. and SAKAMOTO, K. (1994): The close relationship between Hatra sculpture designs and At-Tar textiles designs. *Al-Rafidan*, XV: 73-76, I.C.S.A.I..
 - 14) KIMURA, M., SAKAMOTO, K. and FUJII, H. (1993): Studies on identification of the natural dyes on the textiles from at-Tar caves. *Al-Rafidan*, XIV: 141-148, I.C.S.A.I.
 - 15) SCHMIDT-COLINET, A., STAUFFER, A. und AL-AS'AD, K. (1999): *Die Textilien aus Palmyra, Neue und Alte Funde*. Deutsches Archäologisches Institut, Orient-Abteilung, Damaszener Forschungen Band 8.
 - 16) FUJII, H., SAKAMOTO, K. and ICHIHASHI, M. (1994): Human-figured emblems by tapestry — weave technique unearthed from At-Tar Caves. *Al-Rafidan*, XV: 77-89, Pls. 1-10, I.C.S.A.I.
 - 17) FUJII, H. and OGUCHI, K. (1996): *Lost Heritage—Antiquities Stolen from Iraq's Regional Museums, Fascicle 3*—, cover illustration, I.C.S.A.I.
 - 18) LEVI, D. (1947): *Antioch mosaic pavements*. Pl. CLXII, Princeton; 道明三保子 (1980): 染色遺物の研究 III-1 人物文様. 藤井秀夫編 (1980): イラク、アル・タール出土染織・皮革の研究。「ラフィダーン」I : 108-114, 国立館大学イラク古代文化研究所.
 - 19) KAWANA, T. (1985): Physiographic setting of caves along the cliffs of the Kerbala Plateau. *Al-Rafidan*, V-VI: 6-13, I.C.S.A.I., FUJII, H. (1989): Introduction of the excavations at Ain Sha'ia ruins and Dukakin caves. *Al-Rafidan*, X: 27-33, I.C.S.A.I.
 - 20) MATSUMOTO, K. (1989): Dukakin caves. *Al-Rafidan*, X: 81-88, I.C.S.A.I.
 - 21) OKADA, Y. and NUMOTO, H. (1989): Fortified building-Site F. *Al-Rafidan*, X: 35-61, I.C.S.A.I.
 - 22) SHIBATA, H. (1989): Topography. *Al-Rafidan*, X: 33-34, Fig. 3, I.C.S.A.I.; OHNUMA, K. (1989): Qanat system-Site E. *Al-Rafidan*, X: 62-67, Figs. 25-30, I.C.S.A.I.
 - 23) KAWANA, T. (1985): Inscriptions of Nomadic Tribes in the Al-Tar area of the Kerbala plateau. *Al-Rafidan*, V-VI: 63-65, I.C.S.A.I.
 - 24) MATSUMOTO, K. (1989): Site C. *Al-Rafidan*, X: 78-81, I.C.S.A.I.
 - 25) MATSUMOTO, K. (1989): Site B, Spot 19. *Al-Rafidan*, X: 70-72, Fig. 31, Pls. 17, 18, I.C.S.A.I.
 - 26) FUJII, H. (1976): Epilogue. In FUJII, H. ed. (1976), *Al-Tar I*, 330-331, I.C.S.A.I.
 - 27) WUSHIKI, H. (1976): Stable isotopes of the oasis and other meteoric waters in the Kerbala-Abu Dibbis region. *Al-Tar I*, 27-43, I.C.S.A.I.
 - 28) AHMED, A.M. and KRAFT, W. (1972): A contribution to the hydrology of the western desert of Iraq. *J. Geological Society of Iraq*, 5: 135-148.
 - 29) WUSHIKI, H. and KUSAKABE, M. (1981): Juli, Stuttgart: Isotope hydrology of oases in the Abu Dibbis depression, Iraq. *Verh. Internat. Verein. Limnol.*, 21: 125-129.

The Natural Environment of the Southwestern Desert of Iraq and the Hellenistic Culture: The Caves of at-Tar, *Qanat* Water System of Ain Sha'ia, and Oases of the Southwestern Desert

Hideo FUJII*

When travelling from the East Mediterranean coast towards Babylonia, the route along the Euphrates was no doubt one of the trunk roads traditionally used from earlier times. However, the present author believes that numerous *wadis*, originating in the Nafud Highland and descending the Southwestern Desert of Iraq to the Abu Dibbis Depression, and eventually to the Euphrates, were the routes which some groups of the Semitic-speaking peoples took when moving into the Mesopotamian heartland. On this assumption, we have explored this particular Iraqi desert, researching into problems from a viewpoint of the interaction between ancient people and natural environment. Discovered through this exploration are the caves of at-Tar and a *qanat* water system at Ain Sha'ia, which we have so far excavated. The area is characterized by an extensive sedimentary rocks of the Upper Fars Formation of the Miocene in geology.

In at-Tar caves, located on the cliff line of the Kerbala plateau, some 5000 pieces of textiles relating to inhumation have been found. The textile designs at at-Tar are similar to those known at Palmyra, Dura-Europos and the Letter Caves, including decorative elements connecting with not only the East Mediterranean coastal region but also Hatra in the Jazirah. We are thus convinced that the textiles from at-Tar, showing features of the Hellenistic culture, are dated between the 1st century B.C. and the 3rd century A.D.

The survey at the rock fan along the precipice line area about 22 km west from Najaf has yielded the Ain Sha'ia pond (about 18 m above sea level) where about 200 date palm plants are fed and an artesian well, the source of the very pond, and the otherhand, among the bush about 50 m northward, a discharge point of spring with stone cover whose water is drawn from the Qanat. Moreover, at the ridge of the precipice placed behind the discharge point, there has been discovered a hollowed opening of the *mader char* (about 46 m above sea level). Its bottom seems to be about 27m deeper than the surface, judging from the shaft No.1 of 19.0 m in water level (Fig. 3). The *madar char* is evidenced finally reaching sandstone strata, going through the Upper Fars Formation of the Miocene, i.e., bluish-white marlstone strata, brownish marlstone strata, anhydrite strata and mudstone strata on the way. The discharge shafts so far investigated are five in all, where the shaft No.1 located nearest the precipice is about 19 m above sea level, its depth about 3.0 m. Furthermore, at the trenches No.1-No.9, the waterway has became an open canal with its course running down toward the rectangular mound ruins, which is the Nestorian church site with surrounding walls, dating back to about 8th-11th centuries A.D. (Fig. 2).

In addition, we have carried out a hydrological survey in the Abu Dibbis Depression spreading over an area at the eastern extremity of the Southwestern Desert of Iraq. The survey have confirmed that (1) the locations of oases show a chain-like distribution along a sub-surface fault line (Fig. 6); that (2) spring water at each oasis sometimes varies in quantity, which incidentally causes the unavailability of an oasis; and that (3) new discharge points of spring may appear from place to place. Such phenomena, principally caused by a tectonic movement, seem to affect the continuity of occupation at an oasis; in other words, when water did not spring up temporarily, such an oasis would be inevitably abandoned. Further, the isotope analyses (deuterium and oxygen-18) of spring water indicates that their origin is not from recent ground water fed by rain, wadi and river water, but from appreciably aged ground water. The present author suggests here that the confirmation of a place where such aged ground water wells up may give a clue to the detection of ancient occupation.

Key Words: Natural environment of the Southwestern Desert of Iraq, the caves of at-Tar, Unearthed at-Tar cave's textiles, the Hellenistic culture, *Qanat* water system of Ain Sha'ia, Oases of the Southwestern Desert, The Upper Fars Formation of the Miocene, Tectonic movement, Aged ground water

* Emeritus Professor of Kokushikan University

(Accepted, February 9, 2000)